

大学教育センター年報

第 15 号



平成23年3月

茨 城 大 学
大学教育センター

目 次 (第15号)

	頁
巻頭言 森野 浩 (大学教育センター長)	1
平成22年度教養教育シンポジウム	3
「一橋大学におけるGPA制度への取組」の講演	
「他大学におけるGPA制度への取組」の報告	
「質保証に関するシンポジウム」の報告	
平成22年度教養教育FD研究会	29
「大人数講義法の基本スキル ～よい講義をするために～」の講演	
各基礎教育専門部会からのFD報告	55
授業アンケートの結果について	73
教養科目推奨授業選定の経過及び結果	109
ニュースレター「ローザ・プルムラ」の軌跡	111
: No.40 (平成22年4月号) ～No.41 (平成22年10月号)	
理系質問室の活動報告	127
初年次学生の欠席者調査報告	129
多読室利用状況報告	131
平成22年度大学教育センター活動内容	133
(1) 学外シンポジウム等の参加報告	
(2) 大学教育センター活動の経過	
(3) 大学教育センター関係委員名簿	
(4) 大学教育センター理系基礎教育部教科書編集委員会報告	
平成22年度大学教育センター専任教員研究活動	167
平成22年度大学教育センター年度計画実施報告対処資料	175

巻 頭 言

茨城大学大学教育センター長
森野 浩

平成 22 年度のセンター年報の巻頭言をのべるにあたり、まず、今回の大震災・津波・原発事故で被災された方に心よりお悔やみとご同情を申し上げます。

さて、第二期中期計画と就業力 GP、そして新学部構想のことについて述べておきたい。これらのうち、前 2 者はどこかにおいて紹介された事柄であるが、センター及び大学の教養教育にとって重要なことである。

大学教育センターが関わる第二期中期計画の重要なものとしては、「授業の精選」、「GPA 制度、CAP 制度の本格導入」などがある。これらは互いに関連をもつものである。前者については、ここ数年にわたって特別委員会で議論を重ねてきたところであり、後者については、平成 22 年度から WG で議論を進めているものである。「授業の精選」では、非常勤講師時間の削減と就業力 GP との関連で、はからずも検討課題が具体化された。GPA 制度の本格導入は、本学の長年の懸案であった。本年度における集中的審議を受けて、基本的考え方は合意に至った。それは、GPA 制度の目的を、適切な学生履修指導の手段とすること、茨城大学の実情にあった、実施可能な制度とすること、などである。今後、これらの実施に向けた学内の協力が求められる。

就業力 GP は、大学設置基準の改定（キャリア教育の導入とそれに掛かる組織の整備）を受けて始まったプロジェクトである。本学では、人文学部の鈴木敦教授が取り組み担当者となり、「根力育成プログラムの構築」として採択された。この GP の組織的とりまとめ役として大教センターが当たることとなり、キャリア教育部の創設や規則の改定を進めた。平成 22 年度はプロジェクトの目玉の一つである電子ポートフォリオシステムの導入を、IT 基盤センターと協力のもとで行った。このプロジェクトの遂行には、上記の「授業の精選」とポートフォリオシステムの有効活用が不可欠であり、同時に、就職支援センターなどとの緊密な連携が求められる。

教養教育をコアとした新学部構想が、教育ブランド大学を目指す学長から提案された。全学には唐突感を与えつつ、推進会議が立ち上げられ、まず、教養教育の抱えている問題点の議論から始まった。しかしながらこれはセンターとして第二期中期計画で取り上げている課題と重複する部分も多いので、やや迂回的な議論の感がぬぐえない。しかし、教養教育を全学的に考える上では貴重な機会である。充実した議論を来年度に期待したい。

第二期中期計画に対する評価は、大学みずからが選択した機能別分化の観点から行われる。茨城大学の特性をいかに生かしていくかが問われていることを最後に強調したい。

平成22年度茨城大学 教養教育シンポジウム

平成 22 年度 茨城大学全学教育シンポジウム
「茨城大学の GPA 制度導入にむけて」

日程 平成 22 年 12 月 22 日 (水) 午後 1 時～5 時

場所 理学部 インタビュースタジオ

趣旨 茨城大学では、第 2 期中期計画期間中に GPA 制度を導入することになりました。つきましては、制度の設計と運用形態の確立を目指して全学教務委員会の元に WG を設け、WG 案を中心に学内の意見を求めているところです。今回は、GPA 制度について優れた実績をお持ちの一橋大学から講師をお招きし、お話いただくことに致しました。同時に、関係部局からの情報やご意見を発表してもらいます。これらを踏まえて、学内の意見を集約して、茨城大学としての GPA 制度導入に向けて学内の合意を得ていきたいと願っています。

プログラム

- 13:00～13:15 開会の辞 森野 浩 (茨城大学大学教育センター長)
- 13:15～13:20 学長挨拶 池田幸雄 (茨城大学長)
- 13:20～14:20 「一橋大学における GPA 制度への取組」
米山高生教授 (一橋大学大学院商学研究科)
- 14:20～14:45 質疑の時間
- 14:45～15:00 休憩
- 15:00～15:20 「信州大学における GPA 制度への取組」
佐藤和夫 (茨城大学大学教育センター企画実施部長)
- 15:20～15:40 「国際基督教大学における GPA 制度」
岡山陽子 (大学教育センター准教授)
- 15:40～16:20 茨城大学教員から
- 16:20～16:45 総合討論
- 16:45～16:55 まとめの挨拶 勝本 真 (茨城大学大学教育センター教育点検
支援部長)
- 16:55～17:00 閉会の辞 田代 尚弘 (茨城大学教育担当副学長)

司会進行 梅原守道 (茨城大学大学教育センター講師)

主催： 大学教育センター、共催： 全学教務委員会

『全学教育シンポジウム 2010』実施報告

大学教育センター 教育点検支援部

実施概要 シンポジウム副題 茨城大学のGPA制度導入に向けて
日時 平成22年12月22日(水) 13:00～17:00
場所 茨城大学総合研究棟(K棟) インタビュースタジオ
(日立地区・阿見地区へVCS配信)
対象 大学の教職員

平成22年度の大学教育センター主催シンポジウムが標記の通り開催された。テーマはGPAである。茨城大学では、第2期中期計画期間中にGPA制度の本格導入が計画されている。大学教育センターでもこれまで、GPA導入に向けた全学的な議論の足がかりとするため、GPA制度の勉強会を企画してきた。平成21年度には山梨大学から講師を招き、GPA導入に向けた議論を行ったが(平成21年度FD研究会、詳細は年報第14号を参照願いたい)、その流れを継続させより議論を深めることを期して、標記の副題のもとシンポジウムを開催する運びとなった。講師として、GPA導入に関して優れた実績をお持ちの一橋大学から、米山高生教授(一橋大学大学院商学研究科)を招いた。本シンポジウムは、一橋大学におけるGPA制度への取り組み(米山教授による講演)、他大学のGPA制度についての状況調査報告(学内者)、茨城大学のGPA制度の現状報告(学内者)、総合討論の4部構成で進行した。詳細についてはプログラム等を参照していただきたい。

なお、当シンポジウムの参加者は計57名で、内訳は、水戸地区44名、日立地区9名、阿見地区4名(日立・阿見へはVCS配信)であった。本報告には関連資料として下記の書類を添付したので併せて参考にいただきたい。(梅原守道)

添付資料一覧

- [1] 参加者対象の事後アンケート集計結果
- [2] シンポジウム開催および参加者募集の通知文書およびポスター
- [3] シンポジウム当日の配布資料(米山教授による講演スライド資料を含む)



米山教授



講演の風景

GPA制度の本格導入

—社会科学系学生の学習行動は変わるのだろうか?—

2010年12月22日
於：茨城大学



HITOTSUBASHI
UNIVERSITY

一橋大学大学院商学研究科教授
学生相談室長
米山 高生

本日の話の概要

はじめに

1. GPAを考える上での原点
2. GPA制度の本格的導入
 1. 立ち上げの経緯:WG座長の経験から
 2. 最終報告書の概要
 3. ロードマップ方式
3. 本格的導入への作業と課題
 1. 導入に向けての作業
 2. 導入時の問題
4. 導入後の経験と今後の展開

はじめに 自己紹介とGPAにかかわった理由

■ 自己紹介
所属：商学部・商学研究科
専門：Risk Management and Insurance, Business History of Insurance
趣味：戦前の保険会社の資料収集、フルード収集。
最近印象に残った言葉：「新しいことをはじめると、遅すぎるということはない」A. Previn N響機関誌「シンフォニー」より
研究プロジェクト：イギリスのハル大学のRobin Pearson 教授と組んでいる「保険業における企業形態の国際比較研究」
最近出版した書籍：山下友信、米山高生編『保険法解説』有斐閣、2010年。
関連学会：Vice President, Asia-Pacific Risk and Insurance Association; 生活経済学会、編集委員長、他
審議会：金融審議会第二部会「保険の問題に関するWG」委員、他

■ GPA制度との関連
教育・学生担当副学長補佐の仕事の一つ
小規模な大学なので、あるWGの担当者がその領域において、少なくとも大学ないまでも「専門家」になるべし、という風土。
社会科学の教員としての実践から抱えていた問題から出発。

1. GPAを考える上での原点:「道具」と「制度」

GPAを「道具」(教育ツール)として、その長所と欠点を比較することが多いが、GPAはそのようなものなのだろうか？

GPAは、ある目的をもって人為的に作られる「制度」の中で考えるべきものである。

GPAが良いか悪いかではなく、GPAを何のために、どのように導入するのかがというプロセスが重要

1. GPAを考える上での原点

批判はあります。

今年から始められたGPAの卒業要件化、その推進論者の想定とは異なる状況になっているのかもしれない。推進論者の想定では、GPAを卒業要件とすることで、学生はより勉強するようになってGPAを上げる、そうではない場合、叱咤激励して頑性を入れ直す、さもなくば、おおよそ精神面のトラブルが理由であるはずなのだから臨床心理士等によるカウンセリングを受けさせる(これは、一橋生が勉強を苦手としているはずがないという前提に立っていることによる)とされてきました。しかし、幾人かの教育学者が危惧していたとおり、(中略)やはりこの仕組みはあまりにも単純すぎました。経営学でもこんな単純なモデルを実践にあてはめるようなことはしないとも思うわけですが、教育の世界ではこうしたことが起こってしまいます。現時点では、学生がより勉強するようになったとは到底思えませんし、GPAの低い原因が精神面のトラブルのみであるわけでもありません。もちろん、推進論者が行うであろう反論としては、まだこの仕組みの周知が徹底していない、まだ学生の意識が低い、まだカウンセリングの効果が出ていない、というものでしょうが、これらは近年の規制緩和論者の反論と同じ種類のものではなく、問題への対応を先送りするだけにすぎません。(略)私は Voice と Exit のお話しをして、立場上はそのどちらも取るべきだと申し上げましたが、学生の皆さんの判断次第では、Voice (=声を上げる)も可能であろうかとも思います。このままでは、Exit (=退学)を強いられることになってしまいます。

1. GPAを考える上での原点:大学の方針

講演者：GPA制度の本格導入とその課題

議 議 員 理事・副学長(教育・学生担当)

この2010年10月には、夏学期の成績のGPAがとりまとめられたため、それをもとにGPAの低い学生や教員職員の意識を高めるための対策立案が議論し、さらに問題のありさまを学生に知らせ、個別の相談による学習態度の改善を図ることになった。

学生が特定のGPA値を目標とするように、大学が十分な学習指導や学習指導をする必要は、学生が自らの学習行動や学習態度を改善することによって、教員自身が成績を向上させることには必要としない。授業内容や授業方法を工夫し、一定の学習態度を達成することを目指すことこそ、GPA改善の目的である。

このようにして、本学は、大教モテラーが中心となって「基礎教育プログラム」の構築と推進をテーマとして現代GPAを申請し、従来の学び方から、①基礎教育の徹底、②教育・学習の状況の改善、③教育・学習の状況の改善、そしてそれらを踏まえて、GPA改善の目的を達成することを目指すことを通じて、GPA制度の本格的導入に併せて問題点を解消し、必要とされる教育を達成することが出来るものと考えている。そのために、関係する各々の立場をぜひともお話ししたい。

出典 Agora.No.20 一橋大学教育研究開発センター、2010.10.31.

GPA制度の本格導入で危惧すべきこと

従来の常識と新しい常識の光と影

- 自由闊達なキャンパス生活 ⇨ 成績管理により縛られた学生生活
- 多様な個性の尊重 ⇨ 個性の排除にむかう危険
- エリート意識と社会的責任 ⇨ リーダーシップのある学生の欠如
- 深いところのコミュニケーション力 ⇨ 表面的なコミュニケーション力
- 学部間の壁がない ⇨ 学部間の垣根が高くなっている
- 教育の無責任/教員の無責任 ⇨ 面倒見のよい大学/顔の見える指導
- 自由・自治の尊重と行き過ぎの危険 ⇨ 自由と規律の両立
- 品質は「看板」が保証 ⇨ 品質は「大学で何をしたのか」によって決定

1. GPAを考える上での原点:「一般解」と「個別解」

一橋大学のGPA制度は、社会科学の総合大学と自称する大学の「個別解」であって、「一般解」ではない。

抽象的な理論ではなく、考え方とプロセスを参考にしてください。

「3年決め」して、4年は遊ぶという社会科学系大学生の典型的行動パターンを変えたいという動機

一橋大学の特徴

- 学園史にみる反権力志向
- 小規模・少人数教育
- 社会科学の部局だけの大学
- 男子学生比率の高さ 75%程度
- 大学院生比率の高さ 6000名中2000名
- 比較的良好な就職条件
- 強力なOB会 如水会

2. GPA制度の本格的導入:2.1立ち上げの経緯

国立大学法人中期計画「平成16年度中にGPA制度の導入を検討する」

⇒2005年3月末日に「GPA導入のためのワーキンググループが結成」するという公約を果たすために立ち上げ、役員補佐として米山がWGの座長となった。

座長の本音

中期計画の公約の実現だけならば、GPAを計算し、成績表に記載すればよい。
ex. 多くの私立大学が行っている対応。

2.1 立ち上げの経緯

教員会へのサウンディング

一部の学部で大きな抵抗

批判点

1. 中期計画に書いてあるからといって導入先にありきの議論には反対 ⇒ 手続き論
2. 教育と数値化はそもそも本質的になじむものではない。 ⇒ GPA本質論
3. GPAによって成績をとおした管理教育が強化される。 ⇒ 管理強化論
4. 学生がよい成績を出す先生の講義しか受けなくなり、厳しいが優れた講義をする先生の人気なくなる。 ⇒ 教育荒廃論

2.1 立ち上げの経緯

座長の思案

形式的な導入が意味のあるのか?

- 形式的な導入では、上記の批判に対して反論することが出来ない。
- 学生の履修行動・学習行動を変化させる方向か、あるいは、やらないか?
- 変化させるとしたら、どのように導入したらよいのだろうか?

2.1 立ち上げの経緯

座長の再考

実質的導入とすると多様な方向性:教育文化となっている

1. ICUのGPA制度:全人的教育(リベラルアーツ)型の大学の制度
2. 工学教育の標準化の名の下に「がんばらせる」仕組みとしての制度(多くの工学部で導入)
3. アメリカ東部の名門大学はGPAを導入していない。導入しないという選択肢もあり?

これまでの経緯を踏まえると何もしないという選択はない。となれば、一橋大学の教育文化になじんだ一橋型GPAを作り上げるしかない。

2.1 立ち上げの経緯

これまでの経緯

2000年の学生アンケートによる学生の意見

- 評価基準の統一性の欠如
- 評価基準の不透明性
- 甘すぎる評価
- 学習内容と評価のギャップ

GPA検討以前の改善の施策

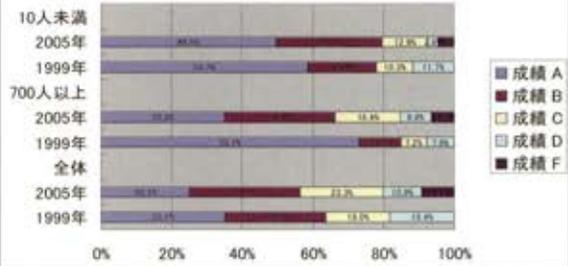
- 五段階評価の導入 ⇒ 比較可能な形での開示
- ABCガイドラインの導入 ⇒ 成績分布の均質化
- 講義ごとの成績分布の公表 ⇒ 成績の平準化
- 授業アンケートの実施と結果の公表 ⇒ 授業の規律

Hokkaido University



2.1 立ち上げの経緯

受講者数と成績分布 1999年と2005年の比較



出典: GPA制度導入最終報告書(大学教育開発センター作成)

Hokkaido University



2.1 立ち上げの経緯

これまでの経緯(続き)

2006年の学生アンケートによる学生の意見
依然として「厳格な成績評価」への要望があった。

- 評価基準の明確化
- 評価の適切化
- 評価の根拠材料の公開と説明

多数の非常識より
少数の良識を活かすのが
研究大学の道

これらの要望は、絶対的多数の学生からのものではなかった。かなり多くの学生は、甘い成績や体面に対して寛容であったと思うが、教育機関として、良識ある少数意見を無視することがよいのだろうか？

古き良き時代の大学の
全人教育が失われて
しまうという危機感

Hokkaido University



2.1 立ち上げの経緯

意思の決断

学生の履修行動、学習行動を改善できなければ、導入の意味はない。
Ex. 形式導入は企業の人事担当者を喜ばせるだけ。



学生の行動を変化させる方法としては、GPA制度の本格的導入しかあり得ない。

Hokkaido University



2.2 最終報告書の概要

制度の骨子

- 卒業判定にGPAを導入
 - 学生の履修行動および学習行動の変化 とくに運動系クラブおよびサークルの学生の变化を期待
 - 大学卒業証書の品質証明 一橋大学出身者が過去に集めてきた信用の毀損の防止
 - 教育の説明責任(アカウンタビリティ)
- 本格的導入までのロードマップの作成
 - 平成22年4月入学の学生から本格的導入
 - 在校生およびクラブの先輩から後輩への伝授
 - 補完的制度の先行導入 - の廃止とWの導入 成績確認請求制度の導入 優秀学生表彰制度 低GPA取得者への対応策
 - GPA卒業要件の決定のためのデータ収集と分析
- GPAの活用とGPAに関する啓蒙活動
 - GPAを活用して卒業困難学生の早期発見
 - GPAは教育および学習上のひとつの尺度であって絶対的なものではない。

Hokkaido University



2.3 ロードマップ方式

- GPAの導入方法
 1. 強引な見切り発車は避ける。
 2. 段階的に準備を進めてゆき、それをクリアした場合に導入する。
 3. 学生の不利益変更にならないように気をつける。
 4. 学生への周知徹底する。
 5. 制度の事前点検
- 本格的導入までのロードマップを作成
 1. 補完的制度の先行導入 - の廃止とWの導入 成績平成22年4月入学の学生から本格的導入
 2. 確認請求制度の導入 優秀学生表彰制度 低GPA取得者への対応策
 3. 卒業要件については、学年進行で導入
 4. 事前説明会の開催
 5. GPA卒業要件の決定のためのデータ収集と分析
- いくつかの反省点
 - 職員への周知徹底と教員の合意形成
 - 事前説明会の効果
 - 段階的な準備の遅れと不十分さ

Hokkaido University

2011/2012

18

3. 本格的導入にむけての作業と課題

3.1 導入にむけての作業

- (1)沈んでゆきやすい学生をいかに卒業させるか
 - ・キャップ制を維持しながら再履修(成績上書き)を認める
 - ・対応する学生相談(学習よろず相談体制)の必要性
 - ・GPA不振学生の早期指導の制度化
- (2)評価の公平性・学生の納得性
 - ・成績説明請求制度の実施 初期の運用に注意
- (3)他大学の学生との間で不利にならないか
 - ・留学条件
 - ・奨学金の条件
- (4)卒業要件の条件の決定
 - ・2か? 2以下か? データ分析と意思決定
 - ・副学長判断で1.8 本来は2であるべきだが、周知徹底が足りないことを考慮して暫定決定

Hiroshima University



3. 本格的導入にむけての作業と課題

3.2 導入時の予期せぬ問題

1. 教員への共通理解が不徹底
 - 一部教員の反発 ⇒ 教授会で議論
 - ロードマップを問題の先送りと理解した教員がいた?
 - 段階的導入時に教員への周知の必要すべきだった。
2. 卒業要件の数値の決定
 - 学生の履修行動と学習行動の分析
 - 教務課と大教センターとの情報連携
 - 大教センターの分析力の強化
3. 学部の自由度の確保
 - 五段階評価とEF評価 再履修不能科目の設定などカリキュラム上の決定権 細則主義ではなく原則主義

ルールベースからプリンシプルベースという金融規制の国際的傾向から発想

Hiroshima University



4. 導入後の経験と今後の展望

この9月には、夏学期の成績のGPA値がとりまとめられたが、これをもとにGPAの高い学生や取得単位数の繰進に少ない学生を対象に説明会を実施し、さらに問題のありそうな学生については、個別の相談による学習支援を実施することにした。

夏学期を通じて一定のGPA値を維持しなければ卒業できないことになった。しかし、GPA制度の本格導入の目的は、一定のGPA値を達成しない学生

そのため、本年度の夏学期においては、さっそく学生委員の下に学習指導部と実務調査検討部会の二つの作業部会を設け、まずは出席が義務とされる科目における出席不良者の洗い出しと、個別の面接・指導を行った。低GPA取得者の予備軍と考えたからである。その結果として、大学がこれまで様々な問題を抱える学生をいかに改善してきたかが顕著

その目的、本年度の夏学期においては、さっそく学生委員の下に学習指導部と実務調査検討部会の二つの作業部会を設け、まずは出席が義務とされる科目における出席不良者の洗い出しと、個別の面接・指導を行った。低GPA取得者の予備軍と考えたからである。その結果として、大学がこれまで様々な問題を抱える学生をいかに改善してきたかが顕著

Hiroshima University



4. 導入後の経験と今後の展望

- GPA不振学生のチェック体制
 - 専門担当者
 - 教育専門委員(学部ごと2名)
 - 1年生必修授業担当教員
- 早期チェックの結果
 - 履修指導 説明会+学部教員面接
 - カウンセリング 希望者は学生相談室
- 夏学期成績後の結果
 - W(撤回)の活用が少ない
 - 履修指導の重要性が増大

Hiroshima University



4. 導入後の経験と今後の展望

要領言: GPA制度の本格導入とその課題

GPA制度にあわしい成績の評価基準や評価方法を検討することにより、いわゆる単位の実質化と成績評価の適正化を実現するための努力を継続していくことが必要である。GPA制度の本格導入は、学生のみならず、教員に対しても大きな意識改革を迫るものだと見られる。

その目的、本年度の夏学期においては、さっそく学生委員の下に学習指導部と実務調査検討部会の二つの作業部会を設け、まずは出席が義務とされる科目における出席不良者の洗い出しと、個別の面接・指導を行った。低GPA取得者の予備軍と考えたからである。その結果として、大学がこれまで様々な問題を抱える学生をいかに改善してきたかが顕著

その目的、本年度の夏学期においては、さっそく学生委員の下に学習指導部と実務調査検討部会の二つの作業部会を設け、まずは出席が義務とされる科目における出席不良者の洗い出しと、個別の面接・指導を行った。低GPA取得者の予備軍と考えたからである。その結果として、大学がこれまで様々な問題を抱える学生をいかに改善してきたかが顕著

Hiroshima University



結び: GPA制度の導入についての経験

導入にむけての考え方

1. GPAを活用して、何をどのように変えたいのか? ⇒ 制度目的
2. GPAが目的どりの機能を発揮するための仕組みづくり ⇒ 制度の導入
3. 茨城大学型のGPA制度 ⇒ 一般解はない
4. 教育文化として定着するのか?

導入の際の技法

1. ロードマップ(工程表)の作成
2. 効果検証プロセスのビルトイン
3. ルールベースからプリンシプルベース

Hiroshima University



ご清聴ありがとうございました



私どものGPA制度の本格導入は、まだ始まったばかりであり、これからの3年余りをどのように育ててゆくのか試行錯誤の段階にあります。大学のトップには、いったん舵を切ったからには、ある程度の覚悟で進めていただきたいと思います。私は、現在、学生相談室長という立場から、GPA制度の実施過程に関係していますが、この中で、GPA制度の要点を常に忘れないようにしながら、一億型GPAが教育文化として定着するように努力したいと考えています。

茨城大学の先生方には、「先進的な事例」ということではなく、現在も試行錯誤しながら進めている「未完成のGPA制度」の現場から情報提供をさせていただきました。もしわれわれから学んでいただけるとしたら、GPAの抽象的な機能とか効果ではなく、GPAを教育制度の一部として機能させるためのプロセスであると私は考えています。

経験だけをお話した拙い講演を聞いていただき、あらためて感謝申し上げます。

Iwate University

茨城大学における GPA 制度の導入にむけて

森野浩、佐藤和夫、岡山陽子¹

1. はじめに

本学においては授業の質の保証を求める全国的な流れを受け、第 2 期中期計画で「評価点平均制度」(以下 GPA と略す)の導入を目指している(R111a02-2、R111b04-4)。この制度は単に単位を積み上げるだけではなく、全体として習熟度を向上させることをねらいとしている。すべての制度がそうであるようにこの制度にも長所と短所がある。一方では学生によりよい評価を得させる作用をもつが、他方で評価点を上げるために修得の困難が予想される科目が避けられる傾向がある。

そのような問題点を洗い出しながら、それらを克服して導入に向けて歩み出すため、平成 22 に年度に全学教務委員会のもとに森野浩(大学教育センター長)を座長とする GPA 検討ワーキンググループが設けられ、計 4 回(6 月 24 日、8 月 5 日、10 月 28 日、1 月 27 日)の会合で検討が重ねられた。

また大学教育センターでは平成 22 年度教育改善経費に「GPA の制度設計に係わる基本的調査と共通理解の推進」を申請し、これが認められたことから、先進事例の調査と全学的な共通理解を促進するためのシンポジウムを中心に活動を行った。以下に 22 年度の諸活動について概略を報告する。

2. GPA 検討ワーキンググループでの検討結果について²

今年度の検討結果とシンポジウムでの報告・議論の結果以下の 3 点の合意が得られた。

- 1) 目的を学習支援及び履修指導の一つの手段として活用することに置く。
- 2) 成績分布の基準化については、各科目群等を単位としての努力目標とする。
- 3) 第 2 期期間中は卒業要件化を見送る。実績を評価の上、第 3 期の計画を立てる。

またその中で以下のような点も明らかになった。

- 1) 大学の構成員に GPA 導入の目的や意義についてさらに共通認識を深めること
- 2) GPA 制度の内容には地域や大学によりかなりの差異があることから、「国際標準」とされているものよりも本学にふさわしいシステムを目指すべきこと
- 3) GPA 制度は学士課程全体で扱って初めて有意義なものになること

以上のことから今期中期計画・中期目標は以下のように修正することが妥当であろう。

H22 : GPA 制度の問題点を洗い出し、整理する

¹ 森野浩：理学部教授、大学教育センター長、佐藤和夫：人文学部教授、大学教育センター副センター長、岡山陽子：大学教育センター准教授

² 2. に関するまとめは森野浩による

H23：合理的な GPA 制度を提案し、全学の合意を得る（教養科目だけ実施しても導入の利点は少ない）

H24：GPA を制度として（CAP 制や履修指導などとセットで）学年進行（？）で実施に移す

H25：前年の結果を検証し、改善を図る

H26：導入過去 2 年の結果を検証し、改善を図る

H27：導入過去 3 年の結果を検証し、改善を図るとともに第 3 期の計画を策定する

今後の具体的課題としては以下のようなものがある。

- 対象科目の選定（教養科目及び専門科目）
- GPA 計算式の確定（GPA か FGPA か）
- 6 段階評価方式の再検討（茨大方式（一橋大学方式）を継承するか？）
- 成績申し立て制度と履修指導体制の整備
- CAP 制度と、学習支援の観点からの関係確立
- LC（ライブキャンパス）との連動の確認
- GPA 数値を成績証明書に記述するか否か（成績表には記述）

以上からわかるように GPA 制度の定着のためには長期に渡る検討と慎重に進展を図る必要があること、また各学部教務委員長と大教センター執行部で構成される委員は比較的短期で交代する可能性があることから座長の指名に基づきこの制度に造詣の深い特別委員を職指定によらずに委嘱するのもよいと思われる。

3. 調査報告

A. 国際基督教大学³

国際基督教大学を訪問したのは平成 22 年 8 月 30 日、同大広報センター長、大西直樹教養学部教授に対応いただいた。

a. 重要なポイント

* GPA は単なる成績の平均値ではない。カリキュラム改革である。

* 「科目の登録制度」、「教員の成績への考え方（成績の付け方）」、「学生サポート」を徹底しないと成功しない。

* GPA には「厳格な GPA 制度」と「そうではない GPA 制度」がある。

* 「厳格な GPA 制度」でないと世界基準とならない。

b. 科目の登録制度

同大は 3 学期制を取っており学生は、4 年間で、12 回、科目を選択できる。⁴

³ 以下 A. 及び B. は岡山陽子が調査を担当した。

学生は各学期に登録する。2週間の Window-shopping Period があり、その間に、自分で取りたい科目授業に出席して、決定できる。学期ごとの登録なので、前の学期での成績を基に、どの程度のクラスを取ればよいか、学生が、この Window-shopping Period に見極めることができる。

★ICU では、一度登録すると学生の都合でドロップできない。つまり、成績に「欠、未」などがつかず、落第(E)となり、GPA に反映される。ただし医者や看護師の診断書がある場合のみ別。この点が、GPA では大変大事である。

—学生が自分の都合で途中で止めても、その成績が、「欠」などで、成績がつかず、GPA に反映されないと、GPA がとても甘いものになる。(これが「厳格な GPA ではない」場合)。

c. 登録科目数の制限

各学期、13 単位まで。GPA 平均が 3.00 (B 平均) 以上になると、制限が緩和される。(18 単位まで)。GPA の最高点は、4.00 で、3.00 が標準である。

d. 成績不良

1.00 未満 (ローグレード)：通算 3 回 (4 年間で) あると、除籍となる。そこまでいかないうちに、アドバイザーや職員が指導。例えば、

- 登録科目数を減らさせる
- 制限科目数以上は取らせない
- クラブ活動やアルバイトを制限して勉学に集中するようアドバイス
- 精神的・心理的な病いと思われる場合はカウンセリングオフィスを紹介する 等

e. 教員の成績への考え方 (成績の付け方)

① FD での教員への指導。

- 1) 各クラスの成績の平均が、2.8 から 3.2 の間になるようにする。

(授業間の成績について公平感を持たせるため)

- 2) 各学科の平均成績を教授会で公表。教員の氏名は公表しない。

(どの学科は甘すぎるか、が分かる)

- 3) アドバイザー制度 (学生ひとりひとりにつく) があり、

1 年次から 3 年次の終わりまで指導 (4 年次は卒論アドバイザーが指導)。

★年 3 回の登録日には学生ひとりにつき、15~20 分くらいの面談。

- ①先学期の成績を渡す
- ②その GPA に基づき、今学期の履修計画を相談
- ③登録用紙に学生がまずサインし、それをアドバイザーがコサインする

⁴ <http://www.icu.ac.jp/liberalarts/educational/system.html>

【その学生の履修計画をアドバイザーが承認する形】

- 契約書に両者がサインして約束する、といったおもむき。
- 学生に成績を手渡す、こともポイント。(学生は緊張)。

4) 各メジャーに「メジャー・アドバイザー」が置かれている。⁵

② 学生へのサポート

以下のような制度が設けられている。

- 1) 教員によるアドバイザー制度
- 2) 職員によるアカデミックプランニングセンター
- 3) オフィスアワー (全教員)

f. まとめ

国際基督教大学では「厳格な GPA 制度」を導入しているので、学生への何重ものサポートが大変重要である。そのため教員だけではなく、登録制度やいろいろな授業内容に詳しい職員によるサポートがある。⁶

B. 上智大学の GPA 制度について

a. 全学に共通する部分

1) 「各評価(A, B, C, D, F)の評点(100点~0点)、QPI[Quality Point Index](4.0, 3.0, 2.0, 1.0, 0)、各評価の内容、及び、計算式について」、で、大学全体としてはクラス平均 GPA 値などについてのしぼりはない。⁷

2) 評点配分：

A(100-90点)、 B(89-80点)、 C(79-70点)、 D(69-60点)、 落第 F(59点以下)

3) 上智大学の履修単位制度

2学期制：

履修登録は年に2回、一部の通年科目は前期登録時

履修単位数は、前期、後期、年間で、「最高履修限度」が決まっている。ただし、前期 + 後期 = 年間 ではない学科もある。前期に許可される単位数を目一杯取ると、後期に取れる単位数が減ることがある。(年間の単位数が決まっているため)

例：前期 24、後期 24、年間 42

(前期に 24 単位を取ると、後期は、18 単位のみ登録できる)

⁵ <http://www.icu.ac.jp/liberalarts/major/index.html>

⁶ <http://www.icu.ac.jp/liberalarts/educational/support.html>

⁷上智大学法学部は、分布幅を決めている。A 10%、B 30%、C 40%のように決めており、相対評価をすると宣言していることになる。

成績によって、「最高履修限度」の単位数が変わることはない。

上智大学の履修登録 1

前期、後期、にそれぞれ一回、登録する。通年授業は前期に登録。各登録に関しては、3回ずつ確認・修正する機会がある。(学生に、登録間違いを修正する機会を与える、という意味が大きい)。履修中止申請をせずに、その科目に必要な課題をこなさない場合には、成績表および成績証明書に「F」(不合格)として記載される。登録したのち、履修中止申請をして中止が認められても、その科目の単位数は「最高履修限度」内単位として数えられる。

まれなケースでは、GPA を気にするあまり、授業が難しいと履修中止を申請し、限られた単位数しか取らない学生がいる。卒業必須単位の取得が危なくなるので要注意である。

例：前期登録の流れ

i) 春学期事前登録

春学期および通年科目の抽選科目を履修する場合は、必ずこの期間内に学習管理システム Loyola で事前登録を行うこと。

<2・3・4年次生> 4月3日～5日

<1年次生>4月6日～8日

ii) 春学期事前登録結果公開

Loyola で、事前登録した科目の抽選結果を確認できる。

○1回目

iii) 春学期履修登録

春学期および通年科目(抽選科目を除く)を履修する場合は、必ずこの期間内に Loyola で履修登録を行うこと。

<3・4年次生> 4月12日～17日

<1・2年次生>4月13日～17日

iv) 春学期履修登録確認

Loyola で、履修登録した結果を確認できる。

<全学生>4月18日

○2回目

v)履修区分変更、自己判定期間(4年次生のみ)

4年次生のみ Loyola で区分変更、自己判定ができる。(4月18日～21日)

vi) 春学期履修登録修正期間<全学生>

Loyola で、履修登録した結果を修正することができる。(4月20日～21日)

vii) 春学期履修登録確認(最終)

Loyola で、修正登録した結果を確認できる。

<全学生>4月23日

○3回目

viii) 春学期履修中止申請期間

6月11日～6月16日

*履修中止申請ができるのは、必修科目以外の科目。

*一般外国語科目も原則として、申請できない。

*その他、学科によって、申請できない科目がある。

ix) 秋学期

1回目登録：10月1日、2日

3回目：履修中止申請期間：12月10日～15日

b. 取り扱い方

1) 学部・学科間の差

上智大学 GPA 制度を全体から見て一特にしぼりが無いにもかかわらず、全体の GPA 平均値は、2.5-2.8 となっている。GPA 平均値には、学部間、学科間で差があるが、学生はそれぞれ、その学科内で卒業していくので、特に問題ないのではないか。GPA は自分自身の成長を見るものである。⁸

2) 奨学金、留学の判定に関して

この件に対する GPA の格差については調整係数を掛けることもある。ただし、留学に関しては、留学希望の学生は、ほぼ行くことができる。留学先の決定時に GPA が反映されることがある。

3) 授業形態との関係

GPA 平均値には、授業形態が反映している、といえる。

例：GPA 平均が高い学科では、3を越えるところもある。少人数クラスで出席重視の科目が多い学科は、高くなる傾向がある。このようなクラスでは、アウトプットも豊富に行う演習のような科目が多く、GPA 平均値を下げるべきだとは考えていない。大人数クラスが多い学科は、GPA 平均が低くなる傾向がある。

2002年の導入以来、すでに10年近くたっており、教員には浸透してきた。ただし、時期としては、見直しをする時にきている、と考えている。教員の中には、Bをつけにくい、という声がある。以前は、80点以上がA。教員の心情として、Bがつけにくく、A～Dではなく、S～Cのような評点のほうが良いのではないか、という声がある。

4) 学生への指導

クラス担任、学科長がいて、それぞれの学科の学生に目配りをしている。学科の人数は、50～60人程度なので、目配りがきく。

4月入学時にオリエンテーションキャンプがある。先輩がヘルパーとして参加その先輩からも科目の取り方などについてアドバイスをもらっている。

⁸ GPA は自分自身のための目安なのか、それとも比較のためなのか、という議論はある。

C. 信州大学⁹

この訪問調査は 2010 年 12 月 8 日に行われ、信州大学全学教育機構高等教育システム開発部加藤鉦三教授と学務課龍野範生主査にお願いいただいた。

a. 訪問調査の目的

本学と同様に

- 1)第 2 期中期計画で GPA の導入を目指している信州大学の具体的な手順（行程表）や啓発活動そして到達目標を知ること。
- 2)分離キャンパスをかかえての足並みの調整を知ること。

b. 本学の行程表

茨城大学の行程表

担当理事等:白石理事

担当事務:学務部(◎学務課長)

部局名:大学教育センター
務委員会)

担当委員会:大学教育センター基礎教育運営委員会、教育改革推進会議(全学教

R111a02-2

中期目標	1. 教養教育の目的を達成するように学部各ポリシーを踏まえて教養教育を改革し、修得状況で示される明確な教育成果をもって、理念に沿った人材を育成する。		
中期計画	2. 習熟度別教育を教養教育科目の中に定着させる。さらに、教養教育の修得状況の思わしくない学生について修得度を改善する。施策として以下の取組を実施する。習熟度別授業の充実、教養教育の修得状況について「GPA」などの適切な指標を使用した学生指導		
計画施策	教養教育の修得状況について「GPA」などの適切な指標を使用した学生指導		
年度	実施区分	実施内容	全学進行
H22	実施	全学における GPA 制度の確立に向け、制度設計を行い、全学に提案する。同時に、教養教育における GPA 制度の運用システムを構築する。	○
	年度計画	大学教育センターは、GPA 制度の確立に向け、新たな制度設計を行い、全学に提案する。同時に、教養教育における GPA 制度の運用システムを構築する。	
H23	実施	全学での GPA 制度の制定を受けて、教養課程において新たな GPA 制度の試行を開始する。同時に、GPA をもとに、修得が低い学生に対する指導システムを構築する。	○
H24	実施	GPA を基にした学生指導システムを導入し、修得が低い学生に対する指導を開始する。	○
H25	達成	GPA 制度と GPA を基にした学生指導システムの成果を認識し、改善を図る。	◎
H26			
H27			

c. 信州大学のロードマップ

[省略]

d. 平成 22 年度の作業

1) GPA 勉強会

理事会の要請で GPA についての議論に必要な情報を共有するために共学担当理事とスタッフ会議（8 学部＋αで構成）の主宰で 9 月と 11 月に開催した。本学（茨城大学）でなさ

⁹ C.及びD.のまとめは佐藤和夫による

れたような細々とした GPA に対する異論・反論・疑問が出されることを予想して準備をしていたが、そういうものはほとんどなく、GPA の導入自体には反対はない。

2) GPA 計算式素案の作成 (高等教育システム開発部)

勉強会を主導しているのが前記の加藤教授である。今回提供いただいた資料で使った主な文献は

i) 学士課程答申の用語解説

ii) 半田智久『機能する GPA とは何か』(「静岡大学教育研究」第 4 号)

iii) 一橋大学の事例

であった。以下に要点を述べる。

i) 学士課程答申の用語解説

要旨：

○アメリカにおいて一般的に行われている学生の成績評価の一種であり、成績を 5 段階 (A、B、C、D、F) で評価し、それぞれに 4、3、2、1、0 のグレード・ポイントを付与して、この単位当たりの平均 (GPA) を出す。

○D 評価でも単位取得は認められるが、卒業のためには通算の GPA が 2.0 以上必要であり、3 セメスター (1 年半) 連続して GPA が 2.0 未満の学生に対しては退学勧告がなされる。

○ただ退学勧告は学習指導・生活指導を行ってもなお学力不振が続く時に出される。

1 セメスター (半年) 間の履修数は最低 12 単位、最高 18 単位が一般的。

ii) 半田智久『機能する GPA とは何か』

半田先生のまとめを援用して GPA が「ただの成績の平均値」ではないことを力説している。

○何よりも GPA は単なる成績の平均値ではなく、科目の単位数の違いが成績の重みづけに反映された評価になっていること

○加えて履修して途中放棄したり、不合格になった科目があるとそれが指標に負の影響をもたらすようになっていること、この 2 点において従来の LG (LG: 秀、優、良、可、不可) のような lettergrade) による方法と大きく異なっている。

○この相違点は GPA が単に結果だけを評価するのではなく、履修や学修への取り組み方を含めたプロセス評価も加味した総合評価性能をもっていることをあらわしている。

○GPA は…現状ではとらえきれない大学の学修における自分の位置づけを知ることができる見当識形成指標としての性質を持つ。

iii) 一橋大学の事例

[後出]

その他 GPA 導入の背景についても詳しく解説しているが、ここでは与えられたテーマの範囲を越えるので省略する。

e. 信州大学の目標

「最終目標は成績評価を含む大学文化を変えること」

その手段の一つに GPA 制度の導入がある。信州大学（全学教育機構高等教育開発部）の考える GPA 制度とは以下のようなものである。

1) 履修指導の強化

GPA 導入には修学指導の強化が不可欠。GPA2.0 未満を卒業不可とする以上当然の前提となる。

2) 成績評価の厳格化

そのために成績分布を学内のみならず学外にも公表する。

3) 成績に納得できる授業運営

そのために

i) 目標の到達度で成績評価をする。

試験・レポートのみによる「一発勝負」から小試験等平常点による「形成的評価」をする。また試験、レポート、小試験を点数付で学生に返し、何ができて何ができていないかを学生に納得させる。「厳格な成績評価」とは何かを定義することも証明することも不可能だが、成績評価を受けた学生うちどの程度が納得しているかを表示することはできる。

f. 問題点と今後

1) 5段階評価による GPA 付与では不十分

信州大学では平成 19 年にそれまでの 4 段階評価を改め 5 段階評価にしたが、卒業要件に GPA2.0 未満導入するには C「満たしている」の下に D「満たしていないが不合格ではない」を導入した方が無理がないと考えているようだ。本学では 100 点法で成績を記入し、6 段階で評価しているので、現行方式を大きくいじらずに GPA を導入できる可能性がある。

2) 分離キャンパスでの再履修など...

この点信州大学も本学も問題は共有しているので、今後も情報や意見の交換をしていくことが重要である。

3) その他

今回の訪問で明確になった重要な点は

i) GPA を最終的に卒業要件とする

ii) 性急に実施せず着実に合意を形成する

ことであったように思う。このアドバイスを生かせば、本学の年度計画は

H22 : GPA 制度の問題点を洗い出し、整理する

H23：合理的な GPA 制度を提案し、全学の合意を得る（教養科目だけ実施しても導入の利点は少ない）

H24：GPA を制度として（CAP 制や履修指導などとセットで）学年進行（？）で実施に移す

H25：前年の結果を検証し、改善を図る

H26：導入過去 2 年の結果を検証し、改善を図る

H27：導入過去 3 年の結果を検証し、改善を図るとともに卒業要件に導入することを全学として決定するくらいに緩やかな方が望ましいだろう。

信州大学では平成 26 年 12 月に「卒業判定基準への導入に関する決定」をすることになっているが、平坦な道のりとは思っていない、ということであった。

D. 静岡大学

この訪問調査は平成 23 年 3 月 10 日に行われ、石井潔理事（大学教育センター長）、芳賀直哉大学教育センター全学教育科目部門教授、須藤聡教育評価・開発 FD 部門講師、学務部教務チーム山下晃司主査他 1 名の方々に応対いただいた。

a. GPA 制度の施行

2008 年後期に試行を開始し、翌年から本格実施した。まずは学部から始め、翌年大学院も始めた（法科、教職大学院は基準が厳しい）。開始の 2 年前から全学教育企画委員会（大学教育センター長が管轄する企画・マネジメント部門、このレベルの委員会にはもう一つ、教育開発・評価（FD）部門を担当する全学 FD 委員会がある）の下に WG を組織して検討を行った。WG は計 10 回くらい開催した（すべて TV 会議によって行い、浜松地区の人が静岡地区に来ることはない）。半田氏を中心に厳格な GPA の導入を図ったが、成績の入力は一元的な基準を導入できず、100 点法でも、LG でも入力してよいこととした（文系の教員を説得しきれなかったとのこと。ただ数字で評価しないと正確な GPA は出ないので、LG で評価された場合はその中間の数値、例えば最上位の「秀」の場合 95 点とする）。

b. GPA の利用の仕方

学部毎に利用の仕方に濃淡があるが、共通に見られるのは学長や学部長による表彰の選考の資料としてであった。奨学金推薦や返還免除にも使われている。当然ながら成績不振者への指導にも利用されている。

c. 成績分布

特に基準は設けていない。英語の場合グレードの低いクラスの場合はガイドラインに基づき分布を調整する。他の科目では決めていないが、分科会ごとに情報を交換している。

d. 取止め制度

5 月中（後期は 11 月中）に手続きにより申告した科目の取り消しができる。ただ一部その手続きをしない学生もいる（もともと学修上の問題を抱えている場合が多い。手続きをする学生はそれほど多くない）。

e. 卒業要件

卒業要件にはしていない（法科大学院は規則で 2.1 以上でないとは修了できない）。

f. 実施の仕方

全学年一斉に実施した。試行を除いて丸 2 年が経過した。

g. 成績表の扱い

不合格科目は 1 年ごとの成績表には載せるが、静大生にとって不利益になるおそれがあるので、成績証明書には累積 GPA を表記するが、不合格科目の表記しない。

h. 苦情

特に GPA による締め付けはないので、教員からの苦情はない。また学生からも不利益を被ることがないので、同じく苦情はない。

i. 本学へのアドバイス

- 1) どう使うかの議論を始めると、様々な意見が出てくるだろう。
- 2) 100 点法表記による入力導入されているのはよいことだ。

j. まとめ

- 1) 調査前の予想通り半田智久氏が静岡大方式の推進者であったことが判明した。
- 2) 半田氏は fGPA の有効性を従前から唱えており、それを勤務先の静岡大学とお茶の水女子大学で実施に移している。その要点は
$$GP = \{ \text{評価点 (100 点満点)} - 55 \} / 10$$
で算出し、0.5 以下を 0.0 とすることにある。
- 3) この方式よると GPA の最大値は 4.5 となり、通常よく見られる最大値を 4.0 とする方式よりも大きな値となるが、国際的な調査によれば、GP の最大値は 5.0~3.0 の範囲にあるので不自然ではない。55 を減じるのは多数のシミュレーション結果によりこれが従来方式の GPA ともよく適合するためである。-60 ならば最大値が 4.0 となり、一見良さそうだが、高得点取得者に不利に作用する。他方-50 だと LG による評価よりも全体に高めに出てしまう。それ故-55 とするのがもっとも適当であるという。
- 4) 以上の静岡大学方式を本学に生かすメリットとしては

○現在の評価方法を全く変える必要がないこと。教員は 100 点法により入力すればよい。

→ 教員にさらに負担をかけることがない

○6 段階評価 (A+~E) もそのままとし、D 評価 (59~50) も単位としては認定されるが、GP 算定上は不利に作用する。

→ 従来方式の評価区分にこだわる教員も説得しやすい。

○その他

- ・卒業要件とはしないこと
- ・再履修制度
- ・履修中止期間 (前期: 6 月、後期 11 月)
- ・全学一斉実施
- ・学生の成績一覧には記載するが、成績証明書には記載しないことも参考になる。¹⁰

4. 全学教育シンポジウム「茨城大学の GPA 制度導入にむけて」

このシンポジウムは 2010 年 12 月 22 日に水戸キャンパス、インタビュースタジオで全学に公開して開催され、日立、阿見のそれぞれのキャンパスにも VCS システムを用いて配信された。以下に示すプログラムのように一橋大学における GPA 制度制定の中心となって活躍された同大学少額研究科教授(学生相談室長)の講演を中心に、藤縄明彦理学部教務委員長による GPA に対する批判的検討及び上述の岡山、佐藤による訪問調査報告があった。¹¹

5. 終わりに

WG の検討や GPA を導入した大学への訪問調査、そしてシンポジウムでの議論のやりとりの結果を踏まえて本学の中期計画は森野がまとめているように一部変更され、平成 22 年度ではなく、23 年度に本学における GPA 制度が提案されることとなった。同時に当初想定していた教養科目から実施するというような部分的な方式にはあまり意味がないことも明らかになった。米山先生が講演の末尾で「いったん舵を切ったからには、ある程度の覚悟で進めて」いかなければならないであろう。大学教育センターは平成 22 年度の WG の検討や調査、シンポジウムの結果を踏まえ、各学部、全学教務委員会に GPA 制度の制定に向けて働きかけていく必要がある。

¹⁰ この記述には静岡大学側に提供いただいたものの他に

半田智久：機能する GPA とは何か (静岡大学教育研究 2008 年 第 4 号)

半田智久：fGPA の効能発揮を支える教育インフラの要件 (地域科学研究会・高等教育情報センター主催シンポジウム「教育インフラで加速する GPA 活用の深化」講演資料を用いた。

¹¹ 静岡大学訪問調査 (平成 23 年 3 月 10 日) を除く。



1. 訪問調査の目的

- 1) 第2期中期計画でGPAの導入を目指している信州大学の具体的な手順(行程表)や啓発活動そして到達目標を知ること。
- 2) 分離キャンパスをかかえての足並みの調整を知ること。

2. 本学の行程表

信州大学の行動表

担当部署 自治体等 担当部署 自治体等
 担当部署 自治体等 担当部署 自治体等

年度	実施内容	実施内容	実施内容
H20	実施	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。	○
H21	実施	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。	○
H22	実施	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。	○
H23	実施	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。	○
H24	実施	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。	○
H25	実施	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。	○
H26	実施	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。	○
H27	実施	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。	○

3. 信州大学のロードマップ

GPA制度導入に関するロードマップ(案)

年度	実施内容	実施内容	実施内容
H20	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。		
H21	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。		
H22	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。		
H23	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。		
H24	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。		
H25	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。		
H26	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。		
H27	信州大学におけるGPA制度の導入に向けた、関係部署との、連携を進める。同時に、関係部署にGPA導入の必要性を説明する。		

4. 平成22年度の作業

- 1) GPA勉強会
- 2) GPA計算式素案の作成(高等教育システム開発部)
- 3) 制度の検討(スタッフ会議)

1) GPA勉強会

- 教学担当理事とスタッフ会議(8学部 + αで構成)の主宰
- 9月と11月に開催

① 学士課程答申の用語解説

- アメリカにおいて一般的に行われている学生の成績評価の一種であり、成績を5段階(A、B、C、D、F)で評価し、それぞれに4、3、2、1、0のグレード・ポイントを付与して、この単位当たりの平均(GPA)を出す。
- D評価でも単位取得は認められるが、卒業のためには通算のGPAが2.0以上必要であり、3セメスター(1年半)連続してGPAが2.0未満の学生に対しては退学勧告がなされる。
- ただ退学勧告は学習指導・生活指導を行ってもなお学力不振が続く時に出される。
- 1セメスター(半年)間の履修数は最低12単位、最高18単位が一般的。

② 半田智久『機能するGPAとは何か』

- 何よりもGPAは単なる成績の平均値ではなく、科目の単位数の違いが成績の重みづけに反映された評価になっていること
- 加えて履修して途中放棄したり、不合格になった科目があるとそれが指標に負の影響をもたらすようになっていること、この2点において従来のLG(LG:秀、優、良、可、不可のようなlettergrade)による方法と大きく異なっている。
- この相違点はGPAが単に結果だけを評価するのではなく、履修や学修への取り組み方を含めたプロセス評価も加味した総合評価性能をもっていることをあらわしている。
- GPAは...現状ではとらえきれない大学の学修における自分の位置づけを知ることができる見当識形成指標としての性質を持つ。

③ 一橋大学の事例

→
本日の特別講演参照

5. 信州大学の目標

「最終目標は成績評価を含む大学文化を変えること」

その手段の一つとして
GPA制度を導入する

信州大学(全学教育機構高等教育開発部)の考えるGPA制度

- 1) 履修指導の強化
- 2) 成績評価の厳格化
- 3) 成績に納得できる授業運営

1) 履修指導の強化

GPA導入には修学指導の強化が不可欠。GPA2.0未満を卒業不可とする以上当然の前提となる。

2) 成績評価の厳格化

成績分布を学内のみならず学外にも公表する

3) 成績に納得できる授業運営

目標の到達度で成績評価をする

6. 問題点と今後

- 1) 5段階評価によるGPA付与では不十分
- 2) 分離キャンパスでの再履修など...
- 3) その他

今回の訪問で明確になった重要な点

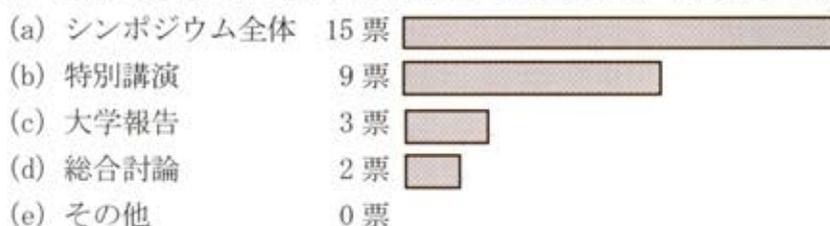
- ① GPAを最終的に卒業要件とする
- ② 性急に実施せず着実に合意を形成する

本学のGPA制度の構築

- H22：GPA制度の問題点を洗い出し、整理する
- H23：合理的なGPA制度を提案し、全学の合意を得る（教養科目だけ実施しても導入の利点は少ない）
- H24：GPAを制度として（CAP制や履修指導などとセットで）学年進行（？）で実施に移す



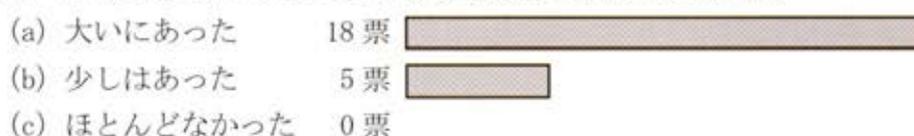
1. 事前に関心を持った内容は次のうちどれですか（複数回答可）。



2. 参加してみて、もっとも意義ふかいと感じた内容は、次のうちどれですか。



3. 今回のシンポジウムに参加して得るものがありましたか。



4. 設問3. で (a) または (b) と答えた方に：どのような収穫があったかお知らせ願います。

- ・ GPA 制度導入への混乱した現状がわかったこと
- ・ GPA に対する理解が深まった。最後の理学部の先生がおっしゃった一般教員と同程度の知識しかなかったので、参加して良かった。
- ・ 「GPA には一般解は無い」という考え方ならびに文系大学における GPA の定義が理解できた。
- ・ GPA に関して無知であったので少し理解できました。
- ・ 茨城大学での現状、また GPA 導入時の様々な問題点が明確となった。
- ・ 一橋大学の先生のかかなり本音の話は、GPA の別な側面を教えてくれた。
- ・ 他大学の状況の把握
- ・ GPA に対するイメージがやや変化しました。
- ・ 様々な角度から GPA がみられるようになった。
- ・ 導入において、低 GPA 学生を見つけて早期に対応できること

- ・ GPA 導入の位置づけのあり方がいろいろあるなどということ
- ・ 他大学の GPA 制度の取り組みを聞くことがで、参考になった。
- ・ 他大学の取り組みと茨城大学での現状の比較・理解ができたこと。検討材料になった。
- ・ 他大学で実施した結果のメリット、問題点を知ることができた。
- ・ GPA はカリキュラム、評価、学生援助（学生のプロセス評価）など全体に関係する問題であることが深く理解でき、有意義でした。一橋大学、信州大学、ICU、上智大学など個別の大学の現状が非常によくわかりました。
- ・ GPA をどのような目的で導入するか、利用方針を全学的に理解させる必要がある。
- ・ 他大学の事例と経験からくる問題点がわかった。
- ・ GPA は教育の質的保証という観点から、大学改革であり、是非全学的に取り組んで頂きたい。収穫として、他大学と茨大の取り組みの現状が把握できた。
- ・ 実績のある私立大学における考え方、制度を導入しようとする国立大学のそれぞれの視点を比較できた事は非常に有意義に思われる。
- ・ 藤縄教員の報告は現状を鋭く指摘し、かつ、一橋の前例を踏まえての本学の“改善策”も提示していたので、たいへん実りあるもので、得るものが多かった。
- ・ GPA 導入以前に、何が必要か、すなわち茨城大学で導入する独自の目的、導入に伴う課題などについての十分な検討と全学的理解の必要性
- ・ 他大学の導入例情報が得られたこと
- ・ GPA 制度のメリットを知ることができた。

5. 茨城大学の取組「GPA 制度導入に向けて」に関して、ご意見をお書きください。

- ・ まず、茨城大学の特色を探るべきだと思う。学生と大学側との意見交換の場をぜひつくってもらいたい。GPA 導入の際は、相談室の改善、利用促進に力を入れていくべきだと感じた。
- ・ 中期計画に書いたことをもって、そのとおりに事を進めるのではなく、ゆっくり進めてほしい。
- ・ クラス成績の平均をそろえる（例えば、2.8 から 3.2）こともさることながら、「単位の実質化」の観点から、学生の「予習・復習にかけた時間」と成績との相関も組み込むべきではないか。たいして自宅学習をしていないのに「3.0」が取れるのは甘い（甘すぎる）ので。
- ・ 「教育の質の保証」が大学に求められ、GPA 制度が導入されるのは当然の事である。各学部・学科・コースが到達目標を決め、各講義においても、多面的、客観的に評価してこそ、教育の質の指針になる。この極めて重要な課題を全教職員が認識することこそが教育改革推進委員会に求められる事と考えます。
- ・ 年度計画では、H25 年実施であるが、導入に向けてじっくり見極めていただきたい。
- ・ 何のために行うのかという共通意識を持ち、全学的に取り組む必要がある。
- ・ まだ検討の余地のある問題が多いと感じた。計画だけが先走りするのではなく、じっくり考慮してから実施するべきだと感じた。

- ・はじめに GPA 導入ありきではなく、GPA 導入の意味（何のために GPA を導入するのか、その必要性が本当にあるのか、何を指すのか）について十分討論し、合意形成をするべきだと思う。この導入は、よくもわるくもとても教育のやり方を変えていく可能性がある。何か深い意味があるとするれば、その解決策が GPA のみなのかは疑問。もし行うなら厳格な GPA でないと意味がないと思うが、その覚悟はあるのか（落ちる学生が増える）は重要な問題。特に本学の場合、経済的な理由からアルバイトをしている学生が多く、この制度をきびしく導入すると、そういう学生は救えなくなると思う。
- ・講演内容にもあったが、教職員の GPA そのものが何であるか、学習・理解した上で、茨大として何を目的としてどのように制度化していくか、じっくり検討する必要があると感じた。年度計画だからと、とりあえず導入は避けるべき。
- ・国際化についてももっとディスカッションが必要であろうということを感じました。
- ・きめ細かに、さまざまな観点から積み上げてほしい。
- ・全学（特に学長）がどのくらいの強い意志をもって導入しようとしているのか気になります。中期計画に書かれていないようなことはやめて、計画をすすめるべきです。
- ・あとはやるだけです。
- ・各学部でのカリキュラムの違いの理解が足りないのではないか。工学部では JABEE によるスタンダードとの両立ができるかが気になる。成績不振者の発見は GPA 制度でなくても、ポートフォリオによって可能ではないのか。
- ・ポートフォリオと組み合わせた学生へのガイダンス等使い方を考えれば有用になると感じた。
- ・茨城大学型 GPA モデルを検討すべき、という事が分かった。
- ・文系と理系では導入の工夫をしないと統一的な導入は難しいのでは。工学部では JABEE 等の評価もあり、学生が評価システムに対して混乱する心配がある。学生へのインセンティブを示さないと、学生は勉強するようにはならないのでは。
- ・工学部では、JABEE などの評価制度が動きつつあり、GPA と一致する部分と不一致な部分があると感じた。他大学が導入している「再履修」や「カウンセリング」を含めたシステムとして、茨城大学への部分的導入は、意味があり、導入法が大事だと感じました。

6. その他、ご希望のシンポジウムのテーマなど、ご意見があればお書きください。

- ・導入後の事例を紹介してほしい。
- ・今後も年度計画の進行に伴って GPA をとりあげてほしい。
- ・非常に収穫の多いシンポジウムでした。ありがとうございました。
- ・大変参考となりました。
- ・「GPA 制度」等を中心として「教育の質的保証」の取り組みに関する成功例

自由記述については、明白な誤字脱字を除き原文のまま掲載した。

大学教育センター 教育点検支援部

平成 2 2 年度茨城大学教養教育 F D 研究会

平成 22 年度 茨城大学全学FD

「大学教育の分野別質保証の在り方と 21 世紀の教養教育について」

講師： 日本学術会議 大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会 委員長
(国際基督教大学教養学部) 北原和夫オスマー記念科学教授

平成 20 年の中教審答申「学士課程教育の構築にむけて」を受けて、今年度は「大学教育の分野別質保証の在り方について」と「21 世紀の教養と教養教育」が日本学術会議より発表されました。これらの内容は、大学の今後の方向やあるいは評価の在り方に少なからぬ影響をもってくるものと想定されます。つきましてはこれらの答申について構成員全員に周知し、意識を高めていただきたいと考え、当該検討委員会委員長 北原先生にお話しいただく機会を設けました。万障お繰り合わせの上、ご参加いただけるよう希望いたします。

日時 平成 23 年 1 月 31 日(月)15時～17時

場所 理学部インタビュースタジオ

工学部 N3会議室(VCS配信)

農学部 第 1 会議室(VCS配信)

プログラム

15:00～15:10 開会の辞 森野 浩 (大学教育センター長)

15:10～16:10 特別講演

「大学教育の分野別質保証の在り方と 21 世紀の教養教育について」

国際基督教大学 北原和夫教授

16:10～16:20 休憩

16:20～16:50 質疑応答

16:50～17:00 閉会の辞 佐藤和夫 (大学教育センター 副センター長)

司会進行 大学教育センター 勝本 真(大学教育センター 副センター長)

主催 大学教育センター

共催 茨城大学全学教務委員会、茨城大学評価室

問い合わせ先

茨城大学学務部学務課大学教育センター係 田口香 Tel 029-228-8414

『平成22年度 茨城大学全学FD』実施報告

大学教育センター 教育点検支援部

実施概要	副題	大学教育の分野別質保証の在り方と21世紀の教養教育について
	日時	平成23年1月31日(月) 15:00~17:00
	場所	茨城大学総合研究棟(K棟) インタビュースタジオ (日立地区・阿見地区へVCS配信)
	対象	大学の教職員

大学教育センター主催の全学FDが標記の通り開催された。平成20年12月の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」を受け、高等教育界においてはいわゆる「学士力」の議論が始まっている。学士課程を経ることにより身に付けられる力をこれまでより明確に定義し、その質の保証をどう行えばよいか、日本学術会議を中心に議論が進められている。こういった流れを受け、今回の全学FDでは日本学術会議「大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会」の委員長を務めておられる北原和夫教授（国際基督教大学理学研究科）を招いて、日本学術会議の回答（平成22年8月）を中心に講演いただく運びとなった。本学においても中教審答申の周知を図り、かつ学士力や分野別質保証に対する意識の発揚と教養教育の在り方に対する議論の深化を期した。今回のFDは、北原教授による特別講演、続けて質疑応答の2部構成で進行した。詳細についてはプログラム等を参照していただきたい。

なお、今回のFDの参加者は計62名で、内訳は、水戸地区43名、日立地区5名、阿見地区14名（日立・阿見へはVCS配信）であった。本報告には関連資料として下記の書類を添付したので併せて参考にしていただきたい。（梅原守道）

添付資料一覧

- [1] 参加者対象の事後アンケート集計結果
- [2] 全学FD開催および参加者募集の通知文書
- [3] 全学FD当日の配布資料（北原教授による講演スライド資料を含む）



北原教授による
講演の風景

大学教育の分野別質保証の在り方と 21世紀の教養教育

国際基督教大学 北原和夫
日本学術会議
大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会
委員長

自己紹介

- 学生時代に興味を持っていたこと：外的条件が変化したときに、物質はどのように応答するか？「線形応答」から「非線形応答」へ。当時欧州で始まった「非平衡」科学へのあこがれ。1971年ベルギー政府給費生に応募。当時は留学は困難：持ち出せる外貨500ドル程度。1971年秋フランスフランで2万円ほど、片道切符。ブリュッセル到着してそのままベルギー文部省に行き一か月分の給費を現金でもらう。
- 1971年-1974年ブリュッセル滞在。「欧州の知性」との出会い、「偶然と必然」を巡って新聞紙上で、科学者、哲学者、メディアらが激論：科学上の発見が、自分の存在基盤を揺るがすこととなる。
- プリゴジン(1977年ノーベル化学賞)との出会い、「時間とは何か」を生涯問い続けた。単なる物理学の枠組みに留まらず、歴史学、生物学における不可逆性の起源を解明しようとした。拙著「プリゴジンの考えたこと」(岩波書店、1994年)

その後

- 1974-1976 MIT化学科ポスドク
- 1976-1979 東大物理助手
- 1979-1984 静岡大学教養部：学際的雰囲気、常に教員同士、理系文系が語り合う場があった。これが本当のFD[最近流行のFDは授業技術であって中身でない]
- 1984-1998 東工大応用物理 [物性物理、生物物理、確率論、物理化学、地球科学からなる学際的学科で工学部との連携がよい]
- 2002 物理学会長、学術会議、IUPAP(International Union of Pure and Applied Physics)委員、2005世界物理年、物理オリンピック [国内予選大会筑波開催のときには、茨城大学にお世話になった]
- 2005-2008 「科学技術の智」プロジェクト
- 2008- 大学教育の質保証の検討；21世紀の知性とは？

科学技術リテラシー像の構築は21世紀社会のデザイン

- 「科学技術リテラシー像」構築とは？：成人がもつべき科学の知識、技能、考え方を整理して文章化すること。すなわち21世紀の日本をデザインすること。
- 科学的思考をもって、個人と社会が、長期的展望をもって自ら意思決定できる社会を構築しなければならない。地球と人類の将来を見通す叡智。
- 21世紀とは？世界のそれぞれの構成員がかけがえない存在として認められる世界(「恐怖と欠乏のない世界の到来」、世界人権宣言1948年、日本国憲法1946年)、存在の基盤としての地球環境の持続、demographicalな偏り(富、人口構成、食料生産、など)

「科学技術の智」プロジェクトとは

- 「智」は「智慧」の「智」：あたま、こころ、からだで体得する「生きる力」である。人類の智として、協同して世界の課題にチャレンジするための基礎的知識、技能、考え方
- 協同の「智慧」であると同時に個人がもつべきもの「智慧」
- この智慧を明示することを目的とするプロジェクトである。
- 持続可能性：人々の連帯(social cohesion) winner-loserの分離からleader-followerの協働社会へ

科学リテラシーの考え

- すべての人が共有すべき科学の素養「智慧」：あたま、こころ、からだで体得する「生きる力」である。人類の智として、協働して世界の課題にチャレンジするための基礎的知識、技能、考え方
- 米国の試み「Science for All Americans」(1989, AAAS)
- Science is the blend of logic and imagination.
Systems, Models, Constancy and change, Scale
- <http://www.project2061.org/>

科学リテラシーの三段階

- Step 1 日常生活に困らないように：器具の修理、機器の作動の原理 [一般にブラックボックス化している]
- Step 2 科学技術の関わることについての社会の決定の参加できる [科学技術は生活に大きな影響を与えている]
- Step 3 自分の専門職と異なる他の科学技術の分野の専門家と協働できるための素養。 [持続可能性についての課題が複雑化している]
- "Science for All Japanese" Project: 日本の将来像を想起して、すべての日本人が身につけるべき科学技術の素養を策定

<http://www.science-for-all.jp/>

7

大学教育の分野別質保証の在り方審議の経緯

- 平成20年 5月 文部科学省から日本学術会議への審議依頼
6月 課題別委員会「大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会」の設置
9月 審議開始(第1回会合の開催)
- 平成21年 1月 3分科会の設置
・質保証枠組み検討分科会
・教養教育・共通教育検討分科会
・大学と職業との接続検討分科会
2~3月 基調における分野別質保証に関する実情調査
4月 学術会議総会での審議状況の報告
7~8月 各部の夏季総会での説明
10月 学術会議総会での審議状況の報告
11月 シンポジウム「大学教育の分野別質保証を考える」(於東大安田講堂 参加者約700人)
- 平成22年 4月 学術会議総会での審議状況の報告
4~5月 3部評価後継部との共有シンポジウム「これからの大学教育の質保証のあり方」
(第1回 筑上智大10号館講堂 参加者約660人)
(第2回 於一橋記念講堂 参加者約330人)
(第3回 於関西大学BIG4-8100 参加者約300人)
6月 文部科学省中央教育審議会大学分科会での審議状況の報告
7月 学術会議幹事会への付議・了承
8月 文部科学省に対して審議依頼に対する回答として手交

「学士課程教育」答申から、大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会へ

平成20年12月 中央教育審議会答申
「学士課程教育の構築に向けて」

- 日本の学士が、いかなる能力を証明するものであるのか
(各大学が掲げる教育研究上の目的は建学の精神は総じて抽象的)
 - 「学士力」の提案
知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力
※「学士力」が求める普遍的な能力を、分野の教育を通じてどう培うのか?
- 学士課程、あるいは各分野の教育における最低限の共通性があるべき ではないかという課題は必ずしも重視されなかった
※ それぞれの分野が共有すべき固有の特性を適切に踏まえた教育とは?
 - 日本学術会議に対して、大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議を依頼

21世紀の高等教育

「協働する知性」を求めて

- ◆ 大学のユニバーサル化: 55%の若者が高等教育を受ける。学問の継承よりは社会の現場で働く
- ◆ 世界のグローバル化: 交通通信手段の高速化、広域化、多様化。課題の複雑化。

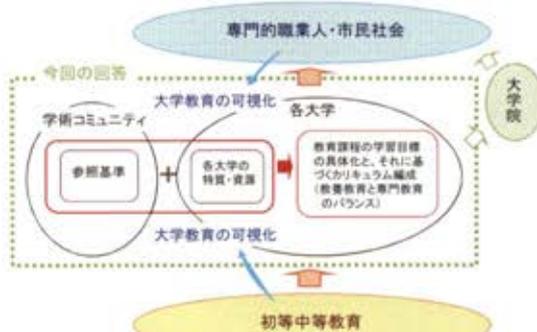
高等教育を受けた人々が、専門的職業人として一定の専門性を担いつつ、専門性の垣根を越えて、良き市民として共に働く(協働する)ことが求められる。

平和で持続可能な世界の構築:

1948年「世界人権宣言」: 恐怖と欠乏のない世界の到来が一般の人々の最高の願望である。

1946年「日本国憲法」: 全世界の国民が等しく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

一人一人の学習者にとって大学教育が意味あるものとなるために



文科省への「回答」の三部構成

- 第一部 どういう枠組みで質保証を行うのか?
 - 質保証枠組み検討分科会
分野別に教育課程編成上の参照基準を決定することを通じて各大学の自主的な教育改善を支援
- 第二部 一方で教養教育・共通教育との関係をどう考えるのか?
 - 教養教育・共通教育検討分科会
分野の壁を越えた協働を可能にする市民性の涵養
- 第三部 教育の質の保証を図る努力をしても、現実の「就活」においては大学と職業とが接続していない (特に文系)
 - 大学と職業との接続検討分科会
専門的な知識・技能が尊重される社会の構築

21世紀の「協働する知性」を涵養する学士課程教育の質保証

分野別の教育課程編成上の参照基準

① 学生に何を身に付けさせるのか

- ◆ 学生たちが、将来社会の現場で、職業人として、市民として生きていく上で、意味を持つものとしての学びの内容を明らかにする。
- ◆ 専門分野の細かな知識や能力を徒に数多く列記するのではなく、将来にわたる基礎となり基本となるようなものを、しっかりと学生が身に付けられるような方向を目指すべき。
- ◆ すべての大学に共有される「参照基準」においては、学びの本質的意義・中核的事項に絞り込むことが必要。
- ◆ 具体的にどのような肉付けを行うかは、各大学が自ら考える。

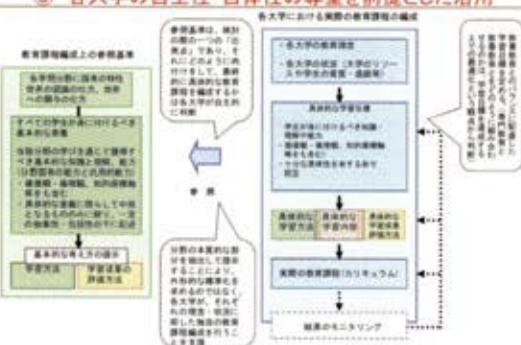
分野別の教育課程編成上の参照基準

② 教育の質保証に関する基本的な考え方

- ◆ 大学は、各分野の教育課程について、具体的学習目標を定めて、その学習目標を実現するための教育課程(カリキュラム)を編成すべき
- ◆ 最も基本的な意味での「教育の質の保証」のサイクル
 - 各学問分野の特性 & 各大学の理念と現実
 - ● 学習目標の具体化
 - ● 学習方法、学習成果の評価方法の具体化
 - ● 教育課程(カリキュラム)の編成・実施
 - ● (以上のサイクル全体の検証)
- ◆ 学術会議において、分野別に教育課程編成上の参照基準を策定し、各大学の自主的な教育改善の取組みを支援

分野別の教育課程編成上の参照基準

③ 各大学の自主性・自律性の尊重を前提とした活用



分野別の教育課程編成上の参照基準

④ 参照基準の具体的な構成要素

※ 各大学が柔軟に展開できるよう、学士課程教育の中核となるものに絞って、一定の幅と抽象性を持たせた形で記述

1. 各学問分野の特性
世界の認識の仕方・世界への関与の仕方
 2. すべての学生が身に付けることを目指すべき「基本的な素養」
基本的な知識と理解、分野に固有の能力、ジェネリックスキル
★ これらを定めるに当たっては、今後学生が、職業人として、あるいは市民として生きていく上でどのような意義を持つのかを明確にすること
 3. 学習方法・学習成果の評価方法の基本的な考え方
★ 単なる知識や理解ではなく、それを活用して「～できる」ようになること、そのための学習方法の重要性
 4. 市民性の涵養をめぐる専門教育と教養教育との関わり
★ 報告書の第二部「学士課程の教養教育の在り方について」との接続
- ☑ 各分野の教育の意義に関する、大学と社会との共通理解の形成

分野別の教育課程編成上の参照基準

⑤ 各分野の「基本的な素養」の内容

- ◆ 基本的な知識と理解「～を説明できる」
- ◆ 基本的な能力「～ができる」
 - ◆ 分野固有の知識や理解を活用して、何かを行うことができる能力
 - ◆ 分野固有の知識や理解に依存しない能力(ジェネリックスキル)
 - ◆ 価値観・倫理観や知的座標軸の形成に関するものも含む(～に関して適切な判断ができる/～に関して適切に理解できる など)
- 上記の知識や理解、能力が、学生にとってどのような意義を持つのかを明確に理解できるようにすること
 - 職業生活における有用性
 - ・分野固有の知識や理解の活用能力が、特定の職業の専門知識に直結する場合
 - ・もの見方・考え方など、分野固有の知識や理解の活用能力が、緩やかな形で職業上の有用性を持つ場合
 - ・分野に固有の知的訓練を通じて獲得されるが、分野に固有の知識や理解に依存しない能力(ジェネリックスキル)として有用性を持つ場合
 - 公共的な課題に関わる市民としての生活における有用性
 - より本源的・一般的な意味での有用性

分野別の教育課程編成上の参照基準

⑥ 当面の策定予定について

- ◆ 当面主要な30程度の分野を3年程度の期間をかけて手がける予定
 - 最初の策定作業はモデル的な位置付けとして、分野の数を絞って行う。
 - 分野の取り上げ方については、課題別委員会と各部・各分野別委員会とで十分に協議して決定する。
 - 審議期間はある程度柔軟に考える(8ヶ月～1年程度、必要に応じてそれ以上)
 - 主要な分野を策定し終えた以後も、必要に応じて追加を行う。
- ◆ 参照基準の策定のための分科会の設置
 - 課題別委員会の下に各分野ごとの分科会を設置して審議を行う。
- ◆ 分科会のメンバー構成等について
 - 関連する学協会の参画
 - 大学の多様性が適切な形で代表されること
 - 若手教員や職業人、隣接する他分野等からの参画や意見の聴取 等

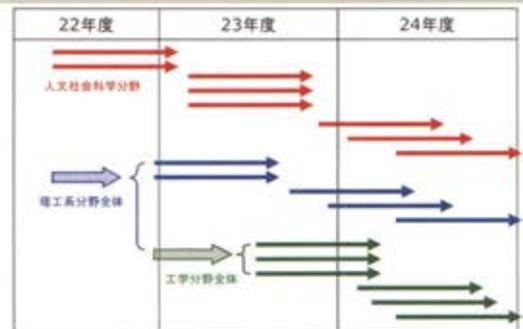
分野別の教育課程編成上の参照基準

⑦ 「分野」についての考え方

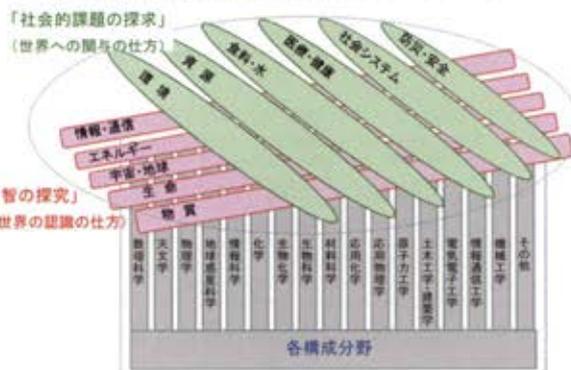
- ◆ あくまで学士課程段階の教育に関する分野
(研究のための細分化した専門分野ではない)
 - ◆ 「知的訓練方法の固有性」によって境界づけられる存在としての「分野」の理解
(※「分野 = ○○学部○○学科」という考えに固執しない)
-
- ◆ 分野と学科(教育課程)が重なる場合
 - ◆ 分野は、学際的・複合的な教育課程の構成要素に位置付けられるが、知的訓練方法の固有性という意味においては、学科よりも分野に属すべき場合
 - ◆ 元来は複数の分野からなる学際的・複合的な分野・教育課程だったが、学際的・複合的な姿自体が既に確立した独自の分野として位置付けられるべき場合
- ◆ 分野間に一定の包含関係が存在する場合は、できるだけ大括りの分野から参照基準を策定し、必要に応じて細かな分野を取り上げる

分野別の教育課程編成上の参照基準

⑧ 策定作業の工程表についての考え方



理工系分野全体の共通方針検討についてのイメージ



教養教育について

① そもそも教養教育とは何か？

- ◆ 分野別の参照基準は、専門教育と教養教育との関係に照らして、どのように活用されるべきか
- ◆ そもそも教養教育とは何か？

—— 歴史的事実としての教養教育の「原点」の検証 ——

- ◆ 戦後の新制大学に導入された「一般教育」
- ◆ 米国の大学の教養学部のカリキュラム
「自由社会における一般教育」
(General Education in a Free Society, 1945, Harvard Univ.)
教育における行き過ぎた専門主義の傾向が、民主主義社会を支える人々の共通の価値基盤を揺り動かす危険性への危機
- 民主主義社会を支える市民の教育として、専門教育とは独自の意義を有する存在としての教養教育の再確認
- ※ 教養教育は、単なる準備教育でも、ジェネリクススキル養成教育でもない。

教養教育について

② 市民性を裏付ける教養概念の変容

- ◆ エリートとしての大学生からマスとしての大学生へ
1970年前後の世界的な学生反乱と、伝統的な教養概念の失効
- ◆ その後の新しい市民社会の形成
物質的な豊かさを追い求める価値観への懐疑や環境問題、人権問題、フェミニズムへの関心をめぐる消費者運動やNPO活動など、マルクス主義的な体制選択論には還元されない、新しい社会参加や連帯を基軸とする現代的な市民社会の形成 ※ 日本での大きな立ち遅れ
社会の公共的課題に対して、立場や背景の異なる他者と連携しつつ取組む姿勢と行動としての「市民性」を備えた人々による社会
- ◆ 1990年以降の世界の大規模な社会変動
グローバル化に伴う産業構造の変化やメディアの変容による大規模な社会変動に対して、単に適応するだけでなく、未来に向かって現状を作り変えていく「対応力」の重要性
過去を学ぶことによってあり得た現在を想像し、現在を深く知ることによってあり得べき未来を構想する力

教養教育について

③ 実際の教養教育の在り方についての提言

- ◆ 現代的な知の共通基盤の形成
- ◆ 現代社会の諸問題：「現状がなぜこのようになっているのか」という共通の疑問に端を発し、「現状をどのように変えるべきか」を徹底的に思考させること
- ◆ 文系と理系の問題：偏りを克服する教育とともに、現代社会における科学技術の在り方をめぐる教育(新たな科学技術リテラシー)や、細分化の著しい現代科学の総合的な把握の重要性
- ◆ コミュニケーション能力の育成
- ◆ 一方的な情報伝達とは異なる対話の本質：自らの意見や感覚が変容する可能性を秘めた営み、異なる意見、感覚を持つ人々と出会い、「聴く」能力の重要性
- ◆ 言語の公共的使用能力という意味における日本語運用能力の向上
- ◆ 国際共通語としての英語教育と、異文化理解のための外国語教育の在り方
- ◆ 知識とインターネット
- ◆ 知識の作者性、体系性、歴史性の意義をしっかりと理解したインターネットの活用
- ◆ 芸術や体育の持つ意義
- ◆ 言語と論理偏重教育からの脱却、サービス産業中心社会に対応した柔軟な思考とコミュニケーション能力を育成

教養教育について

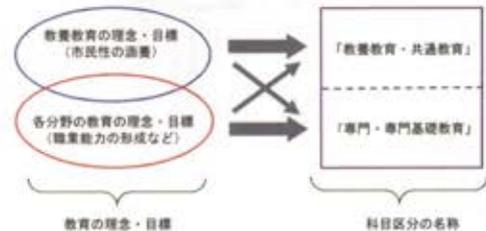
④ 実際の教養教育の在り方についての提言(続き)

- ◆ 専門教育に於ける教養教育の意義
 - ・ 自分が学習している専門分野の内容を専門外の人にもわかるように説明できる
 - ・ その専門分野の社会的、公共的意義について考え理解できる
 - ・ その専門分野の限界をわきまえ、相対化できる
- ★ 教養教育を、必ず専門教育に先立って行うべき理由はない
- ◆ 参加型学習の必要性
 - ・ teachingからlearningへ
 - ・ 多様な背景の学生の育成の重要性
 - ・ 教室のデザインの重要性
- ◇ 大学教育を担う教員の「再建」
 - ・ 現任教員の意識、大学院教育の改善、非常勤依存の改善
- ◇ 「隠れたカリキュラム」・ 社交空間としての大学の存在の重要性
 - ・ 専門的知識の多寡に還元されない人柄
 - ・ 未来の主人公の精神に「火を点ける」

教養教育について

⑤ 教養教育と専門教育との関係

教養教育と専門教育との関係についての概念図



- ・ 教育の理念・目標と、科目区分とは一旦区別して考えるべき
- ・ 教養教育の理念・目標と、専門教育の理念・目標とは、異なりながらも重なり合う
- ・ 科目区分としての教養教育と専門教育が、相互に関連して、教育理念の実現のために編成・実施される

大学と職業との接続について

① 当面の就職問題への対策

- 「早期化問題」から「大学と職業との接続問題」への対策枠組みの拡大
- ◇ 学生が意義の乏しいエントリーの多発に走らずにすむよう、適切なキャリアガイダンスを充実
 - ◇ 意義の乏しい就活プロセスの抜本的肥大化は抑制する一方で、企業を含めた「外の世界」を知る機会を、むしろ早期から整備
 - ◇ 学事日程と就職活動の両立のために、土日祝日や長期休暇の有効活用などを折り込んだ具体的なルールやプロセスを大学と産業界とが協働して整備
 - ◇ 「就活」に伴う学生の負担の軽減と、就職できない若者に対するセーフティネットの構築・採用における「新卒」要件の緩和の必要性
 - ◇ 今後の新しい就職・採用活動の在り方としての、緩やかな職種別採用方式への期待（「仕事」に対する目的意識の明確化と、具体的な仕事を目標とした学びの実現）
- ◆ そして、大学教育の職業的意義の向上と、社会によるその適切な評価

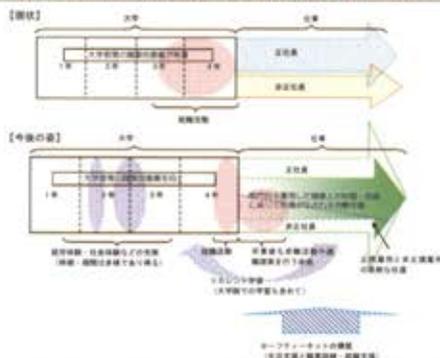
大学と職業との接続について

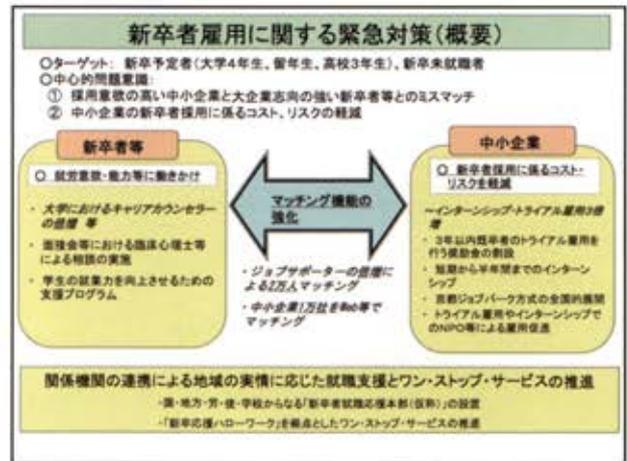
② 今後目指すべき大学と職業との新しい接続

- 大学教育の職業的意義の向上
- 大学で学んだ内容と求める人材像との適合性を重視した 志望動機・採用基準に基づいて、大学教育の概ねの課程を修了した段階で開始される就職・採用活動
- 卒業後も求職活動や就職探索を行う余地が幅広く認められる初期職業キャリア
- 専門性を重視した職業上の知識・技能に応じて正規雇用・非正規雇用間で均衡した処遇がなされる労働市場
- 必要に応じて何度でも学び直せるリカレント学習の拡大
- 生活支援と職業訓練機会の付与、就職支援とが一体となったセーフティネットの構築

大学と職業との接続について

③ 今後目指すべき大学と職業との新しい接続(図解)





今後に向けて

質保証のための社会全体の連携の実現

- ◆ 社会の要請に応えるため、大学コミュニティでの相互支援体制の構築

今後、各大学の取組みを支援するため、学術会議とともに、各種の学協会や大学横断的なFD団体、さらには国公立の大学団体や認証評価機関など、大学コミュニティを構成する幅広い関係機関が連携協力することが重要
- ◆ 新しい産業社会の構築と、そこでの新しい大学教育の実現のための、社会全体の連携の必要性

大学・教育界のみならず、企業・産業界、労働界、政府、さらには広く社会一般の人々が、手を携えて新しい社会の実現に向けて連携協力することが重要

ご静聴ありがとうございました。

1. 今回の全学FDへの参加の動機は、次のうちどれにあたりますか。

- (a) 自ら興味 24票
- (b) 所属機関の要請 6票
- (c) その他 0票

2. 今回の全学FDに参加して得るものがありましたか。

- (a) 大いにあった 14票
- (b) 少しはあった 14票
- (c) ほとんどなかった 0票

3. 設問2. で (a) または (b) と答えた方に：どのような収穫があったかお知らせ願います。

- ・ 参照基準についての情報と考え方
- ・ 学術会議で参照基準なるものが議論されていることを初めて知った。
- ・ 芸術や体育の持つ意義など新しい参照基準の情報を得た。
- ・ 全体にわたって整理されたお話を聞くことにより、今まで持っていた漠然とした違和感が整理されたような気がする。
- ・ 中教審答申の「学士課程教育の構築に向けて」の具体的な情報をいただいた点が、とても良かった。
- ・ 大学教育全体の動きがわかったこと（学術会議の取り組み）
- ・ 日本学術会議や文科省の大学教育への危機感がうかがえると同時に大学教育における問題点が認識された。
- ・ 大学の教育改革における学術会議の役割とその重要性
- ・ 認証評価と参照基準との今後の関連について
- ・ 各分野別で学ぶ学生の質保証を行うための検討状況がわかった。
- ・ 結局のところ身につけるのは学生であって、そのモチベーションをどうやったらあげるのに役立つのか、ということに唯一解などないし、絶対正解もない。いかに「生きている、変化しつづける大学生達」に有効な気づきを与えるのかは「知識の受け取り」では限界があって、生の学生とのレスポンスの分析と、相互作用を行いつづける感性を磨き続けることを抜きには進まない、ということがわかった。
- ・ 議論の最新状況がわかった。
- ・ 学術会議での検討状況がよく分かった。とくに、教養教育と専門教育の質保証のしぐみの状況が分かった。

- ・ 学術会議の活動、方向性が少しわかった。
- ・ 学士課程の再構築か構築かの議論の背景が解った。
- ・ 参照基準について、“分野”と“教養”の関係と問題点が理解された。
- ・ 教養教育の組織ではなく中身に踏み込んだ内容であり、高等教育、大学教育とは何かということを考えさせられる内容でした。
- ・ 教養教育の意義と構成要素について論理的な知見を得ることができた。カリキュラムデザインにとっての明確な方向性が見えた。
- ・ 参照基準を各学問で作成しようという試みがあることを知ったこと
- ・ 全文を読んでもよくわからなかったのだが、今回のFDでエッセンスは理解できたと思う。
- ・ 参加して下さった先生方は「答申」を持参していなかったもので、レジメだけで理解してくれたのか、不安。
- ・ 質の保証にかかる基礎的知識の習得と本学教員の疑問点等について理解できた。
- ・ これからの改組、改革を進めるために大変有意義となった。

4. 「分野別質保証の在り方」に関して、課題やご意見をお書きください。

- ・ 大変だと思いますが、参照基準のたたき台を作って、それを議論する手法で良いと思う。ただし、誰がそれを作るのかが問題となるであろう。
- ・ 高校生が、学部ごとの「参照基準」を読んでその学部の教育に関心を持ってもらう必要があるでしょうし、そこに書いてあることが、卒業までに確実に習得できる教育に改善していく必要があると思います。そのためには、先生方1人ひとりが、忙しい中大変だと思いますが、何のために教育しているのか再考いただき、茨城大学の教育を受けたいと思ってもらえる高校生が増えるように努力願いたいと思います。
- ・ 本学独自の参照枠を作製する必要性を感じた。
- ・ 具体的に何の力を保証するか（参照基準？）という中身を検討しなくてはならないと考えます。
- ・ “教養”の“質”を担当する根拠は？
- ・ 分野のくくりの大きさ（工学 or ○○工学）と参照基準の程度が問題。工学では大きすぎるが、学科レベルでは小さすぎるということではないか。
- ・ 結局は各大学が主体的に判断するしかないのだろう。
- ・ 質とは何だろうか？教える内容（コンテンツ）のレベル？教え方？学ぶ環境？学生が自ら学ぶことをインスパイアする、気づきの与えるチャンス？すべてが質にかかわると思うが。保証とは？学生が自分の物として役立てられるようになることが質、とすれば主体は教育ではなく学生の向上のプロセスになる。
- ・ 十分に情報を収集・分析し、教育改革の推進に役立てる必要がある。

- ・ 今後の教養教育カリキュラムの検討にあたって新たな課題が与えられていると感じた。
- ・ 現在の評価方法が単なる知識を問うだけになっているのではないかという気がします。学生の評価方法についてどうすべきであるかが重要かと思います。
- ・ 基本的に現在進んでいる JABEE の充実で良いと認識できた。
- ・ 質保証は有意義であると思うが、同時に、画一的にならないよう、その後（質保証以上）の教育についても検討する必要がある。
- ・ そもそも保証ができるのか。教えた内容を学生が全て理解できるとは限らない。テストできる部分も限られている。何をもって保証と言うのか、が課題であると思う。
- ・ 各学部でのカリキュラム改革の進行との関係をどうするか。

5. 「21 世紀の教養教育」に関して、課題やご意見をお書きください。

- ・ 今日の講演では、専門教育との連携（教養教育と）が出てきました。茨大でのあり方について議論を。
- ・ 共有知としての教養、全人格形成としての教養、という概念は良いが、具体的内容としてカリキュラム化することが可能であるか？
- ・ 教養教育・共通教育の中身と位置付けの再検討
- ・ 教員からの一方的な学生への知の継承だけの教育ではなく、学生の参加型の授業の充実が課題かと思います。（教養教育に限らず専門教育においても）
- ・ 現在までの積み重ねを生かし、計画を着実に実現すること
- ・ 大学の教養教育とは leader としての教養？ follower としての教養？あるいはそれとは無関係に主体的社会人として生きるための教養？大学はどの教養を目指すのか？すべて、ということにはなり得ないと思う。何となく今日のはなしは3番目を目指しているように思えた。
- ・ 「教養教育」に絞り、理論ではなく実践（具体論）を聞きたい。
- ・ 教養と専門（学部）をどう組み合わせるかを構築していくかが問題。現状のやり方ではむずかしい。
- ・ 今日紹介された学術会議の在り方に関する提言の考え方におおむね賛成である。
- ・ 茨城大学の第3期を展望すれば取り組むべき課題
- ・ 提言にある4つの項目（現代的な知・コミュニケーション能力・知識とインターネット・芸術体育）などと科目との整合性等を考えていくと、教養教育自体を担う教員自身をもっと学識を深めていかななくてはならないと思う。教養教育は学部も含め大学全体で責任を持って行われなくてはいけないと考えます。
- ・ 教養教育の中核をなす学部を立ち上げる必要性を感じる。
- ・ 新学部構想では、スライド「24」の内容がいかされるようなものになるといいと思った。

6. その他ご意見があればお書きください。

- ・ 議論の時間をふやした方がよい。事前に資料を配布しておいた方が理解が進む。
- ・ 全学的に重要な案件なので、少なくとも各学部の教務に関わる者は出席を義務化する等、参加者増の工夫されたし。
- ・ 貴重なお話をして頂きました。北原先生に感謝いたします。ありがとうございました。
- ・ タイムリーな企画。内容もよい。ただし参加者が少ないのは残念。
- ・ 学務部職員は、非常勤職員以外は全員が出席してしかるべきだと思うが、全員はいないように思えた。問題だと思う。
- ・ 池田先生、両理事が欠席…。関心はないのでしょうか。どうでもいいと思ってらっしゃるの？
- ・ 今日のお話は、授業内容、カリキュラムの設計を「教える立場」から提案されていたように思う。どんな有益な授業内容でも、生きている、存在する学生がその有益性に気づかなければ、どうなのだろう。学びとる、つかみ取る基本姿勢があやうい学生に、どうやってその「有益性に気づく姿勢」をつけてもらうのか？そのことからまともに対応しなければならぬ現実を先ず正面から受けとめないと始まらないはずである。
- ・ 準備、運営にかかわった方々に御礼申し上げます。
- ・ 保証という概念は、社会からの要請という側面が強い。学生の幸せのため、という観点も必要ではないか。自己学習能力の養成をどのように達成するかが重要と考える。

自由記述については、明白な誤字脱字を除き原文のまま掲載した。

大学教育センター 教育点検支援部

大学教育センターFD 2010
「大人数講義法の基本スキル ～よい講義をするために～」

日時 平成23年2月18日(金)13:00～15:30

場所 茨城大学総合研究棟(K棟)インタビュースタジオ

(日立地区・阿見地区へVCS配信)

趣旨 茨城大学でも、大人数講義は数多く開講されておりますが、大人数講義における様々な問題を抱えたまま、実施されているのが現状です。今回は、様々な取り組みを実践している、愛媛大学の小林直人(教育・学生支援機構 教育企画室長)をお迎えして、具体的な改善策を提供して頂きます。大人数講義を担当している教員だけでなく、新しい講義法を学ぶためのきっかけになることを期待しております。

プログラム

1)開会の辞(13:00～13:10)

田代 尚弘 (茨城大学教育担当副学長)

2)特別講演(13:10～14:50)

小林直人(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室長)

※ワークショップ形式で実施されます。二部構成で行われ、途中休憩が入ります。

3)質疑応答(14:50～15:20)

4)閉会の辞(15:20～15:30)

森野 浩(茨城大学 大学教育センター長)

司会進行 梅原守道(大学教育センター講師)

『大学教育センターFD 2010』実施報告

大学教育センター 教育点検支援部

実施概要	副題	大人数講義法の基本スキル ～よい講義をするために～
	日時	平成23年2月18日(金) 13:00～15:30
	場所	茨城大学総合研究棟(K棟) インタビュースタジオ (日立地区・阿見地区へVCS配信)
	対象	大学の教職員

大学教育センター主催のFDが標記の通り開催された。今回のテーマは「講義法」である。特に、大人数授業に焦点をあてて、授業方法の具体的な改善策を提供するべく標記の副題を設定した。かねてより具体的スキルについてのFD開催には多く要望が寄せられており、今回はこういった声にこたえる形となった。講師として、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の小林直人室長(愛媛大学医学部教授)を招いた。愛媛大学教育企画室は先進的なFD活動で知られており、本学には平成20年度に実施した「FD担当者へのワークショップ」(平成20年度FD研究会、詳細は年報第13号を参照願いたい。)の際にも講師を派遣していただいた経緯がある。

今回のFDは、小林教授による双方向型の研修(特別講演)、続けて質疑応答の2部構成で進行した。研修では「良い授業とは何か」という大きな観点から話が興され、そこから具体的な講義術に至るまで詳しい解説がなされた。聴衆を惹き付ける小林教授の講演そのものが、今回のFDテーマに対するひとつの解答たりえると感じられるものであった。

なお、今回のFDには、水戸地区21名、日立地区3名、阿見地区5名(日立・阿見へはVCS配信)の計29名(役員4名、教員23名、職員2名)の参加があった。本報告には関連資料として下記の書類を添付したので併せて参考にさせていただきたい。

(梅原守道)

添付資料一覧

- [1] 参加者対象の事後アンケート集計結果
- [2] センターFD開催および参加者募集のポスター
- [3] センターFD当日の配布資料(小林教授による講演スライド資料を含む)



小林教授



講演の風景

2011年2月18日（金） 茨城大学大学教育センターFD研究会

『大人数講義法の基本スキル ～よい講義をするために～』

愛媛大学 教育・学生支援機構 副機構長/教育企画室長
小林直人 naoto@m.ehime-u.ac.jp

(1) 本日の Menu

- ・イントロダクション：目的と目標
- ・グループワーク：『
』
- ・なぜ講義をするのか？
- ・質疑応答
- ・『理解しやすいように話す』スキル
- ・まとめとアセスメントなどなど



(2) 参考文献

「大学教員のための授業方法とデザイン」（佐藤・編、玉川大学出版部、2010）

「愛媛大学FDハンドブック もっと！授業を良くする」第1巻、第2巻、（第3巻）

「成長するティップス先生」（池田ら著、玉川大学出版部、2001）

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/> （電子版 Ver. 1.2）

...ここから下は教材です...

(3) 以下の質問に○か×で答えてください（どちらかを囲んでください）。

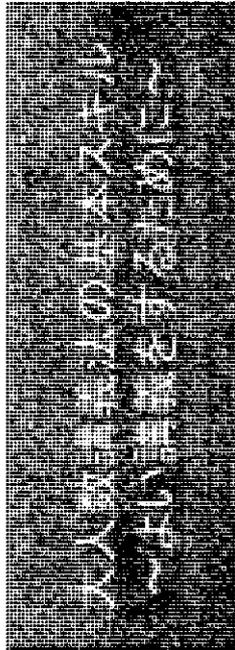
- ・授業では、教科書では不足する部分を講義するのが良い。 ○ ×
- ・学生から良く見えるように板書は中央だけを使うようにすると良い。 ○ ×
- ・板書は書いた順番に消してゆく必要がある。 ○ ×
- ・授業のプリントには必要なことを全て書いておくと良い。 ○ ×
- ・授業のプリントは重要な用語が列挙されているのが良い。 ○ ×
- ・授業のプリントは冒頭に配布しておく必要がある。 ○ ×
- ・大教室では学生から良く見えるように教壇に立っているのが良い。 ○ ×
- ・学生とのコミュニケーションは小教室ならではである。 ○ ×
- ・どの学生でもわかるようなことは質問しない。 ○ ×
- ・どの学生にも答えられないことは質問しない。 ○ ×

(4) あなたにとって今日の講座の良かったところは何ですか？

どこを改善するともっと良くなると思いますか？

愛媛大学 大学教育センターFD研究会

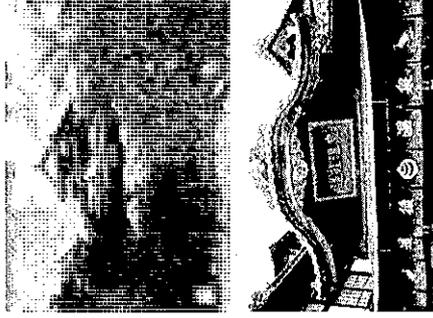
2011.02.18. 13:00～



愛媛大学 教育・学生支援機構
副機構長/教育企画室長
小林 直人

EHIME
UNIVERSITY

本日のメニュー



1. イントロダクション
(本日の目的と目標)
2. 「キーワード」を明確にする
3. なぜ講義をするのか?
4. 質疑応答
5. これまでに私が学んだこと
6. 「理解しやすいように話す」
「わかるように話す」

EHIME
UNIVERSITY

本日のキーワード

キーワードを明確にする
大きい声ではっきりと話す
違いがわかるように話す

EHIME
UNIVERSITY

1 本日の目的

「学生中心の大学」の実現
のために“良い”講義がで
きるようになる。

EHIME
UNIVERSITY

1 本日の目的

「学生中心の大学」の実現のために
“良い”講義ができるようになる。

⇒(医)学生にとって“良い”講義とは？

ポイントが強調されている
話している声がよく聞こえる
プリントが見やすくできている

1 本日の目的

「学生中心の大学」の実現のために
“良い”講義ができるようになる。

⇒“良い”授業とは？

わかりやすい授業
知的な緊張感のある授業
学生が参加する(した気にさせる)授業

1 本日の目標

講義をするときに注意が必要
なスキルや話し方のコツ
を実習を通して習得し、
習得したことを自分の講義
に生かすことができる。

2 「キーワード」を明確にする

『“その講義のキーワード”を学生に
“実感”させるにはどうしたらよいか』

“Think, Pair, Share”
の手法を使ってみましょう！

3. なぜ講義をするのか？

「講義」をする意味は？

重要なこと
分かりにくいこと、間違えやすいこと

もっと伝えたいことは？

EHIME UNIVERSITY

4. 質疑応答十⑩

質疑応答の時間です。

私語が出やすいタイミング
とは？

EHIME UNIVERSITY

4. 質疑応答十⑩

学生が講義についてこられ
なくなったのではないか？

- ・聞き取れなかった？
- ・板書が見え/読めなかった？
- ・話の流れから取り残された？
今は、教科書/プリントのどこ？

EHIME UNIVERSITY

5. これまでに私が学んだこと

以前のスキルアップ講座で私自身が
学んだこと
—佐藤龍子先生(静岡大学)の講習のメモから—

☆講義 二

EHIME UNIVERSITY

5. これまでに私が学んだこと

☆講義 =
体(心) + 顔(表情) + 話

姿勢 + 音声 + 表情 + 内容

☆「話し方」は教員のマナーである
「話し方に気持ちちが透けて見える」

EHIME
UNIVERSITY

5. これまでに私が学んだこと

☆気をつけるべきこと

授業の前には鏡を見る！

⇒表情と身だしなみをチェック

深呼吸してストレッチ！

⇒話し手も聞き手もリラックス

アイ・コンタクトする！

EHIME
UNIVERSITY

5. これまでに私が学んだこと

☆意識すること

「滑舌」

「声の大きさ」

「語尾・文末の明瞭さ」

「声のトーン・抑揚」

「間の取り方」

EHIME
UNIVERSITY

6. 理解しやすいように話す

【のばす音】

東温市

【つまる音】

覇気と発揮、敵と鉄器

EHIME
UNIVERSITY

6 理解しやすいように話す

【難しい子音】

哀惜と排斥と解析
漫画と南画
総胆管と総肝管

☆子音の発音に時間をかける

EHIME
UNIVERSITY

6 理解しやすいように話す

【同音異義語】

端と箸と橋
以外と意外
静的と性的

★どうやって区別しますか？

EHIME
UNIVERSITY

6 理解しやすいように話す

【文末、特に否定形】

○○です。
○○でないです。
○○考えられます。
○○考えられません。

★意味が逆転してしまう？

EHIME
UNIVERSITY

6 理解しやすいように話す

【専門用語】

家族性リポタンパク質リパーゼ抑制
因子症候群

HDL、IDL、LDL、VLDL

★難解な学術用語、外国語、URL
⇒どうやって理解させますか？

EHIME
UNIVERSITY

まとめ

- ゆっくり話す
大きな声で話す
- 子音をはっきり話す
否定語や文末を強調する
- アイ・コンタクトして話す
聞き手に近寄って行って話す

愛媛大学
EHIME UNIVERSITY

まとめ

- キーワードを強調して話す
特に抑揚をつけて
前後に間を入れて
何度も繰り返し返して
- 紛らわしい言い方は避ける
板書やプリントを併用する

愛媛大学
EHIME UNIVERSITY

ご静聴ありがとうございました

1. イントロダクション
(本日の目的と目標)
2. 「キーワード」を明確にする
3. なぜ講義をするのか?
4. 質疑応答
5. これまでに私が学んだこと
6. 「理解しやすいように話す」
「わかるように話す」



モチ

愛媛大学 教育・学生支援機構
副機構長/教育企画室長

小林 直人 naoto@m.ehime-u.ac.jp

愛媛大学
EHIME UNIVERSITY

SPOD7ホワイエ



- ・ 2011年8月23日（火）～26日（金）
- ・ 愛媛大学（城北キャンパス、松山市）
- ・ <http://www.spod.ehime-u.ac.jp/>

御来松をお待ちしております。

愛媛大学
EHIME UNIVERSITY

「〇×テスト」の例 兼 セルフ・アセスメント

※先ほどと同じ質問で、本日の講習をまとめてみましょう。

- ・授業では、教科書では不足する部分を講義するのが良い。

⇔

- ・板書は中央だけを使うようにすると学生から良く見えて良い。

⇔

- ・板書は書いた順番に消してゆく必要がある。

⇔

- ・授業のプリントには必要なことを全て書いておくと良い。

⇔

- ・授業のプリントには重要な用語が列挙されているのが良い。

⇔

- ・授業のプリントは冒頭に配布しておく必要がある。

⇔

- ・大教室では学生から良く見えるように教壇に立っているのが良い。

⇔

- ・学生とのコミュニケーションは小教室ならではである。

⇔

- ・どの学生でもわかるようなことは質問しない。

⇔

- ・どの学生にも答えられないことは質問しない。

⇔

ご所属 _____ お名前 _____

アンケートにもご協力ください。

《○×テスト 小林が気をつけていること》

- ・授業では、教科書では不足する部分を講義するのが良い。
 - ⇨重要なところ、わかりにくいところ、間違えやすいところ、を講義する。
 - キーワードの数を少なく、授業では全てを話さなくて良い。盛り込みすぎない。
 - 宿題や、配布物（パケット）・副読本（指定教科書など）を充実させる。
 - ⇨キーワードを明示する：繰り返し説明する、小テスト（はじめと終わりに）、板書する（ずっと消さずにおく）、質問する（答えられなくてもいい）
- ・板書は中央だけを使うようにすると学生から良く見えて良い。
- ・板書は書いた順番に消してゆく必要がある。
 - ⇨左（右）端に、メニューやキーワードを書いて、その授業の間は消さずに残しておくが良い。板書を写すための時間を確保する（学生の様子をよく観察する）。
- ・授業のプリントには必要なことを全て書いておくと良い。
 - ⇨重要なことを白抜きにして穴埋め形式にする。その他にも十分な余白を取る。
- ・授業のプリントには重要な用語が列挙されているのが良い。
 - ⇨復習のためには文章による説明が必要になることもある。
 - 授業用の資料（レジメ）と復習などのための参考資料はおのずと異なる。
- ・授業のプリントは冒頭に配布しておく必要がある。
 - ⇨集中して聞きメモを取ることを促すためには、授業の途中（あるいは授業の後）に配付するという方法もある。
 - ⇨初回の授業に配布物をまとめて渡しておくが良い（パケット等と呼ばれる）。
- ・大教室では学生から良く見えるように教壇に立っているのが良い。
 - ⇨可能な限り教壇から離れて前にでる。学生と同じ視線で黒板/スクリーンを見る。
- ・学生とのコミュニケーションは小教室ならではである。
 - ⇨大教室で可能なテクニックもある。文書によるコミュニケーションもありうる。
 - 例えば、プレ・テストで学生の予備知識のレベルを把握することができる。
- ・どの学生でもわかるようなことは質問しない。
 - ⇨学生が質問に答える（学生が授業に参加する）ことそのものも重要である。
 - 正しい答えを肯定する。間違っている（修正はするが）否定はしない。
- ・どの学生にも答えられないことは質問しない。
 - ⇨その授業のキーワードに関わる重要な質問を、一人の学生にではなくクラス全体に問いかけてみる。コミュニケーション・カードやクリッカーの利用も良い。

本日はお疲れさまでした。

1. 今回の大学教育センターFDへの参加の動機は、次のうちどれにあたりますか。

- (a) 自ら興味 13票
- (b) 所属機関の要請 2票
- (c) その他 1票

2. 今回の大学教育センターFDに参加して得るものがありましたか。

- (a) 大いにあった 15票
- (b) 少しはあった 1票
- (c) ほとんどなかった 0票

3. 設問2. で (a) または (b) と答えた方に：どのような収穫があったかお知らせ願います。

- ・ 授業に関して自分でも疑問に思っていたことが解決できた。また気づいていなかった大事な点を気づかせてもらい、今後の授業に役立つと思う。
- ・ 即効性のあるスキルを数多く教えていただきました。
- ・ 様々なスキルが参考になった。自分の次回の講義が楽しみとなる有用なFDであった。
- ・ たいへん具体的なアイデアがたくさん
- ・ 非常に具体的な話が多く、すぐにでも授業で試してみたい部分があった。
- ・ 講義法の大切さ、外（カタチ）（見える）が内（内容）を規定する。
- ・ キーワード明確に、大きい声で、違いがわかるように
- ・ 講義のあり方を考え直す機会になりました。
- ・ 同感できる部分が大いにあった。
- ・ 双方向を基礎に講義を考える必要性を認識できた。
- ・ 学生の反応の引き出し方、講義内容の定着のさせ方
- ・ 講義法について見直す、よい機会になりました。
- ・ 参考になるスキルを多く教わった。学科のFDでも紹介したい。
- ・ 教え方。今後の講義方法に参考になった。
- ・ 授業のあり方を再考できました。

4. 「大人数講義法の基本スキル」に関して、課題やご意見をお書きください。

- ・ 少人数クラスでも役立つスキルがいろいろあり、興味深かった。
- ・ 今まで参加したFDの中で最も面白く、かつ参考になりました。
- ・ テスト等の返却の手間が課題。何かツールはあるのか。
- ・ レナンディの活用との連動
- ・ 大人数のメリットを活かすカリキュラムを。

- ・ 講義をする意味を十分に考えたい。
- ・ 学生側の変化に合わせて授業方法を変えてゆく必要があるように感じています。モチベーションを引き出すのは難しいと感じています。
- ・ 時間と労力が一定程度必要になると考えていたが、工夫次第で効果が出ることが分かった。
- ・ 参加者が少なく、せっかくの有意義な機会がもったいなかったと思います。もう少し参加者をふやす工夫が必要でしょう。
- ・ PCを利用する場合、座学と演習を行うことになる。座学を行う際にはPCが邪魔になり、アイコンタクトなどがむずかしい。その場合は？
- ・ 具体的な例は大変参考になりました。
- ・ 集中させること、学生の参加を引き出すこと

5. ワークショップ形式のFDについて、ご意見をお書きください。

- ・ わかりやすく良かったです。
- ・ 色々なタイプがあると思いますが、今回のようなものはよいと思います。
- ・ 小林先生ご自身がいろいろな例を示して体験させてくださったので、いわゆるワークショップ形式ではありませんでしたが、一般的な講義とはちがう形で学べるものが多かったと思います。
- ・ ただ聴くだけよりも良いと思う。
- ・ コミュニケーションにもプラス
- ・ 楽しかった。
- ・ 参加が少なすぎると思いました。形式は良いと思いますが。
- ・ 参加人数が少ないのが極めて残念であるのと同時に、小林先生に申し訳ない。
- ・ 一方通行ではない双方向のFDはこれからますます重要になることと思います。
- ・ 開催時期を考えてほしい。
- ・ やはりTV会議でなく、水戸で参加したかった。
- ・ きわめて効果的であった。取り入れたいと思う。

6. 大学教育センターFDで取り上げてもらいたい内容や実施方法などについて、お気づきの点があればお知らせ願います。

- ・ 今回のような具体的な内容のものを希望します。
- ・ 人材養成目的と卒業生の評価法
- ・ 社会人基礎力の養成に関すること
- ・ 開催時期が難しいように思われる。

自由記述については、明白な誤字脱字を除き原文のまま掲載した。

大学教育センター 教育点検支援部

各基礎教育専門部会からのFD報告

人文系基礎教育専門部会のFD報告

人文系基礎教育専門部会長
山田 桂子

1. 運営状況・運営体制など

人文系基礎教育専門部会は専門部会長（人文学部）1名と兼任教員4名で運営されている（兼任教員は3名が人文学部から、1名が教育学部から出ている）。また専門部会とは別に、人文系科目を担当する全教員（専任教員）から成る人文系科目担当者会議がある。この構成員は人文学部30名、教育学部13名、全43名である。次年度の担当体制など必要事項の決定の際には、原案は専門部会での審議の後、人文科目担当者会議で審議・承認されるという手続きを踏むことになっている。また、シラバスチェックなどは専門部会が中心となつて行う。

2010年度は分野別教養科目を63本、分野別基礎科目を16本、全体で79本開講した。このうち、分野別教養科目では工学部向けに4本、農学部向けに2本開講し、分野別基礎科目では工学部で4本を開講した。非常勤講師は分野別教養科目で13本、分野別基礎科目で4本である。

クラスサイズの点では、特に人数の多い授業は「人間とこころ」、すなわち心理学系の授業に多い。工学部の必修科目「技術者倫理」である。

2. 授業アンケートのまとめ

●2010年度前期学生アンケート

- ① 47の授業について学生アンケートが実施された。
- ② 受講者満足度の分布を見る限り、全体的な傾向としては、一部の科目を除き学生の満足度は概して高い。それ以外の科目では満足度にばらつきのあるものの、受講生全体が不

満足に傾いているような授業は全くない。

- ③ 学生はあまり予習・復習をしていない。しかしながら、そのことと授業への満足度とはあまり関係が見られない。
- ④ アンケートのQ1とQ2はほぼ連動する。つまり、新しい知識や技術が身に着いたという実感を得るほど授業全体への満足度は高くなり、逆にその実感が低いと授業への満足度も低くなる傾向にある。ただし、新しい知識や技術を得られた実感があっても授業への満足度が低い場合や、またその逆（新しい知識や技術を得られた実感以上に満足度が高い）の場合もある。
- ⑤ 教員側の授業への準備や学生とのコミュニケーションの有無および熱意といった他の質問項目は、ひとつひとつが単独では授業への満足度に直結しない。全体的にバランス良く高い評価にある場合に、全体の満足度が高くなる傾向にあると思われる。

●2010年度前期教員自己点検結果

- ① 41の授業について教員の自己点検がなされた。
- ① 一部を除いて、ほぼ全員が学生アンケート結果を素直に受け入れることができると考えている。
- ② 学生アンケート結果にやや不満があっても、教員は自分の授業を「自信を持って学生に勧められる」と考える傾向がある。また、学生アンケートの結果に不満がない場合も、ほとんどの教員は自分の授業を「自信

を持って学生に進められる」と考えている。このことは、教員側の教育意欲が高いことの表れと解釈できる。

- ③ 教員はあまり自由記述欄を書きたがらない。

3. FD 報告

2010 年度分野別教養科目（人文の分野）・分野別基礎科目（人文系）全体の FD は特に開催されなかった。しかしながら、専門部会および人文系科目担当者会議においては一定の意見交換がなされた。そこで出された主な意見・問題点は次のとおりである。

- ① 教養科目を毎年度に 2 本以上担当している教員の負担軽減問題。
- ② 教育学部教員の担当体制の抜本的改善の問題。（学部内で教養科目の担当調整を受け持つ責任部局がなく、このことが将来の人文系科目の安定的運営への不安材料になっている。）
- ③ 工学部開講の「技術者倫理」のクラスサイズ問題。（クラスが 200 人程度のものであるなど大きく、それが学生と教員の満足度を低くしている。満足度を高めるためにクラスを増やす必要があるが、それは果たせていない。）

4. 今後の課題

上記の FD 報告のところで述べたことが今後の課題であるが、それに下記の点を追加する。

- ① 非常勤時間削減の問題。人文系科目のクラスサイズは小さくなく、また小さいものの中には授業の性格上、受講生数を増やすことが難しいものもある。非常勤時間の削減が今後も進めば、現在の学生の高い満足度を維持することが難しくなる可能性がある。

- ② 教員は依頼されれば 1 科目は教養科目を担当するという大教センターの方針は、今のところ現実の担当体制に反映されていない。3 の①でも触れているが、人文学部の教員は分野別教養科目だけでもすでに長らく平均 1 科目を超えて担当する状況が続いている。これに分野別基礎科目や総合科目などを含めた場合の負担は更に大きくなるため、教員の間には教養科目を担当することに対して疲労感が増している感がある。2 の教員自己評価のところでも述べたように、教員自身の教育に対する意欲は高いので、その意欲をより効果的に発揮できるような、信頼感のある教養教育全体の運営が必要とされている。

以上

社会系基礎教育専門部会の FD 報告

社会系基礎教育専門部会長
中田 潤

社会系専門部会では、2010年度の分野別教養科「社会科学の概観」2本、「社会と法」5本、「日本国憲法」10本、「社会と政治」5本、「社会と経済」18本、「社会と経営」5本、「社会と人間」13本の計58本を開講した。また分野別基礎科目について言えば、「法学入門」2本、「政治学入門」2本、「経済学入門」4本、「経営学入門」2本、「社会学入門」2本の計12本を開講した。

分野別教養科目の総本数58本のうち、人文学部教員により36本、教育学部教員により2本、農学部教員によって4本、非常勤講師によって16本が担当された。非常勤講師依存率は27.6%である。非常勤講師担当科目の多くは、教職科目として必修となっている日本国憲法である。現状では、教職希望の(全学部)の学生に対して日本国憲法の履修機会を保障する必要があり、そのためには年間最低10本の日本国憲法を開講する必要がある。他方憲法を担当できる教員が本学には4名(うち2名は、法律学を専門とするが、憲法を専門としていない)しかおらず、人事政策の措置がとられない限り、この状況は続くと言える。全体としての非常勤依存率は、昨年より若干高くなったが、これは専任講師の病休ならびに学内重要行政職への就任等に起因するものであり、計画段階では昨年と同様であった。また分野別基礎科目は、全て人文学部社会科学科専任教員によって担当され、非常勤講師依存率は0%である。

開講時間帯別の開講本数および平均クラスサイズを列挙すると以下のようにな

る。前期月4(開講本数15本)平均クラスサイズ71.5、前期月5(開講本数2本:日本国憲法:工学部開講)平均クラスサイズ89.5、前期水1(開講本数1本:日本国憲法)平均クラスサイズ222.0、前期木3(開講本数1本:社会と経済:農学部開講)平均クラスサイズ38.0、前期金3(開講本数13本)平均クラスサイズ80.5、前期金3(開講本数2本:日本国憲法)平均クラスサイズ80.5、前期集中(開講本数1本:日本国憲法)平均クラスサイズ59.0、前期月6(開講本数2本:工学部開講)平均クラスサイズ24.5、前期金6(開講本数1本:社会と経済:工学部開講)平均クラスサイズ45.0。41本の前期開講分野別教養科目の平均クラスサイズ77.4人となる。

後期について言えば以下のような。後期水3(開講本数1本:社会と経済:農学部開講)平均クラスサイズ25.0、後期月4(開講本数11本)平均クラスサイズ84.5、後期月4(開講本数1本:日本国憲法)平均クラスサイズ189.0、後期月5(開講本数2本:工学部開講)平均クラスサイズ102.0、後期集中(開講本数1本:日本国憲法)平均クラスサイズ124.0。18本の後期開講分野別教養科目の平均クラスサイズ91.9人となる。前期と比較して後期は、平均クラスサイズが13人近く大きいが、これは昨年とほぼ逆転した現象である。クラスサイズのバランスをとるために、本年は前期の開講数を若干増やしたのであるが、結果的には、後期開講科目のクラスサイズが

大きくなってしまった。今後検討していきたい。

分野別基礎科目について言えば、この科目は人文学部社会科学科に所属する学生に対する必修科目であり、そのためクラスサイズはどの科目とも 125～135 人と大きな開きは存在しない。その結果クラスサイズ平均も、前後期ともこの範囲内に収まる。

次に授業アンケートについて分析していきたい。アンケート実施率について言えば、平成 22 年度前学期開講の教養科目 452 科目のうち、442 科目について実際にアンケートが実施された。全体の実施率は 97.8%であった。社会系科目について言えば、開講科目 47 のうち 43 科目で学生アンケートが実施されており、実施率は 91.5%で、全体の平均よりやや低い。実施の周知を今一層図る必要があるであろう。

クラス満足度の平均は、前期が 0.716 であった。満足度平均だけを見ると、社会系の科目は他の科目と比較して若干低い傾向がある。これをもう少し詳しく検討してみると、学生とのコミュニケーションについての項目と、教室設備についての項目の低さが目立つ。教員の努力が当然必要ではあるものの、多くの教員が教室に学生を詰め込みながら、大規模授業を恒常的に行わざるを得ない構造的問題が存在していることをうかがわせる。

次に「教養科目授業アンケートに係る教員の自己点検結果」および FD 活動の一貫として個々の教員に対して行った聞き取りの結果について述べておきたい。聞き取りについては、社会系科目担当教員全員に向け、当該科目の改善に向けた要望を提出して頂いた。以下部会長の判断で集約してみた。

教養科目向けアンケートは、学生一般の満足度の測定に最大の関心を置いて行われているようである。しかしながら

「学生」と一般化して理解するには、あまりに大きな理解力・知識量・勉強意欲・知的向上心についての差が存在しているようである。確かに知識量の差違に起因する学生間の学力差の存在は教員サイドの努力によって埋めていくべき問題であろう。しかしながら勉強意欲・知的向上心に起因して発生してくると思われる講義への期待・満足度の差違・偏差は、十分に検討する必要のある問題であろう。それに配慮せずに学生一般という形での平均化を行っても、求められる授業像を拡散させるだけで、FD 効果を高めることにはマイナス効果ですらあるかもしれない。例えば「文系と理系のクラス分けをしないと（基礎知識の差違が大きすぎて授業運営が）困難」、「時間をかけて詳しく説明するのもにも限度があった。その結果、1/3 程度の受講生は、授業内容を十分に理解することができなかったようである。ただ、そうであるからといって、この 1/3 の受講生に内容・進度等を合わせた場合には、他の 2/3 の受講生が、この授業に対し、大きな不満を抱くこととなるであろう」、「シラバス通りに授業を展開することを優先した結果、速度(授業進行)が速くなり、それが学生の理解不足につながった。学生のレベルは事前にわからないのだから、杓子定規に「シラバス通り」を求めることは違和感がある」、「学生の背反する記述に悩みます」という教員の感想は、こうした状況の一端を示していると言える。

また設備面への要望も教員サイドよりいくつか出されており、短期的に解決することは難しいかも知れないが、検討しておく必要があるであろう。その中で代表的なものを示すならば、「プロジェクトの設置が不適切であり、教室の後方に座っている学生にはきちんと見えない。学習環境の整備として基本的な問題であ

り、改善を望む」、
「マイクの電池等の
チェックはきちんと事務方で行っておく
べきではないのか？講義途中でかなり離
れた場所にある事務室に戻らなければな
らないのは、教育的に好ましくない」、
「教室の広さについての不満は、教員の
責任外である。こうした項目に関して授
業が評価されるのは納得がいかない」、
「教室と廊下間の防音性が保たれてお
らず、講義時間終わり近くになって、次
の講義のために廊下で待機している学生
が騒がしく、学習環境が保たれない」等
があった。

また受講生とのコミュニケーションの
あり方に関しても多くの教員が困惑して
いる状況が読み取れる。クラスサイズデ
ータからも読み取れるように社会分野で
は100前後から150人程度で行っている
講義が多い。こうしたクラスサイズが前
提となりながら、学生とのコミュニケー
ションの取り方がアンケート項目に盛り
込まれていること（これは評価する側が、
コミュニケーションをとることが望まし
いと考えている、と多くの教員は受け取
っている）に、多くの教員は悩んでいる。
例えば「150人を超える大人数で、パワ
ーポイントの資料もみにくく、応答型の
授業ができなかった」ないし、「120人
も履修登録しておいてこの質問（受講
者と十分なコミュニケーションが図れま
したか？）はいかがなものか」といった
回答はその一端である。

総合基礎教育専門部会 FD 報告

総合基礎教育専門部会長

安田健一

1. はじめに

平成 22 年度の総合科目授業本数は前期 35 本、後期 39 本、学生アンケートの回収率（有効回答数／受講者数）の平均は約 76%であった。クラスサイズの平均は前期 69.3 名、後期 72.4 名であるが、十数名から 200 名超と幅があり、平準化が求められる状況は昨年と変わっていない。さらに水戸地区開講授業だけをバンドごとに細かく見ると、前期火曜 5 講時が 74.7 名、後期火曜 5 講時が 73.4 名であるのに対し、後期金曜 3 講時が 89.5 名と極めて多くなっている。開講依頼時にはなるべく後期金 3 にとお願いしてはいるが、金曜は学外勤務を予定されている先生も多く難しいのが現状である。平成 23 年度はこのバンドに学長主催の授業の開講を予定しており、他授業の負担軽減効果が期待できる。

総合科目における学生のクラス満足度平均値は前期 0.81、後期 0.79 となり、全体としてはほぼ良好な結果と考えられる。

2. 受講者数とクラス満足度

学生のクラス満足度に影響を与えるファクターとしてクラスサイズとの関係が考えられ、昨年度と同様に両者の関係を調べた。図 1 に平成 22 年度の受講者数とクラス満足度の関係を示す。ばらつきが大きいものの、前期、後期に分けて 1 次近似した線が右下がりになることから、受講人数が増えると満足度が下がる傾向は認められる。特に 0.95 以上の高い満足度を得た授業は 50 名以下のものがほとんどであった。この中で最高の満足度を得た授業を平成 22 年度推奨授業として推薦した。

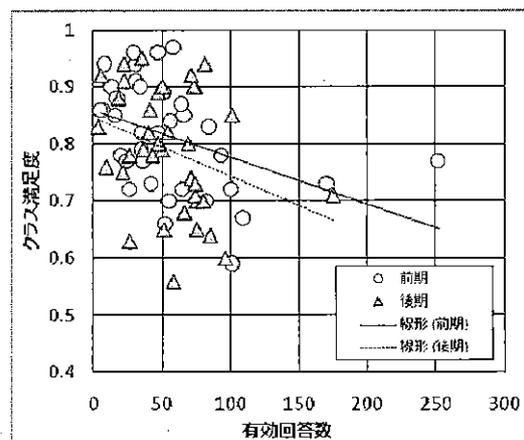


図 1 有効回答数とクラス満足度の関係

3. 学生とのコミュニケーション

昨年度の授業アンケート分析から次の 2 点が満足度向上に効果がありそうなことが示唆された。

- 1) 学生とのコミュニケーションを深める
 - 2) 学生の授業への参画意識を高める
- そこで今年度もこれらに関係すると思われる Q4（教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか）、Q6（あなたは、わからない部分を何らかの方法（教員に質問する・自分で調べるなど）で解決するようつとめましたか）および Q7（この授業のための学習（予習、復習など）

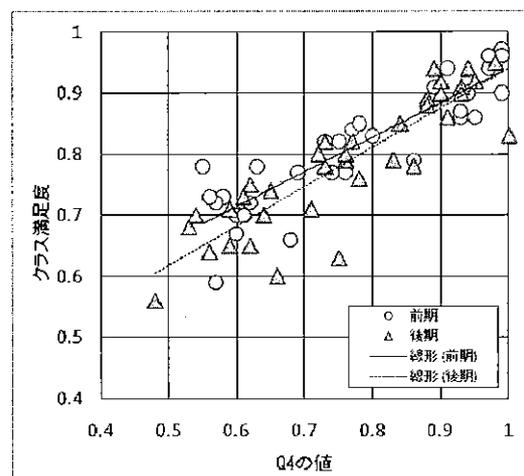


図 2 Q4 の値とクラス満足度の関係

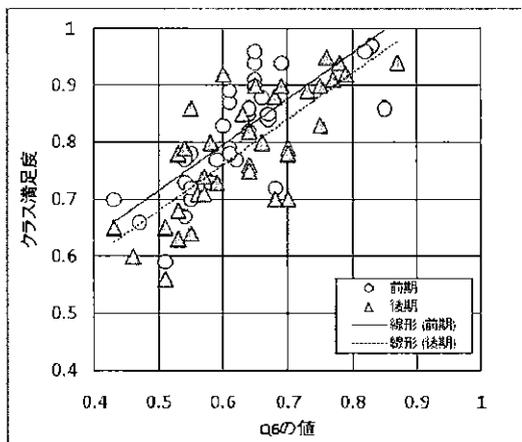


図3 Q6の値とクラス満足度の関係

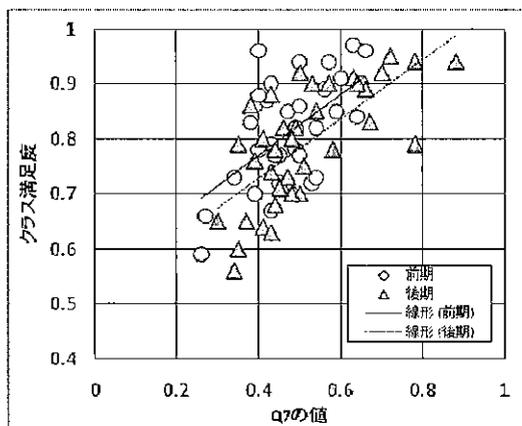


図4 Q7の値とクラス満足度の関係

に十分な時間をかけましたか)と満足度との相関を調べた。

Q4はクラス満足度を算出する際に用いる値なので、図2において両者が高い相関関係にあることは当然とも言えるが、それとは関係のない図3、図4のQ6、Q7についてもはっきりした相関が認められる。

したがって上記2点の有効性は今年度についても同様と考えられる。

4. 学生の参画意識

本年度の推奨授業「異文化理解」をご担当する先生からいただいたコメントから、学生とのコミュニケーションや参画意識を深めるためのヒントを探ることとする。

本授業は異なる文化の人たちを相互に理解しあうということを目的に、その基本

的な考え方、また異文化理解の際に役に立つ概念を学ぶものである。そのため、留学生と日本人学生が日本や世界における様々な問題・トピックに関して討論することで、互いの文化、世界、そして日本の中に存在する様々な異文化にかかわる問題に対する理解を深めている。

授業では、学生が主体的に行動しながら考える参加型学習の手法が用いられ、留学生と日本人学生が協働的に学び合う様々な活動が取り入れられている。具体的には世界の様々な家族の写真を見ながらその差異や感想を話し合ったり、「貿易ゲーム」を通して世界の経済の仕組みを疑似体験することで感じた点について討論を行ったりした。

これらの結果自由記述欄には「自分たちで主体的に動ける授業だったので楽しかった」、「留学生とコミュニケーションをとる機会を多くつくってくれて、多くの知識が身についた」などの意見が寄せられ、学生の主体的な行動を通じた授業への参画意識の高さがうかがわれる。

5. まとめ

授業アンケート結果の分析などから、学生に主体的な行動を促すことが授業への参画意識を高め、ひいては教員と学生間のコミュニケーションを深めることに通じることがわかった。そのための具体策として学生間の討論やゲーム的な要素の例が挙げられたが、授業の内容によっては取入れにくい場合もあると思われる。それぞれの授業内容に合わせた工夫により改善していければと考える。

外国語専門部会 FD 報告

外国語専門部会長 神田 大吾

1. 運営状況・運営体制など

22年度の外国語の授業科目名、科目当たり本数及び合計本数は以下の通り。

○ドイツ語	49本
○フランス語	27本
○中国語	60本
○朝鮮語	16本
○スペイン語	18本
○日本語	16本
計	186本

本数自体に21年度と変更はないが、学生の履修状況（2単位取得のみでよしとする学生が多いため、一年次前学期に履修者が集中する）を改善するため、例えばST対象「フランス語」は、21年度は前学期2本・後学期2本開講だったが、22年度からは前学期3本・後学期1本に変更する等、開講本数の調整を行ったため、全体として、外国語教育としてのクラスサイズを適正水準に保ちつつ、より多くの学生の希望に応える開講体制が実現できた。

（22年度入学者の「外国語」履修希望者総数1507名中、第2希望の科目に回ってもらった学生は26名（1.7%）だった。前年の21年度は1583名中65名で4.1%だった。）

2. 授業アンケートのまとめ

授業アンケートは前学期77本、後学期63本を対象に行われた（月曜と木曜に同一教員が教える連動クラスは「1本」としてアンケートが行われるので、上記開講本数とは一致しない）。その結果を見るに、「この授業のクラス満足度」がおおむね0.70から0.90の範囲に収まっている。0.69以下の数値が出た授業が前学期に5本、後学期に2本あったが、同じ教員が担当した別のクラスのアンケート結果を調べると、低いものでも0.77、高いものでは0.91という数値が出ているので、あくまでもその授業だけの特殊事情と思われる。教科書の選定等、当該授業担当教員が個人で改善努力をすればよく、外国語部会として組織的に対応する必要はないと思われるので、全体としては「特に問題はない」と言えるだろう。

3. FD実施状況

FDについては、前年度は六月に行ったが、今年は23年度前学期の状況も踏まえ、また習熟度別履修制度（後述）についての協議も併せて、年度後半に

実施する予定。

4. 今後の課題（新しい試みなど）

外国語科目について、習熟度別履修制度を徹底するかどうか懸案事項である。現在、初歩から始める「Ⅰ」が前学期に開講され、その次の段階の「Ⅱ」が後学期に開講されているので、大半の学生は学期ごとに段階を踏んで学習を進めているが、前学期で「Ⅰ」を落とした学生は、半年間の空白を経て翌年の前学期に履修しなおさねばならない。中教審答申等で推奨されている、いわゆる“やり直しの機会”を学生に与える観点からすれば、後学期に再履修者用の「Ⅰ」、前学期に同「Ⅱ」を開講することが望ましい。しかしながら、「ドイツ語」「フランス語」「中国語」「朝鮮語」「スペイン語」と五種類の科目についてこの制度を導入すると、新たに20本の授業を開講しなければならない。専任教員が既に各人4本の教養科目を担当している現状において、更なる授業負担が可能か否か。また、本学の財政が苦境にある中、新たに600時間の非常勤時間をどのように捻出するか。いずれの道を取るにしても、この制度を導入するには大きな困難が予想される。

総合英語教育専門部会FD報告

総合英語教育専門部会長 福田 浩子

1. 総合英語の概要および運営体制

総合英語は、教養英語改革を経て、茨城大学の教養英語科目として平成 17 年度に全学導入されたプログラムである。

「英語を学ぶことによって、**地域社会に生きると同時に、地球規模の視野を持ち、考え、行動できる人間を育成すること**」を理念として掲げ、習熟度別クラス編成により、レベル1からレベル5までに分けて行う4技能型のクラスと、レベル3修了以上を対象とした特定の技能、特定の内容に焦点を当てた学術用英語の2種類のクラスによって構成されている。本学では総合英語4単位取得およびレベル3修了を卒業要件とし、教養英語の量的、質的保証を行っている。

総合英語の4技能型レベル別授業では、総合英語のレファレンス・レベルに基づきそれぞれのレベルの Can-do Statements (能力記述文)を開発し、平成18年度より使用している。このことにより、学生、教員ともにそのクラスの具体的な到達目標を「～ができる」の形で共有し、最初と最後に Can-do checklist を使用して、授業を受ける前にまず何ができ何ができないのかを認識し、また、学習した結果、何ができるようになったのか、何がまだできないのかを意識させて、成績のレターグレードだけでなく、自分の英語の能力を技能別に明確に認識すると同時に、次の目標設定に役立てられるようにしている。

成績評価も、いわゆるテストだけではなく、スピーチやライティングなどの活動や自律的学習の評価などを含めた多面的な評価システムを採用し、同一レベル内で統一するなど、「教員間の共通理解の下、到達目標や成績評価基準を明確化する」「多面的評価」「外国語コミュニケーション能力の評価の厳格化」(4. 成績評価)(文部科学省2009)という中央教育審議会答申「学士課

程教育の構築に向けて」で求められているものをまさに先取りしてきたと言えよう。

また、「主体的に学ぶ姿勢・態度を持たせること」「双方向型授業や能動的活動に参加する機会を設ける」こと(3. 教育方法の改善)、「授業計画の明確化」(2. 単位制度の実質化)(文部科学省2009)といった点でも、まさに「学士課程教育の構築に向けて」に合致する内容となっている。

運営体制としては、総合英語教育専門部会が実行部隊である総合英語教育部との連携のもと、企画・実施・運営・点検評価を行い、レベル別授業にはそれぞれレベルコーディネータを置いて、授業内容や評価方法等、そのレベルの質の管理を行っている。

平成22年度の受講学生数は前学期2,491名(工学部Bコース英語I、英語II、英語IIIを含む)で79クラス(うち工学部Bコースが3クラス)、後学期1,927名(工学部Bコース英語I、英語II、英語IIIを含む)で、65クラス(うち工学部Bコースが3クラス)であり(大学教育センター2011:10)、総合英語は同一授業科目で週2回対面授業を行うため、本数としては前学期155本、後学期127本の授業を実施したことになる。その内訳は、レベル別では、前学期レベル1が4クラス、レベル2が14クラス、レベル3が42クラス、レベル4が2クラス、レベル5が1クラス、後学期レベル2が3クラス、レベル3が16クラス、レベル4が18クラス、レベル5が1クラス、学術用英語は前学期13クラス、後学期24クラスである。

これだけの規模のクラスを運営し、共通シラバス、共通教材、共通の評価基準を使用したレベル別授業の質を一定に保つためには、各レベルのレベルコーディネータが重要な役割を果たしており、レベルごとで行うFDに加えて、専門部会で行うFDが

極めて重要な欠かせないものとなっている。

2. 授業アンケートのまとめ

ここで授業アンケートについて簡単に触れておきたい。

「平成 22 年度・前学期教養科目アンケート集計報告」によると、総合英語の学生アンケートの実施状況は対象数 78、実施数 77 で実施率 98.7%。クラス満足度の平均は 0.856 で健康・スポーツの 0.870 の次に高い結果となっている。

個々のクラスを見ていくと、レベル別の授業ではクラス満足度が 0.99、0.98、0.97 という驚異的な数字のクラスもあり、学術用英語でも 0.96 のクラスがあつて（大学教育センター 2010, 2011a）、この授業は推奨授業表彰を受けている。

授業の基本に係る質問である①シラバスおよび評価方法の説明、②シラバスに沿った授業、③毎回の出欠確認の3つについては、それぞれ 0.950、0.918、0.981（教員アンケートでは、1.000、0.978、1.000）となり（大学教育センター教育点検支援部 2010）、シラバス、評価方法、出席など、授業の基本に関して透明性の高い授業となっていることがわかる。これは「2. 単位制度の実質化」のうち「授業計画の明確化」を裏付ける結果となっている。シラバスに沿った授業の数値がやや低いのは、レベル内でも習熟度別クラス編成を行っていることから、共通シラバスを使いながらも目の前の学生に合わせた授業内での対応が求められるため、当然であると言えよう（シラバス通りに実施するのが必ずしも良い授業とは言えない）。

また、それぞれの質問項目については以下の結果となっている。

- Q 1 : 全体満足 0.838
- Q 2 : 収穫実感 0.784
- Q 3 : 教員熱意 0.883
- Q 4 : コミュニケーション 0.907
- Q 5 : 質問対応 0.850
- Q 6 : 自力解決 0.749

Q 7 : 学習十分 0.672

Q 8 : 声や板書 0.876

Q 9 : 教室整備 0.796

（大学教育センター教育点検支援部 2010: 5）

いずれも高い数値だが、この中で特筆すべきは、「Q 4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか?」「Q 5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか?」「Q 6 あなたは、わからない部分を何らかの方法（教員に質問する・自分で調べるなど）で解決するようにつとめましたか?」「Q 7 この授業のための学習（予習・復習など）に十分な時間をかけましたか?」（主題別ゼミナールの次に高い数値となっている）の4項目である。最初の2項目からは、「双方向型授業」、残りの2項目からは「主体的に学ぶ姿勢・態度」（いずれも「3. 教育法の改善」の一端が浮かび上がっている）。

3. FD実施報告

全学導入から6年が過ぎ、運営システムそのものについては安定してきており、また平成 22 年度教育改善経費プロジェクトを申請し、採択されたこともあつて、本年度は「学士課程教育の構築に向けて」の「3. 教育方法の改善」にかかわる2回のFDを専門部会主催で実施した。

3. 1 第1回FD

第1回の総合英語教育専門部会主催のFDは、教育改善経費プロジェクトの一環として実施した「総合英語担当教員のためのRENANDI活用法」である。このFDの概略は以下のとおりである（敬称略）。

1. 日時
平成 22 年 10 月 27 日（水）
12 : 15 ~ 13 : 30
2. 場所

共通教育棟 2号館 1階 14番教室

3. スケジュール

開会の挨拶 齊田智里

12:15~12:35

RENANDI の使い方【基礎編】

宇野美由紀

12:35~13:20

総合英語のための RENANDI の活用【応用編】

- 1) ワークプレイスを使った活動
上田敦子 (レベル1担当)
- 2) 文法のクイズ
有田由紀子 (レベル2担当)
- 3) 教員同士および学生とのネットワーク
西尾由里 (レベル3担当)

13:20~13:30 操作体験と質疑応答

4. 配布資料

「総合英語担当教員のための RENANDI 活用法」冊子(pp.26)

5. 参加者 15名 (うち非常勤講師 6名)

6. 企画・運営・司会・配布資料編集

FD担当 福田浩子

本FDは、後学期の総合英語の授業を実施するにあたって、レナンディ統合 e-ラーニングシステムを活用し、よりよい授業実践を行っていただくことを狙いとしたもので、初めて RENANDI を使う人を対象にした基礎編と、総合英語の中で具体的にどのように活用できるか、また、実際にどのように活用しているかを紹介する応用編とに分け、更に最後に実際に触ってみる体験と個人的な質疑に答える時間を設けるという3部構成で実施した。応用編では、総合英語のレベルコーディネータの先生方が、それぞれのレベル内でどのように活用しているかを、他の授業でも応用できるような切り口で紹介し、質疑応答も活発に行われた。限られた時間ではあったが、大変有意義で、これまで使っていた RENANDI の機能に加えて、自分の授業でもさらに積極的に使ってみたいと感じさせる内容であった。

このFDの結果を踏まえて、教育改善

経費プロジェクトとして『よりよい授業実践のための「レナンディ統合 e-ラーニングシステム」活用の手引』(pp.44、企画編集担当 福田浩子)をまとめ、平成23年度開始時に総合英語担当教員に配布した。この手引は、今後も新たに総合英語を担当してくださる先生方に配布し、活用していただく予定である。

3. 2 第2回FD

第2回の総合英語教育専門部会主催のFDは、授業力の向上を目指したもので、概略は以下のとおりである(敬称略)。

1. 日時

平成23年1月19日(水曜日)

12:30~14:00

2. 場所

共通教育棟1号館西棟2階 第5講義室

3. スケジュール

12:30~12:50

「学術用英語の授業における工夫」

竝木 崇康(平成20年度「学術用英語」表彰)

12:50~13:10

「レベル4授業における工夫」

カニンガム ジョイス(平成21年度「総合英語レベル4授業」表彰)

13:10~13:30

「レベル3授業における工夫」

小林 邦彦(平成18年度「総合英語レベル3授業」表彰)

4. 参加者 20名(うち非常勤講師5名)

5. 企画・運営・司会

FD担当 岡山陽子

アンケート結果のまとめでも述べたように、総合英語のクラスの中には、クラス満足度が極めて高いものがある。そういったクラスの担当教員の授業運営上の工夫を知り、学んでいくことは、全体のクラス満足度を上げていくためにも貢献できる。

このFDでは、大学教育センター推奨授業表彰制度により表彰された3名の先生方に、

それぞれの授業で行っている工夫を紹介していただいた。

まず、学術用英語では、言語学の専門家の立場から組み立てられた授業の中で、アメリカでの生活経験から得た学生の興味を引くような内容を取り入れたり、時には車のナンバープレートなどの現物を見せるなど、教室内での学習を現実と結びつけたものにする工夫が紹介された。

次に、レベル4では、授業内での教員の立ち位置など、授業の雰囲気をよくし学生の発話を助ける細やかな工夫が紹介された。

最後に、レベル3では、授業をすべて英語で行う場合、どのように学生にわかりやすく提示するかという実践方法が紹介された。学生の興味を引くために、教科書に関連するニュースなどがあつたら即座にパワーポイントに音声、写真などを取り込み、活用するなど、PCを駆使した授業を実践している様子が伺われた。

総合英語では、授業講時が重なっていることから、お互いの授業を参観することができない。そのため、それぞれの先生方の授業の素晴らしさとご努力の一端を知るともよい機会となった。

3. 3 その他のFD

以上述べてきた専門部会主催の2回のFD以外に、総合英語では4技能型の担当者間で、レベルコーディネータが中心となって各レベルのFDを学期の最初と最後に行っている。このFDは授業に密着した内容であり、レベルコーディネータが使用教科書や評価方法についての説明を行うだけでなく、常勤、非常勤を問わず、担当教員相互の意見交換の場ともなっている。

4. 今後の課題

平成17年度から全学導入された総合英語だが、専門部会および総合英語教育部はそれぞれの授業担当者の協力を得て、これまで、より安定した運営体制を築き、授業の質を向上させることを目標に尽力

してきた。これはまさに「学士課程教育の構築に向けて」で求められている方向性と合致していたといえよう。

しかし、今後は、非常勤時間の削減などの要素が加わり、運営条件が厳しくなることが予想される。そのような状況下にあつて、現在の質を保ちつつ、安定したプログラムの運営ができるようにするためには、今後どのような工夫が必要か、専門部会として検討していく必要があると思われる。

【引用文献】

- 茨城大学大学教育センター総合英語教育専門部会 (2011) 『よりよい授業実践のための「レナディ統合 e-ラーニングシステム」活用の手引』
- 大学教育センター教育点検支援部 (2010) 「平成22年度・前学期教養科目アンケート集計報告」
http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/anketo_report/H22z.pdf
- 大学教育センター (2010) 「平成22年度・前学期・授業アンケート結果」
<http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/gakunai/anketo/H22z-all/H22z-all.html>
- 大学教育センター (2011a) 「平成22年度・後学期・授業アンケート結果」
<http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/gakunai/anketo/H22k-all/H22k-all.html>
- 大学教育センター (2011b) 「教養教育実施結果報告書」
http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/gakunai/Kyovo-report_H22v2.pdf
- 文部科学省 (2009) 『学士課程教育の構築に向けて』中央教育審議会答申の概要
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1247211.htm

情報基礎教育専門部会のFD報告

大学教育センター情報基礎教育専門部会

羽瀨裕真、野口宏、梅原守道、宇野美由紀、大瀧保広

あらまし

本報告では、学生アンケートと教員アンケートを解析し、満足度の要因を探っている。当然のことではあるが「学生・教員・TA間のコミュニケーションを取ること」が重要であることが指摘されている。

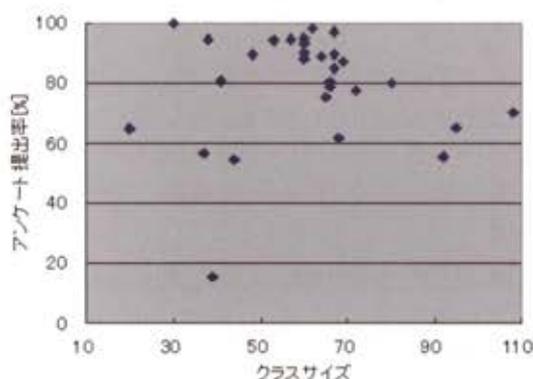
1. はじめに

2010年度は情報関連科目を前期22科目、後期9科目の計31科目を開講した。

2010年度の教養科目の授業アンケートの項目は2009年度と同様の内容で5段階にして実施されている。それらは、『学生の調査アンケート』と『教員の自己点検評価アンケート』からなる。情報関連科目に関するアンケートの実施結果は

学生のアンケート実施率	: 100%
教員自己点検アンケート実施率	: 97%
学生のアンケート提出率	: 80%
学生のクラス満足度の平均	: 0.784
教員の満足度の平均	: 0.845
教員期待クラス満足度の平均	: 0.875

であった。全てのクラスでアンケートを実施した。クラスに対する学生アンケートの提出率を図1に示す。1つのクラスを除いて50%以上の学生がアンケートを提出した。



今回は2010年度および2011年度の専門

部会のメンバーのみでFDを行い、以下の点を取り上げる。

- (1) アンケート調査の結果からクラス満足度が低い原因
- (2) TA報告書による問題提起
- (3) これまでのアンケート調査結果との比較

2. アンケート調査結果

学生の調査アンケートのQ1～Q9の項目について、回答1は1.0(肯定)、回答2は0.75、回答3は0.50、回答4は0.25、回答5は0.0(否定)として点数化した。さらに、教員の自己点検評価アンケートの各項目(q1～q7、Q1～Q4)についても、学生の調査アンケートと同様に点数化した。

学生の調査アンケートのQ1～Q5、Q8の項目別満足度の平均値を“クラス満足度”とし、教員の自己点検評価アンケートのq1～q4およびq6～q7の項目別満足度の平均値を“期待クラス満足度”とする。また、教員アンケートのQ2～Q4の項目値の平均値は“教員満足度”とする。

2.1 学生アンケート結果

図2に、学生へのアンケートの項目別の平均満足度を示す。ただし、学生の調査アンケート項目Q1～Q9を取り上げる。

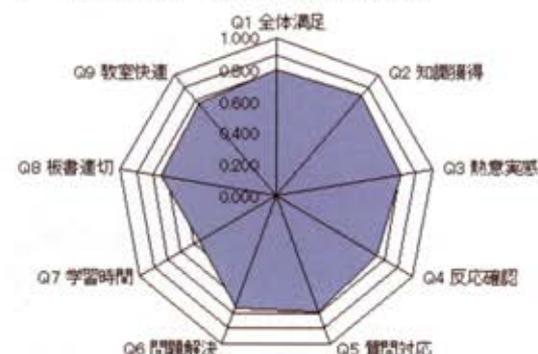


図2 学生アンケートの項目別平均満足度

図2からQ7の学習時間(予習・復習に十分な時間をかけましたか)に関する項目評点が0.6以下と低いことがわかる。2009年度までの学生アンケートでも同様の結果が示されている。授業時間外に課題制作や宿題などがあるため学習時間は必ずあると考えられるが、少ない傾向である。これは2つの理由が考えられる。1つは、「予習や復習に十分な時間をかけましたか」との設問であったため、3程度にマークした学生が多かったと考えられる。2つ目は、授業時間の多くを演習時間に割いており、授業時間外も作業に追われているため学生が予習・復習の時間とみなしていないと考えられる。

今後、授業時間外の学習時間の有効活用により理解力や基礎力の底上げを図ることができると考えられる。そのため、その学習時間をどのように使うのが良いのかを検討する必要がある。

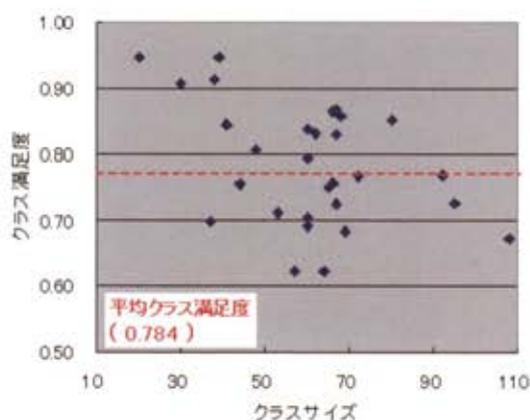


図3 クラスサイズ対クラス満足度

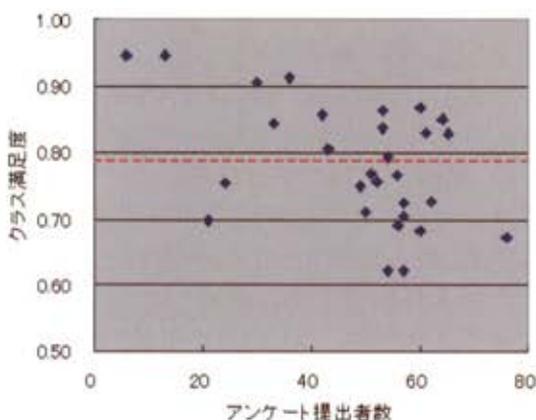


図4 アンケート提出者対クラス満足度

図3にクラスサイズに対するクラス満足度の関係を示す。クラスサイズが小さいほど、クラス満足度が高い傾向にはあるが、クラスサイズが60名以上であってもクラス満足度が0.8以上のクラスが存在している。これは授業の方法が良いとこともあるがTAがうまく活用されていることも要因の1つである。

図4にアンケート提出者に対するクラス満足度を示す。アンケート提出者数とクラス満足度とは関係が無いようである。

2.2 教員アンケート

教員アンケートの教員の満足度の平均は0.845であり、期待満足度の平均は0.875であった。これは学生クラス満足度の平均0.784に比べて高い値となっている。学生のクラス満足度と教員の満足度の関係、期待満足度との関係を考える。

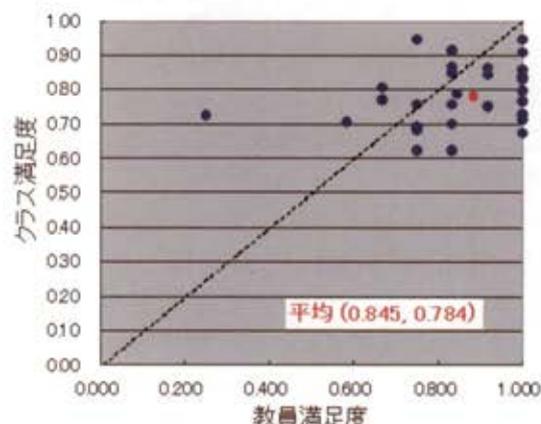


図5 教員満足度に対するクラス満足度

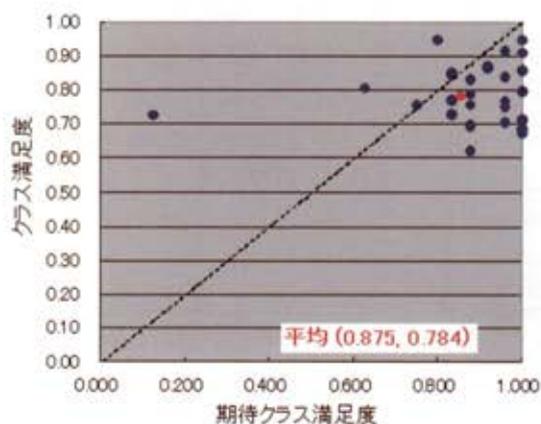


図6 期待クラス満足度対クラス満足度

図5に教員満足度に対するクラス満足度の

関係を、図6に期待クラス満足度に対するクラス満足度の関係を示す。

図5と図6からいずれも教員の満足度や期待度が学生の満足度を上回っている。特に、教員の平均期待クラス満足度は学生の平均クラス満足度よりも0.091以上高いことから、教員は熱意をもって授業に望んでいるが学生に十分に伝わっていないのかもしれない。

2.3 TA報告書からのコメント

全てのTAから「新しい知識の獲得」、「教えることによる理解度向上」、「教えることの難しさの再認識」のいずれかが上げられていた。そのため、TAにとって貴重な教育経験であったと思われる。また、情報関連科目にとって、TAは必要であり、クラスサイズに応じた適切な人数の割り振りが必要である。大学院授業との重なりなどから各クラスに十分なTAを配置することは難しく、今後検討する必要がある。また、SAを導入し、TAとSAとが協力し授業補助体制の強化を図る必要があろう。

担当教員とのコミュニケーション不足を指摘するTAが複数いた。例えば、「配付資料を事前にTAに渡すことで準備ができる」、「どこまで教えてよいのかの線引きが不明」、「学生の質問に対応している間に授業が進んでいることがあり、適切な対応が難しい」などのコメントが寄せられた。ほとんどの担当教員は自学科の大学院生をTAとして採用していないため、TAとの情報共有を積極的に行う必要がある。特に、担当教員は、授業の進め方や受講学生への対処の仕方などについて、TAに明確に指示する必要がある。

2.4 これまでのアンケート結果との比較

2008年度、2009年度、2010年度のアンケートの対応項目毎の比較を表1に示す。2008年度と2009年度以降ではクラス満足度の定義も異なっているので一概には言えないが、2010年度はこれまでよりも良好であると言える。

教員アンケートについても2009年度よりも期待クラス満足度と教員満足度ともに向上している。特に、教員満足度は2009年度よりも0.058も向上している。これは授業計画が洗練されてきたためと思われる。

表1 2010年度とこれまでの比較

項目	2008年	2009年	2010年
Q1【全体満足】	0.782	0.795	0.803
Q2【知識獲得】	0.851	0.838	0.839
Q3【熱意実感】	0.741	0.788	0.799
Q4【反応確認】	0.737	0.729	0.741
Q5【質問対応】	---	0.763	0.778
Q8【板書適切】	---	0.753	0.753
クラス満足度	0.776	0.778	0.784
期待クラス満足度	---	0.853	0.875
教員満足度	---	0.787	0.845

3. まとめ

本年度もこれまでのアンケート結果と同様に以下の点の検討が必要である。

- Q7の学習時間(予習・復習に十分な時間をかけましたか)に関する項目評点が0.6以下と低いこと
- 教員とTAとのコミュニケーションが不足していること

があげられる。

1つ目については、授業時間内だけの学習計画ではなく、授業時間外の自宅等学習も含めた学習計画が必要であると考えられる。例えば、RENANDIなどを活用して自宅学習を促すことも考えられる。

2つ目については、教員とTA間の問題である。少なくとも授業配付資料の事前手渡しを行い、準備をしておく必要はあろう。

来年度から全ての情報関連科目が1年次に開講されることになった。そのため、単なる専門導入科目ではなく、教養として全学的な共通項目を設定し、より内容を充実させたいと考えている。情報基礎教育専門部会では、その共通項目の検討を始めている。

健康・スポーツ専門部会報告

—授業アンケートからみた授業満足度を高めるための要因分析—

健康・スポーツ専門部会 上地 勝

1. 運営状況

平成 22 年度は健康・スポーツ科目では 96 本（前期 50 本，後期 46 本）の授業をおこなった。平均クラスサイズは前期が 37.1 人，後期が 32.6 人であり，適切に運営されているものと思われる。これは年度最初のガイダンスで厳密にクラス分けを実施するためであろう。最も多かったクラスは後期末 4 工学部の 46 人であり，最も少なかったクラスは 2 年次全学集中の 12.4 人であった。

2. 授業アンケート

前年度に引き続き，全ての授業で学生アンケートを実施することができた。担当教員の中で，学生アンケート実施の必要性が浸透した結果であると思われる。

学生のクラス満足度を見ると，前期が 0.870，後期が 0.882 と教養科目全分野中最も高い値を示した。しかし，前年度と比較すると，前期(H21 年度 0.886)，後期(同 0.892)ともに若干低下しており，その原因を探るとともに，学生の授業満足度を高める工夫の必要性があるものと思われた。

健康・スポーツ科目のクラス満足度と関連する要因を探るため，まず項目間の相関係数(Spearman 順位相関係数)を算出した。表 1 は各項目間の相関係数である。クラス満足度と相関の高い項目を見てみると，Q1～Q5，Q8 は本指標を算出するために使用されている項目であるため，全て 0.8 以上の高い相関を示した。それ以外では，健康・スポーツ科目として独自に質問している「施設用具への満足度(SQ1)」が 0.68，「レポート課題は授業内容の習得の助けとなった(SQ3)」が 0.58 と比較的高い値を示し，施設用具の充実やレポート課題の内容設定がクラス満足度を高める一つの要因となることが推察された。

その他の項目間の関連について見てみると，「教科書が役に立った(SQ2)」と「レポ

ート課題」が 0.76 と高い相関を示した。これより，前述の結果と合わせると，当然のことではあるが，レポート課題の設定は授業，特に教科書で取り扱った内容で，かつ，学生の授業内容習得の助けとなるものである必要がある。

一方で，「分からないことを自力で解決するようにした(Q6)」，「授業の予習・復習等に時間をかけた(Q7)」については，ほとんどの項目と相関が低かった。健康・スポーツ科目の特性から考えると，これらは授業内容を反映させるのにあまり適切ではない可能性がある。健康・スポーツ科目の目標である，生涯スポーツの実現，あるいは健康的な生活習慣の確立といった点から考えれば，「授業で習得したことを普段の生活で実践できたか，あるいは，取り入れることができたか」などの質問のほうが，より適切に授業を評価できるものと思われる。

学生による授業評価の観点についてアンケート項目から探索的に検討するために，変数クラスタリング(Ward 法)をおこなった。図 2 は項目のクラスタリングの結果，作成されたデンドログラム(樹状図)である。項目の凝集過程を見ていくと，まず「教員の熱意(Q3)」と「コミュニケーション(Q4)」，「全体的満足度(Q1)」と「知識技能習得(Q2)」が小クラスターを形成し，それぞれに「声・話し方・板書(Q8)」，「質問への対応(Q5)」が凝集していた。これらは全て担当教員に対する評価項目であり，これより，授業満足度と最も関連するのは担当教員自身の授業への取り組み方や学生への対応のしかたであることが推察された。更に，このクラスターに施設・設備など環境面での充実に関する項目が凝集しており，これらも授業満足度を形成する重要な要因であることが確認された。

以上，「学生満足度を高める要因」という観点から話を進めてきたが，健康・スポーツ科目は実践につながってこそ意味のある学

問領域なので、単に授業終了時の満足度を高めるだけではなく、授業終了後も継続できるよう意識して働きかけていく必要がある。

3. 今後の課題

H24 年度は非常勤枠の削減が予定されており、これまでと同様の運営は難しくなるこ

とが予想される。その対応策として、クラスサイズを増やすとともに、体力測定、全体講義などの時間を増やすことを予定しているが、いずれにせよ、各授業の質の高さを保持することは当然のこととして、加えて、健康・スポーツ科目全体で新たな枠組みを構築し、その可能性を追及していきたい。

表1 学生アンケート項目間の相関 (Spearman の順位相関係数)

質問項目	クラス満足度	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	SQ1	SQ2
クラス満足度	—											
全体的満足度(Q1)	0.90	—										
知識技能の習得(Q2)	0.90	0.87	—									
教員の熱意(Q3)	0.92	0.83	0.80	—								
コミュニケーション(Q4)	0.92	0.79	0.75	0.88	—							
質問・相談対応(Q5)	0.85	0.71	0.73	0.71	0.77	—						
自力解決(Q6)	0.49	0.44	0.47	0.44	0.36	0.59	—					
授業の予習復習(Q7)	0.39	0.35	0.43	0.30	0.25	0.43	0.62	—				
板書・話し方・声(Q8)	0.85	0.68	0.68	0.79	0.82	0.67	0.39	0.31	—			
設備面への不満(Q9)	0.58	0.51	0.52	0.55	0.54	0.48	0.43	0.26	0.57	—		
施設用具の満足(SQ1)	0.68	0.65	0.59	0.64	0.61	0.61	0.42	0.32	0.65	0.70	—	
教科書適切使用(SQ2)	0.48	0.39	0.43	0.44	0.45	0.50	0.54	0.53	0.50	0.48	0.52	—
レポート内容(SQ3)	0.57	0.42	0.53	0.52	0.52	0.57	0.54	0.55	0.56	0.54	0.54	0.76

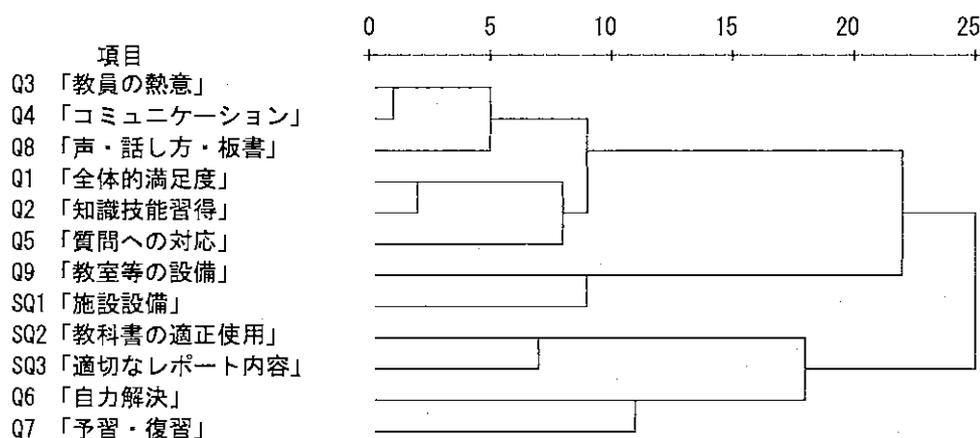


図1 学生アンケート項目の変数クラスタリングによるデンドログラム

授業アンケートの結果について

平成22年度・前学期

教養科目授業アンケート集計報告

大学教育センター教育点検支援部

大学教育センターでは、平成22年度前学期開講の教養科目を対象に授業アンケートを実施した。授業アンケートは、次の2種類から成る。

- ・学生アンケート・・・授業運営に係る基本事項の点検や学生の満足度調査、その他学生からのフィードバックが期待される項目についての調査・公開
- ・教員自己点検・・・学生アンケート集計結果を基にした、授業担当教員の手による自己点検評価

本授業アンケートは平成21年度後学期と同じ形式・内容である。これらに関する各科目個別の結果は、次のページにおいて参照していただきたい。ただし学内からのみ参照可能である。

学生アンケートと教員自己点検の科目ごとの結果：

<http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/gakunai/anketo/H22z-all/H22z-all.html>

学生アンケート回答のうち自由記述部分については、匿名で当該教員に提示するにとどめ、上記ページには掲載していない。教員自己点検における自由記述部分は、本来の目的に鑑み、活字変換のうえ原則としてそのまま掲載した。ただし、アンケートそのものへの意見など、本アンケートの主旨から外れると判断された記述については、改善への検討事項として別途取り纏め、上記のページからは削除している。以下ではこれらの集計・分析結果を、次の三部構成で報告する。

- 第Ⅰ部 学生アンケート結果の概要
- 第Ⅱ部 教員自己点検結果の概要
- 第Ⅲ部 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係

〔用語説明〕 科目区分と分野区分について

教養科目に属する授業は、総合英語科目；外国語科目（英語以外）；健康・スポーツ科目；情報関連科目；人文／教養科目（分野別教養科目の人文の分野）；人文／基礎科目（分野別基礎科目の人文の分野、以下同様）；社会／教養科目；社会／基礎科目；自然／教養科目；自然／基礎科目；総合科目；主題別ゼミナールの計12種類に大別される。本報告書ではこのような分け方を「科目区分」と呼ぶ。また、集計処理の都合上、分野別教養科目と分野別基礎科目を（分野ごとに）ひとまとめにして扱うことがある。すなわち、「人文／教養科目」に属する科目と「人文／基礎科目」に属する科目をまとめて（「人文系」などと称し）扱う場合がある。合計9つに分かれるこのような分け方を本報告書では『分野区分』と呼ぶことにする。

第 I 部 学生アンケート結果の概要

(1) 実施状況

平成 22 年度前学期開講の教養科目 454 科目のうち学生アンケート採取対象科目は 452 科目であり、このうち 442 科目で学生アンケートが実施された。全体の実施率は 97.8%であった。各々の分野区分における実施率は次の表の通りである。

表 1-1 分野区分ごとの実施状況

	対象数	実施数	実施率
総合英語	78	77	98.7%
外国語(英語以外)	77	77	100.0%
健康・スポーツ	51	51	100.0%
情報関連	22	22	100.0%
人文系	47	47	100.0%
社会系	47	43	91.5%
自然系	52	50	96.2%
総合科目	35	35	100.0%
主題別ゼミ	43	40	93.0%
合計	452	442	97.8%

(2) 実施方法およびアンケート内容

アンケート採取は、各授業の最終回（またはそれに準じる時期）に、教員がアンケート用紙を配布し学生の手によって回収される方式で行われた。アンケート内容は択一形式の質問と自由記述である。択一形式の質問は、すべての科目に共通に設定された 12 項目（「授業の基本に係る質問」3 項目および「教養科目に共通の質問」9 項目）と、各々の分野区分に固有の数項目（項目数は分野区分により異なる）からなる。共通 12 項目の質問内容を以下に記す。なお、本報告書の末尾 [参考資料 3] には、各々の分野区分における固有質問を掲載しているので併せて参照されたい。

<授業の基本に係る質問>

- ①この授業の初回に、授業計画（シラバス）や評価方法の説明がありましたか？
- ②授業展開は、おおむね授業計画（シラバス）に沿ったものでしたか？
- ③この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか？

<教養科目に共通の質問>

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか？
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？
- Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法（教員に質問する・自分で調べるなど）で解決するようにつとめましたか？
- Q7 この授業のための学習（予習・復習など）に十分な時間をかけましたか？

Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？

Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか？

(注1) 授業の基本に係る質問では、回答は {1:はい, 2:いいえ, 3:わからない} から選択。

(注2) 教養科目に共通の質問では、回答が「はい」の場合は1、「いいえ」の場合は5を選択。どちらか決められない場合は、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選択。

(3) 学生アンケートにおける分析指標

本アンケートの分析においては、次の2種類の指標を定義した。

【受講者満足度】受講者（回答者）それぞれに対して、質問 Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q8 の各回答に次の5段階の数値を対応させ、計6問にわたって平均した値（回答者ひとりひとりに対して算定される値）。

[回答 1→1.00 回答 2→0.75 回答 3→0.50 回答 4→0.25 回答 5→0.00]

これは当該受講者の、授業への（事後）満足感の高さを表すひとつの指標と考えられる。この値が1に近いほど、当該受講者にとってはこの授業に（ここで定義された意味で）好感触を持ったと考えられる。

【クラス満足度】それぞれの科目内で、受講者満足度を全回答者にわたり平均した値である（ひとつひとつの科目に対して算定される値）。

なお、各科目個別の集計資料（学内限定で公開中）には、受講者満足度・クラス満足度の他に参考指標として以下を算定している。

- ・項目別得点 . . . 教養科目に共通の質問（全9問）への各回答に、受講者満足度算出の際と同じ方法で5段階の数値を対応させ、質問項目ごとに科目内全回答者にわたって平均した値。
- ・区分内平均得点 . . . それぞれの質問の項目別得点を同一科目区分内の全科目にわたって平均した値。これの算出に当たっては分野区分によるくくりではないことに注意されたい（つまり、分野別教養科目と分野別基礎科目を区別している）。
- ・偏差値 . . . それぞれの項目別得点が示す通常の意味での偏差値。母集団は当該科目が属する科目区分内の全科目である。

(4) クラス満足度に関する統計

学生アンケートが実施された全科目について算定したクラス満足度の度数分布を図1-1に示す。クラス満足度の平均値は0.801、最大値は1、最小値は0.268であった。

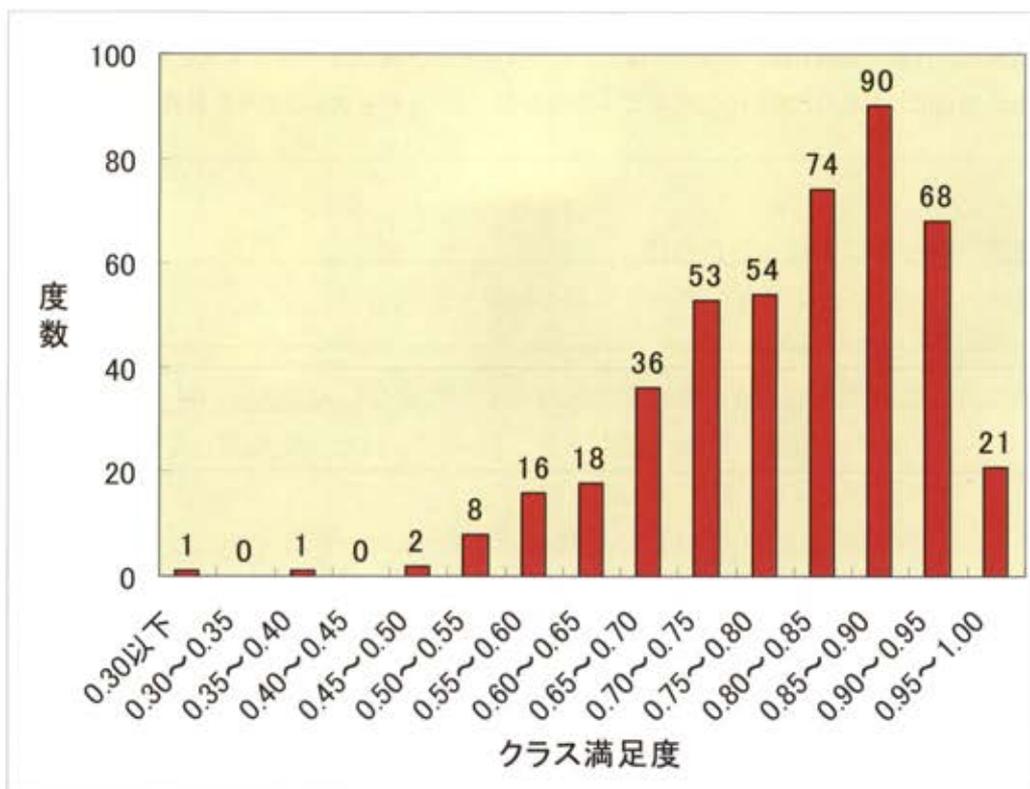


図1-1 クラス満足度の度数分布

また、各科目のクラス満足度を分野区分ごとに平均した結果を図1-2に示す。

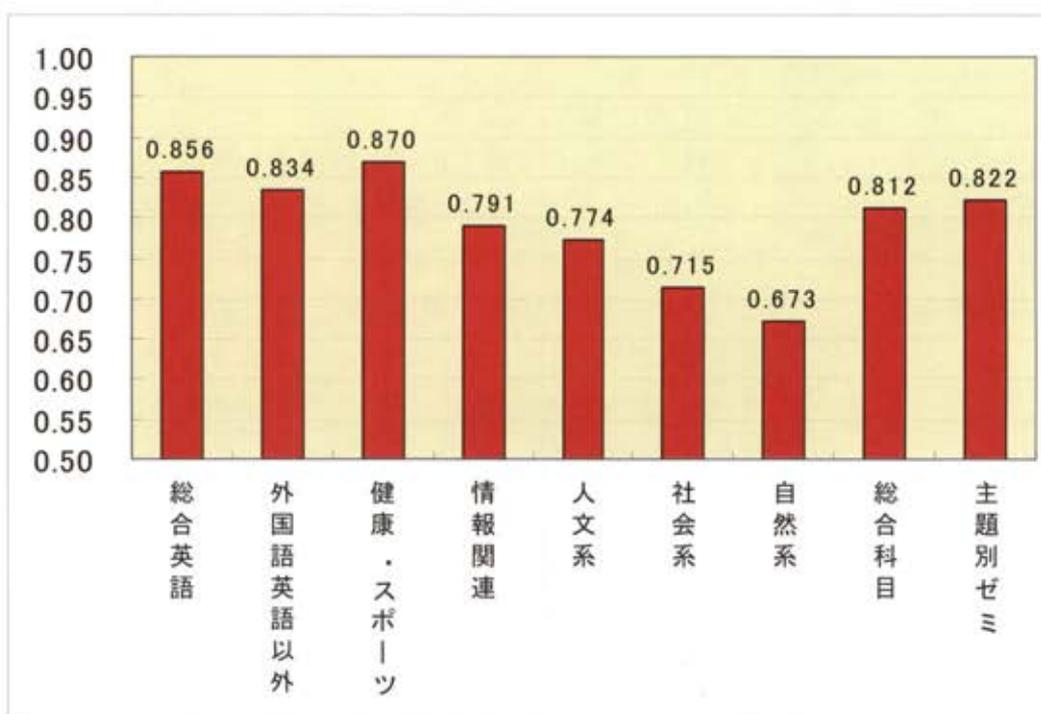


図1-2 分野区分ごとのクラス満足度の平均

(5) 質問項目ごとの統計

教養科目に共通の質問9項目に対して、項目別得点をアンケートが実施された科目全てにわたって平均した値を図1-3に示す。略記された質問の全文については(2)節を参照されたい。

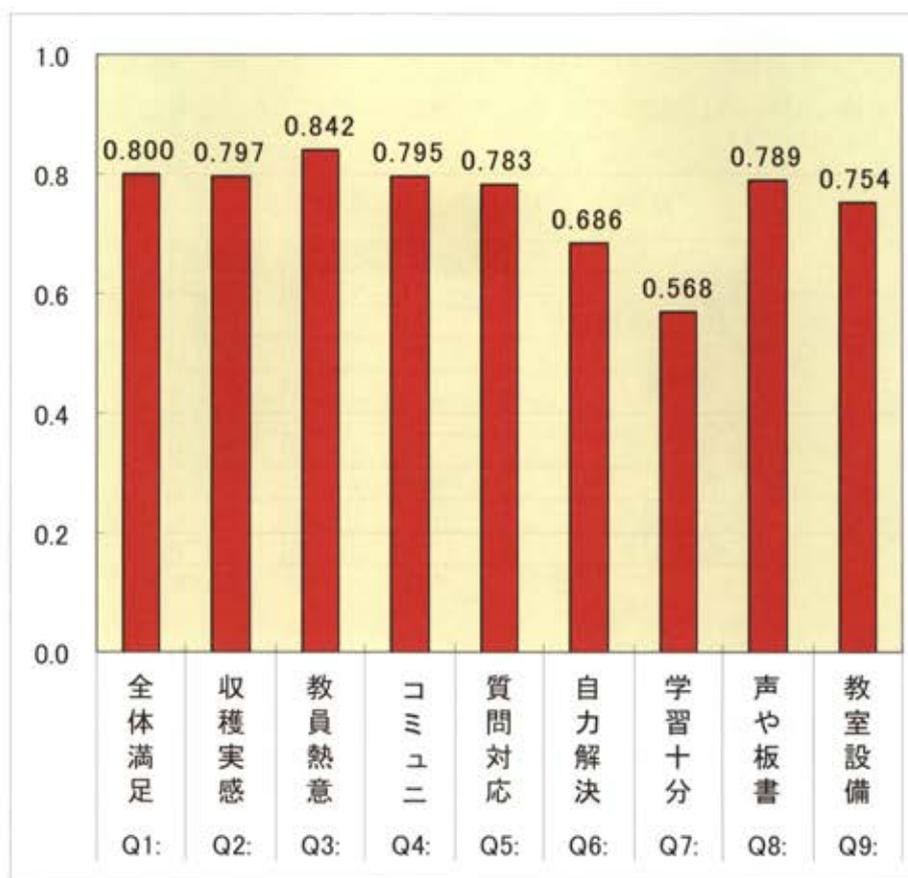


図1-3 質問項目ごとの項目別得点の平均

[参考資料1] 各質問の区分内平均得点を、分野区別に算定した結果を表1-2に記す。ここでは、授業の基本に係る質問(基本①～基本③)についても同じ算出法で導かれる値を掲載している。

表1-2 分野区分ごとの各質問の平均値(学生アンケート)

	基本①	基本②	基本③	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
総合英語	0.950	0.918	0.981	0.838	0.784	0.883	0.907	0.850	0.749	0.672	0.876	0.796
外国語(英語以外)	0.904	0.861	0.956	0.806	0.824	0.870	0.860	0.830	0.741	0.651	0.814	0.765
健康・スポーツ	0.897	0.882	0.986	0.896	0.834	0.913	0.912	0.813	0.689	0.490	0.852	0.755
情報関連	0.909	0.922	0.976	0.814	0.847	0.812	0.743	0.786	0.754	0.554	0.744	0.763
人文系	0.911	0.898	0.883	0.790	0.807	0.834	0.716	0.735	0.594	0.476	0.758	0.724
社会系	0.911	0.877	0.763	0.723	0.751	0.780	0.637	0.695	0.564	0.454	0.706	0.709
自然系	0.864	0.857	0.970	0.670	0.680	0.737	0.599	0.697	0.645	0.528	0.653	0.694
総合科目	0.908	0.893	0.905	0.839	0.847	0.863	0.774	0.761	0.622	0.477	0.790	0.752
主題別ゼミ	0.880	0.857	0.920	0.806	0.837	0.827	0.858	0.798	0.766	0.678	0.808	0.805

第Ⅱ部 教員自己点検結果の概要

(1) 実施状況

平成22年度前学期開講の教養科目454科目のうち、教員自己点検の対象科目は442科目である(学生アンケートを実施しなかった科目は対象外とする)。このうち390科目で教員自己点検が実施された。全体の実施率は88.2%である。各分野区分における実施率は次の表の通りである。

表2-1 分野区分ごとの実施状況

	対象数	実施数	実施率
総合英語	77	68	88.3%
外国語(英語以外)	77	73	94.8%
健康・スポーツ	51	48	94.1%
情報関連	22	22	100.0%
人文系	47	41	87.2%
社会系	43	32	74.4%
自然系	50	44	88.0%
総合科目	35	26	74.3%
主題別ゼミ	40	36	90.0%
合計	442	390	88.2%

(2) 実施方法および点検内容

教員自己点検は、学生アンケート結果公開後に、授業担当教員への質問(点検項目)計14項目への回答ならびに自由記述を求める形で行われた。14項目の質問事項は科目区分あるいは分野区分に依らず共通のものである。質問内容を以下に記す。

<授業の基本に係る項目>

- ①授業の初回にシラバスおよび評価方法について説明しましたか?
- ②概ねシラバスどおりに授業を展開しましたか?
- ③出欠調査は毎回行いましたか?

<主に“期待クラス満足度”に係る項目>

- q1 声の大きさ、話し方、板書に気を配り、学生が受講しやすい進行を心がけましたか?
- q2 受講生からの質問や相談に対して適切に対応しましたか?
- q3 受講生とのコミュニケーション必要かつ十分な程度とれたと思いますか?
- q4 この授業のための準備は不足無く行えましたか?
- q5 受講生の、この授業に対する興味・関心をいっそう駆り立てるための工夫に、努力しましたか?
- q6 受講生の平均的な習熟度から判断して、この授業における当初目的は達成されましたか?
- q7 この授業を受けることを、自信をもって学生に勧められますか?

<主に“教員満足度”に係る項目>

- Q1 円滑に授業を進める上で、設備面は満足のいくものでしたか?
- Q2 学期を通じて半数以上の学生が教員の熱意に見合う反応を示しましたか?
- Q3 担当クラスの期末試験の答案やレポートは概ね満足のゆく結果でしたか?
- Q4 学生の授業アンケート結果は得心して受け入れられますか?

(注3) 上記全ての質問で、回答が「はい」の場合は1、「いいえ」の場合は5を選択。どちらか確定し難い場合は、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選択。

(3) 教員自己点検における分析指標

教員自己点検の分析においては、次の2種類の指標を定義した。

【期待クラス満足度】 質問 q1、q2、q3、q4、q6、q7 への各回答に、次の5段階の数値を対応させ、計6問にわたって平均した値である。

[回答1→1.00 回答2→0.75 回答3→0.50 回答4→0.25 回答5→0.00]

この6問はそれぞれ、学生アンケートにおける「受講者満足度」算定の際の質問6項目に対応している(表2-2参照)。すなわち期待クラス満足度は、教員による自己点検内容(=教員自らが感じた授業への手応え)と実際の学生の受け取り方(=クラス満足度)との比較に有用な指標と考えられる。期待クラス満足度の値が1に近いほど、当該授業に対する(ここで定義されるような)手応えや成果が、教員自身により大きく期待されているといえる。

【教員満足度】 質問 Q2、Q3、Q4 への各回答に対して、上と同じ要領で数値を対応させ、計3問にわたって平均した値である。当該授業完了後の、教員の総合的な充足感を計るひとつの指標と考えられる。

ここで、学生アンケートと教員自己点検の両者間で対応関係のある質問項目を示す。

表2-2 学生アンケートと教員自己点検とで対応する質問項目

「クラス満足度」算定に係る項目 (学生アンケート)	「期待クラス満足度」算定に係る項目 (教員自己点検)
Q1 この授業に、全体として満足しましたか？	q7 この授業を受けることを、自信をもって学生に勧められますか？
Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？	q6 受講生の平均的な習熟度から判断して、この授業における当初目的は達成されましたか？
Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？	q4 この授業のための準備は不足無く行えましたか？
Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？	q3 受講生とのコミュニケーション必要かつ十分な程度とれたと思いますか？
Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？	q2 受講生からの質問や相談に対して適切に対応しましたか？
Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？	q1 声の大きさ、話し方、板書に気を配り、学生が受講しやすい進行を心がけましたか？

(4) 期待クラス満足度に関する統計

教員自己点検が実施された全科目について算定した期待クラス満足度の度数分布を図2-1に示す。期待クラス満足度の平均値は0.891、最大値は1、最小値は0.125であった。

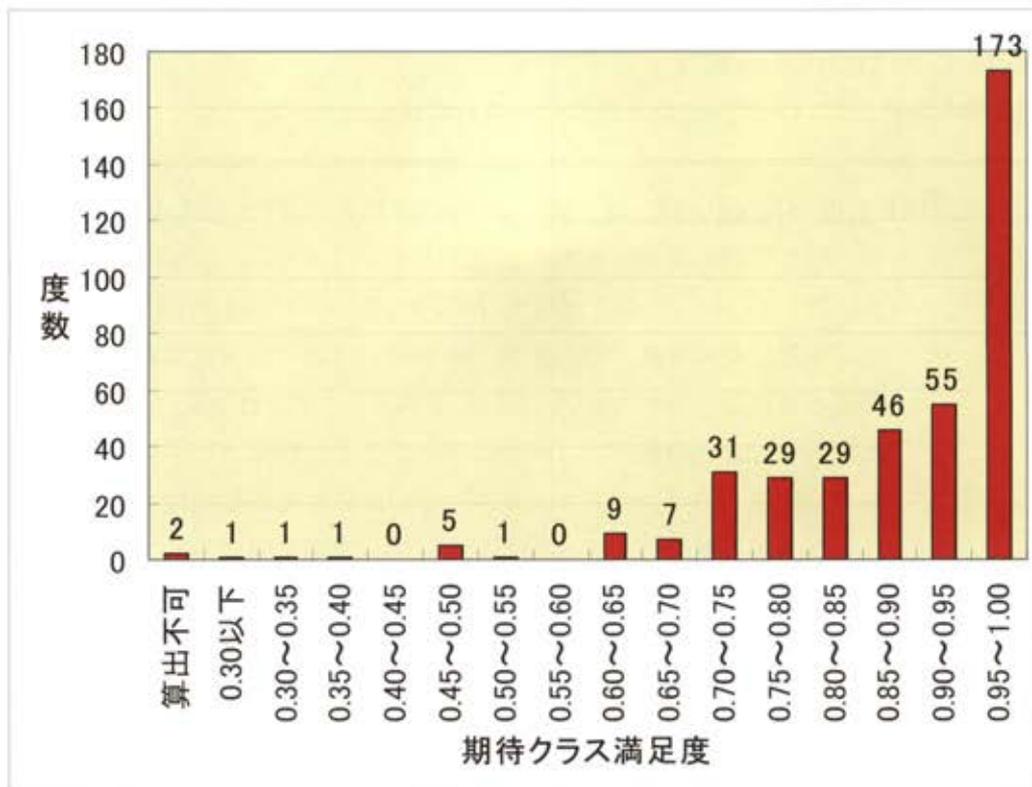


図2-1 期待クラス満足度の度数分布

また、各科目の期待クラス満足度を分野区分ごとに平均した結果を図2-2に示す。

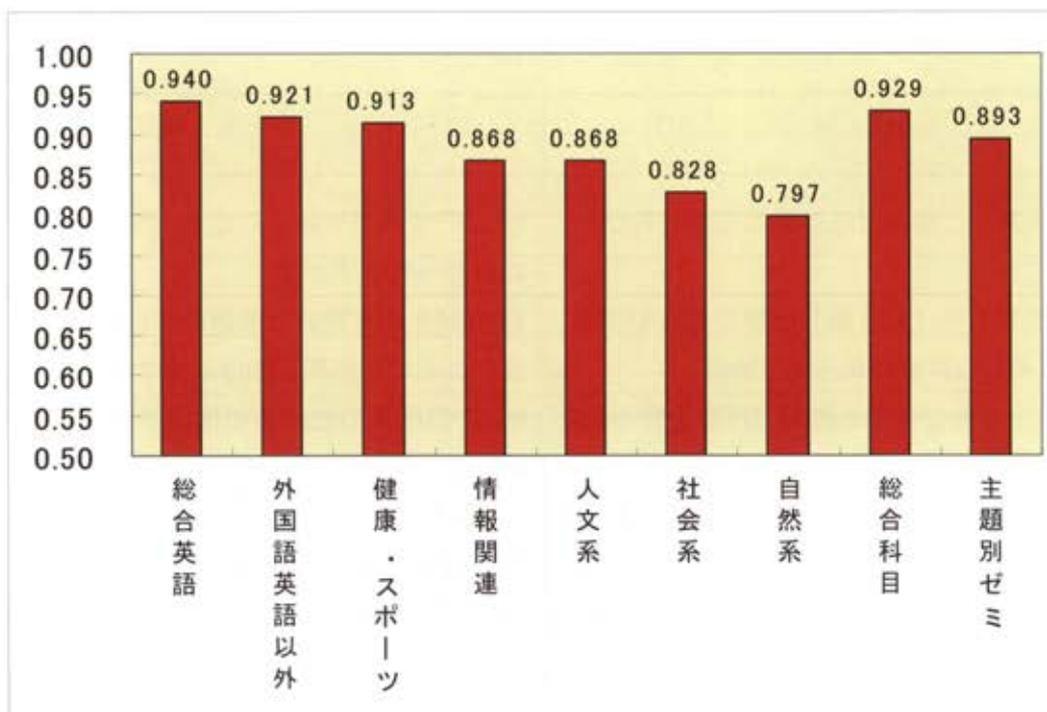


図2-2 分野区分ごとの期待クラス満足度の平均

(5) 教員満足度に関する統計

教員自己点検が実施された全科目について算定した教員満足度の度数分布を図2-3に示す。教員満足度の平均値は0.848、最大値は1、最小値は0であった。

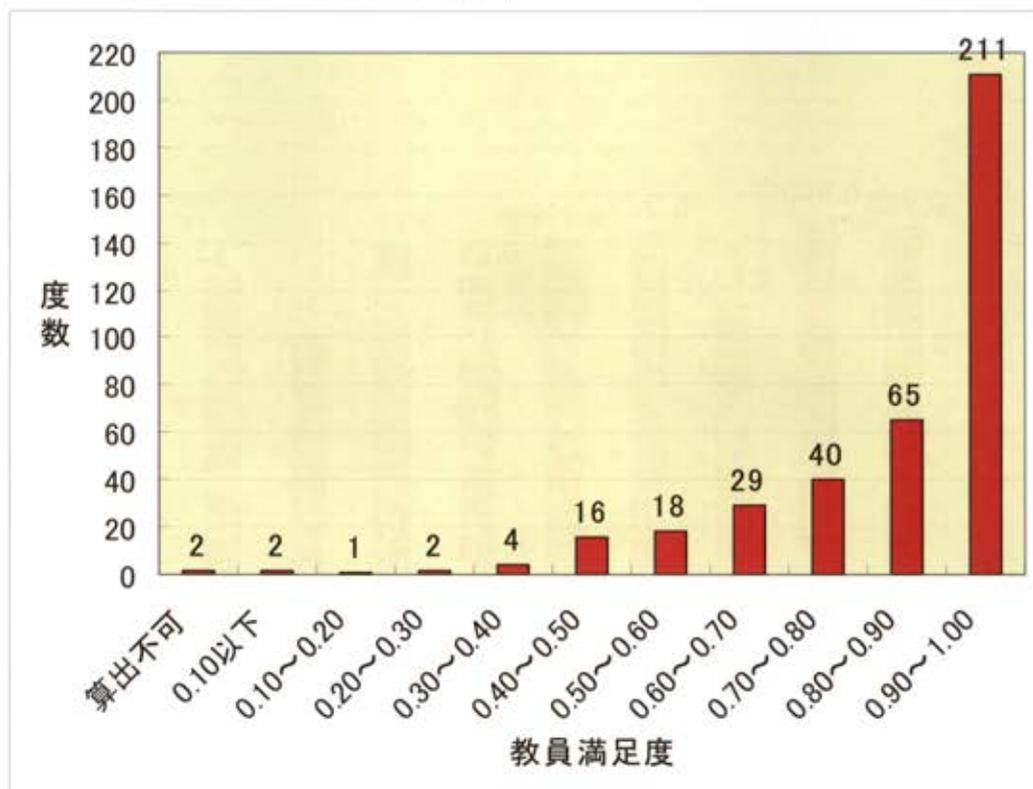


図2-3 教員満足度の度数分布

また、分野区分ごとに教員満足度を平均した結果を図2-4に示す。

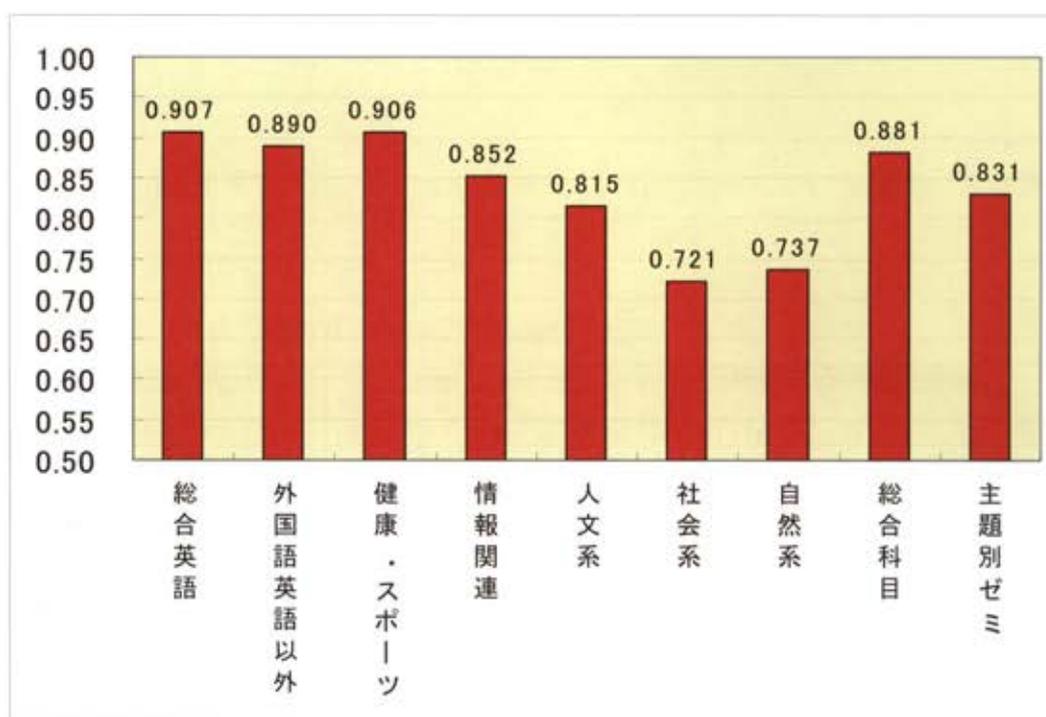


図2-4 分野区分ごとの教員満足度の平均

(6) 質問項目ごとの統計

教員自己点検の質問11項目 (q1~q7 と Q1~Q4) に対して、各回答に付された「数値 (0から1までの5段階)」を教員自己点検が実施された科目全てにわたって平均した値を図2-5に示す。略記された質問の全文については(2)節を参照されたい。

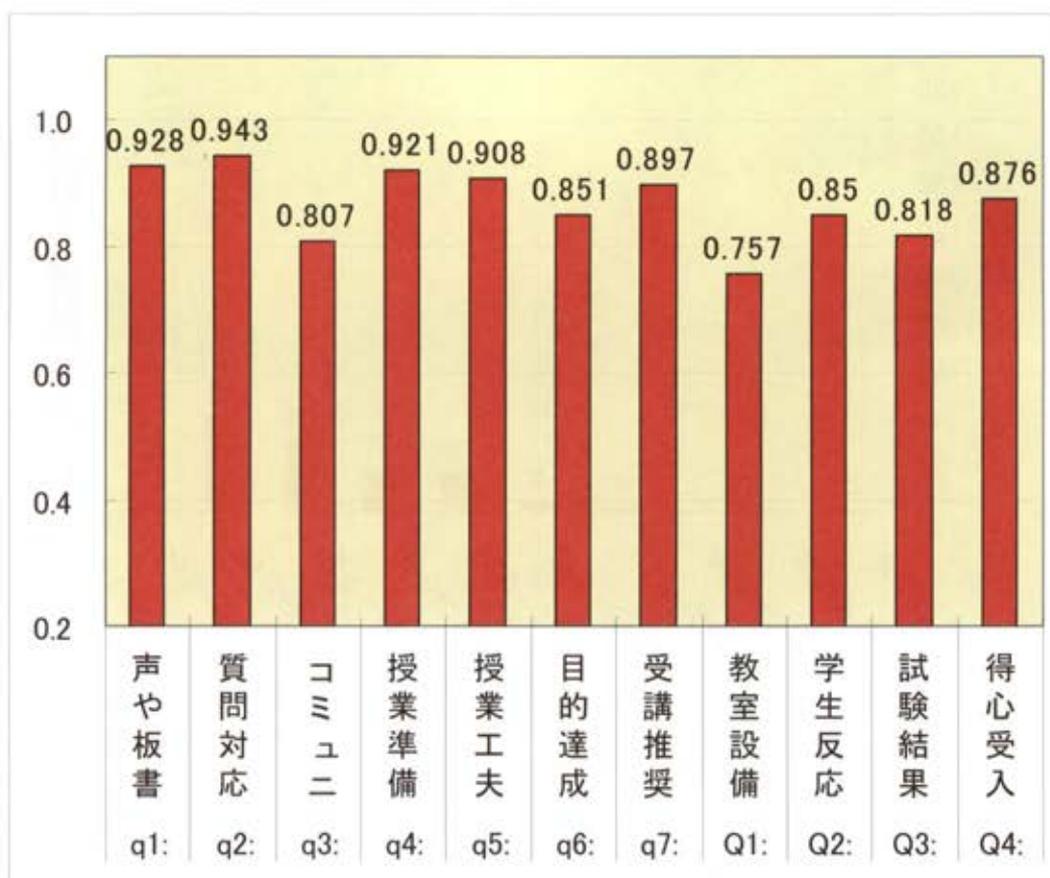


図2-5 質問項目ごとの平均値

[参考資料2] 教員自己点検の全回答に対し、表1-2と同様の方法で算出された結果(分野区分ごと、質問ごとの平均「数値」)を表2-3に記す。

表2-3 分野区分ごとの各質問の平均値(教員自己点検)

	基本①	基本②	基本③	q1	q2	q3	q4	q5	q6	q7	Q1	Q2	Q3	Q4
総合英語	1.000	0.978	1.000	0.949	0.982	0.904	0.960	0.963	0.901	0.960	0.787	0.934	0.864	0.923
外国語(英語以外)	0.979	0.929	0.979	0.930	0.982	0.894	0.958	0.940	0.873	0.877	0.842	0.905	0.877	0.887
健康・スポーツ	0.990	0.802	1.000	0.948	0.948	0.880	0.896	0.917	0.901	0.906	0.708	0.901	0.870	0.948
情報関連	0.943	0.886	0.943	0.932	0.886	0.773	0.886	0.920	0.864	0.869	0.631	0.857	0.852	0.857
人文系	0.994	0.951	0.835	0.927	0.915	0.707	0.909	0.945	0.841	0.909	0.652	0.827	0.799	0.831
社会系	0.992	0.898	0.685	0.906	0.875	0.581	0.938	0.836	0.781	0.875	0.664	0.734	0.703	0.727
自然系	0.936	0.884	0.898	0.858	0.892	0.665	0.852	0.778	0.705	0.813	0.807	0.699	0.688	0.824
総合科目	0.990	0.952	0.962	0.962	0.971	0.875	0.904	0.952	0.894	0.971	0.769	0.856	0.846	0.942
主題別ゼミ	0.929	0.893	0.914	0.936	0.957	0.807	0.921	0.871	0.857	0.875	0.801	0.816	0.786	0.879

第Ⅲ部 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係

学生アンケートと教員自己点検の両方ともが実施された科目は、対象 452 科目中 390 科目であった (86.3%)。1 科目を 1 サンプルとしたときの、教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係散布図を図 3-1 に示す。また、分野区分ごとの散布図を図 3-2 以降に示す。なお、作図にあたっては相異なる複数のサンプルが同一の点を共有することに起因する重複を避け、点の密度をより視覚的に表現するため、適度に小さな乱数による揺らぎを与えた。

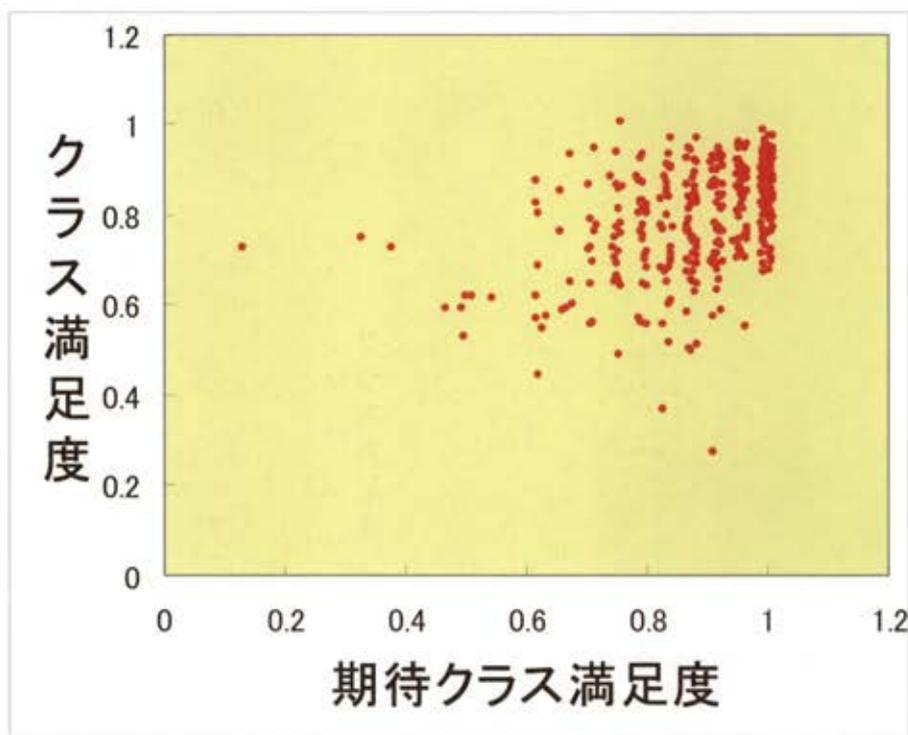


図 3-1 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との相関 (全科目)

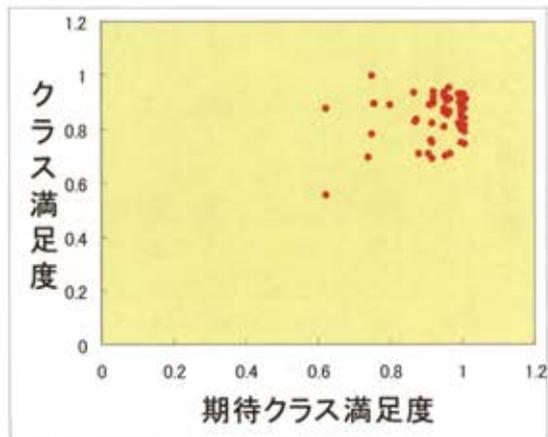


図 3-2 総合英語

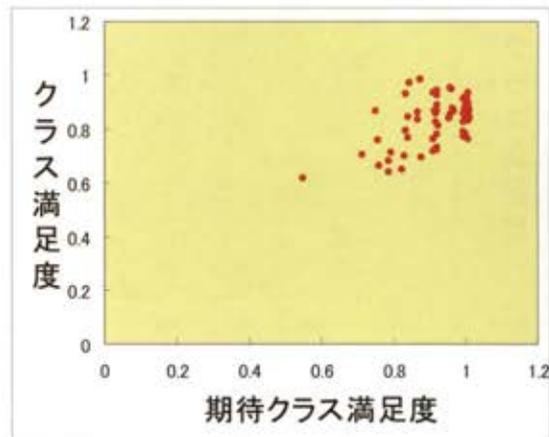


図 3-3 外国語 (英語以外)

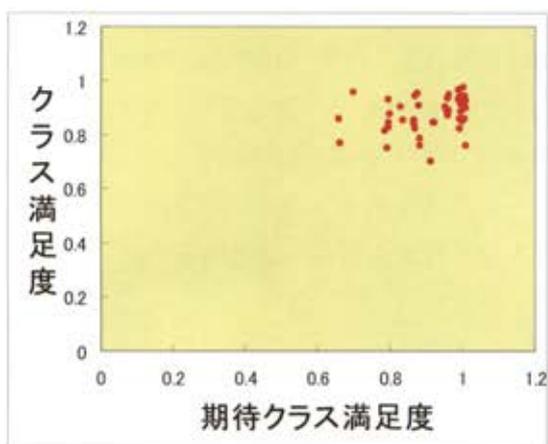


図3-4 健康・スポーツ

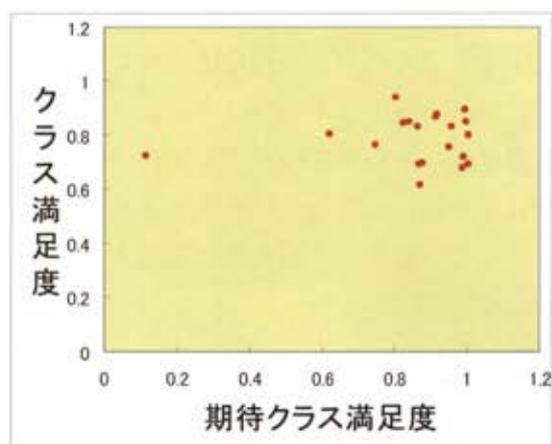


図3-5 情報関連

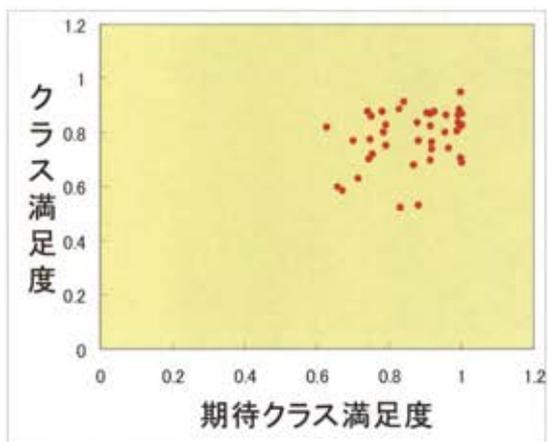


図3-6 人文系

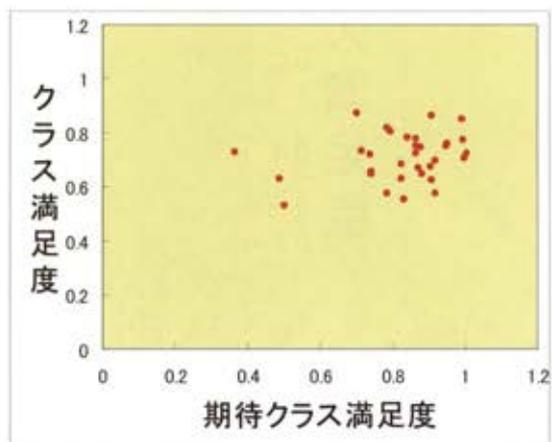


図3-7 社会系

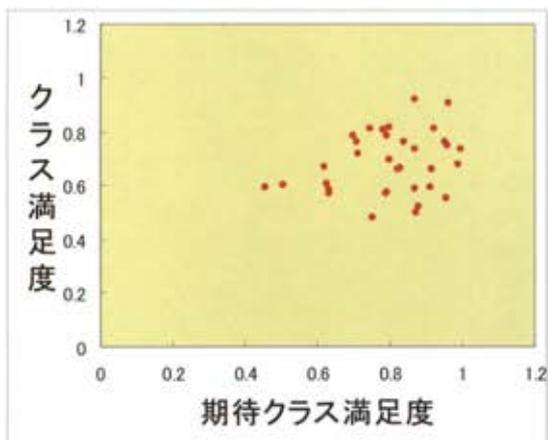


図3-8 自然系

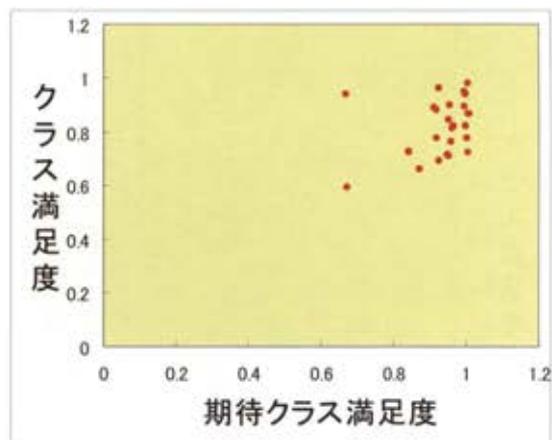


図3-9 総合科目

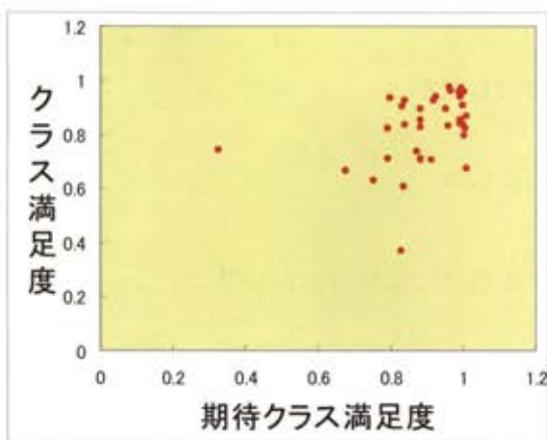


図3-10 主題別ゼミ

[参考資料3] 学生アンケートにおける固有質問を以下に示す。分野区分ごとに異なる質問項目が定められている（第I部参照のこと）。

1) 総合英語

Q10 この授業の難易度は自分にあっていましたか？

(1:大変難しかった 2:少し難しかった 3:適切であった 4:少し易しかった 5:大変易しかった)

Q11 この授業の受講者数は自分にとって適切でしたか？

(1:多すぎた 2:少し多かった 3:適切であった 4:少し少なかった 5:少なすぎた)

Q12 この授業を後輩に薦めますか？

(1:はい 2:いいえ 3:どちらともいえない)

Q13 左の質問項目について、補足があれば具体的に記述してください。(自由記述)

2) 外国語 (英語以外)

Q10 この授業で読む・聞く・書く・話すのバランスは、あなたにとって適切でしたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q11 この授業の受講者の数は、あなたにとって適切だと思えましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q12 この授業の教科書は、あなたにとって使いやすかったですか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q13 この授業で、配布資料、板書など、よかった点、悪かった点について、自由に記述してください。(自由記述)

3) 健康・スポーツ

Q10 この授業で使用した施設や用具は満足のゆくものでしたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q11 この授業で指定された教科書は十分役にたちましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q12 この授業で課されたレポートは授業内容を習得する助けになりましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q13 今後のより良い授業のために、この授業のよかった点、改善すべき点を具体的に書いてください。(自由記述)

4) 情報関連

Q10 Q1～Q9 及び教室や設備を含め、本授業の良かった点や、悪かった点はなんですか。(自由記述)

5) 自然系

Q10 授業のやり方や内容について、どのような点で問題がありましたか？

(1:話し方や声の大きさ 2:板書の仕方 3:特にない) (※複数選択可能)

Q11 授業の難しさはどの程度でしたか？

(1:難しかった 2:普通 3:やさしかった)

Q12 この授業について何かあれば書いてください。(自由記述)

6) 人文系・社会系・主題別ゼミ

Q10 この授業に関する要望や感想などを自由に記述してください。(自由記述)

以上

平成22年度・後学期

教養科目授業アンケート集計報告

大学教育センター教育点検支援部

大学教育センターでは、平成22年度後学期開講の教養科目を対象に授業アンケートを実施した。授業アンケートは、次の2種類から成る。

- ・学生アンケート・・・授業運営に係る基本事項の点検や学生の満足感調査、その他学生からのフィードバックが期待される項目についての調査・公開
- ・教員自己点検・・・学生アンケート集計結果を基にした、授業担当教員の手による自己点検評価

本授業アンケートは平成22年度前学期と同じ形式・内容である。これらに関する各科目個別の結果は、次のページにおいて参照していただきたい。ただし学内からのみ参照可能である。

学生アンケートと教員自己点検の科目ごとの結果：

<http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/gakunai/anketo/H22k-all/H22k-all.html>

学生アンケート回答のうち自由記述部分については、匿名で当該教員に提示するにとどめ、上記ページには掲載していない。教員自己点検における自由記述部分は、本来の目的に鑑み、活字変換のうえ原則としてそのまま掲載した。ただし、アンケートそのものへの意見など、本アンケートの主旨から外れると判断された記述については、改善への検討事項として別途取り纏め、上記のページからは削除している。以下ではこれらの集計・分析結果を、次の三部構成で報告する。

- 第Ⅰ部 学生アンケート結果の概要
- 第Ⅱ部 教員自己点検結果の概要
- 第Ⅲ部 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係

【用語説明】 科目区分と分野区分について

教養科目に属する授業は、総合英語科目；外国語科目（英語以外）；健康・スポーツ科目；情報関連科目；人文／教養科目（分野別教養科目の人文の分野）；人文／基礎科目（分野別基礎科目の人文の分野、以下同様）；社会／教養科目；社会／基礎科目；自然／教養科目；自然／基礎科目；総合科目；主題別ゼミナールの計12種類に大別される。本報告書ではこのような分け方を「科目区分」と呼ぶ。また、集計処理の都合上、分野別教養科目と分野別基礎科目を（分野ごとに）ひとまとめにして扱うことがある。すなわち、「人文／教養科目」に属する科目と「人文／基礎科目」に属する科目をまとめて（「人文系」などと称し）扱う場合がある。合計9つに分かれるこのような分け方を本報告書では『分野区分』と呼ぶことにする。

第 I 部 学生アンケート結果の概要

(1) 実施状況

平成22年度後学期開講の教養科目360科目のうち学生アンケート採取対象科目は340科目であり、このうち327科目で学生アンケートが実施された。全体の実施率は96.2%であった。各々の分野区分における実施率は次の表の通りである。

表1-1 分野区分ごとの実施状況

	対象数	実施数	実施率
総合英語	65	65	100.0%
外国語(英語以外)	64	63	98.4%
健康・スポーツ	42	41	97.6%
情報関連	7	7	100.0%
人文系	34	33	97.1%
社会系	23	19	82.6%
自然系	34	33	97.1%
総合科目	39	37	94.9%
主題別ゼミ	32	29	90.6%
合計	340	327	96.2%

(2) 実施方法およびアンケート内容

アンケート採取は、各授業の最終回（またはそれに準じる時期）に、教員がアンケート用紙を配布し学生の手によって回収される方式で行われた。アンケート内容は択一形式の質問と自由記述である。択一形式の質問は、すべての科目に共通に設定された12項目（「授業の基本に係る質問」3項目および「教養科目に共通の質問」9項目）と、各々の分野区分に固有の数項目（項目数は分野区分により異なる）からなる。共通12項目の質問内容を以下に記す。なお、本報告書の末尾〔参考資料3〕には、各々の分野区分における固有質問を掲載しているので併せて参照されたい。

<授業の基本に係る質問>

- ①この授業の初回に、授業計画（シラバス）や評価方法の説明がありましたか？
- ②授業展開は、おおむね授業計画（シラバス）に沿ったものでしたか？
- ③この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか？

<教養科目に共通の質問>

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか？
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？
- Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法（教員に質問する・自分で調べるなど）で解決するようにつとめましたか？
- Q7 この授業のための学習（予習・復習など）に十分な時間をかけましたか？

Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？

Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか？

(注1) 授業の基本に係る質問では、回答は {1:はい, 2:いいえ, 3:わからない} から選択。

(注2) 教養科目に共通の質問では、回答が「はい」の場合は1、「いいえ」の場合は5を選択。どちらか決められない場合は、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選択。

(3) 学生アンケートにおける分析指標

本アンケートの分析においては、次の2種類の指標を定義した。

【受講者満足度】 受講者（回答者）それぞれに対して、質問 Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q8 の各回答に次の5段階の数値を対応させ、計6問にわたって平均した値（回答者ひとりひとりに対して算定される値）。

[回答 1→1.00 回答 2→0.75 回答 3→0.50 回答 4→0.25 回答 5→0.00]

これは当該受講者の、授業への（事後）満足感の高さを表すひとつの指標と考えられる。この値が1に近いほど、当該受講者にとってはこの授業に（ここで定義された意味で）好感触を持ったと考えられる。

【クラス満足度】 それぞれの科目内で、受講者満足度を全回答者にわたり平均した値である（ひとつひとつの科目に対して算定される値）。

なお、各科目個別の集計資料（学内限定で公開中）には、受講者満足度・クラス満足度の他に参考指標として以下を算定している。

- ・ 項目別得点 . . . 教養科目に共通の質問（全9問）への各回答に、受講者満足度算出の際と同じ方法で5段階の数値を対応させ、質問項目ごとに科目内全回答者にわたり平均した値。
- ・ 区分内平均得点 . . . それぞれの質問の項目別得点を同一科目区分内の全科目にわたり平均した値。これの算出に当たっては分野区分によるくくりではないことに注意されたい（つまり、分野別教養科目と分野別基礎科目を区別している）。
- ・ 偏差値 . . . それぞれの項目別得点が示す通常の意味での偏差値。母集団は当該科目が属する科目区分内の全科目である。

(4) クラス満足度に関する統計

学生アンケートが実施された全科目について算定したクラス満足度の度数分布を図1-1に示す。クラス満足度の平均値は0.825、最大値は1、最小値は0.420であった。

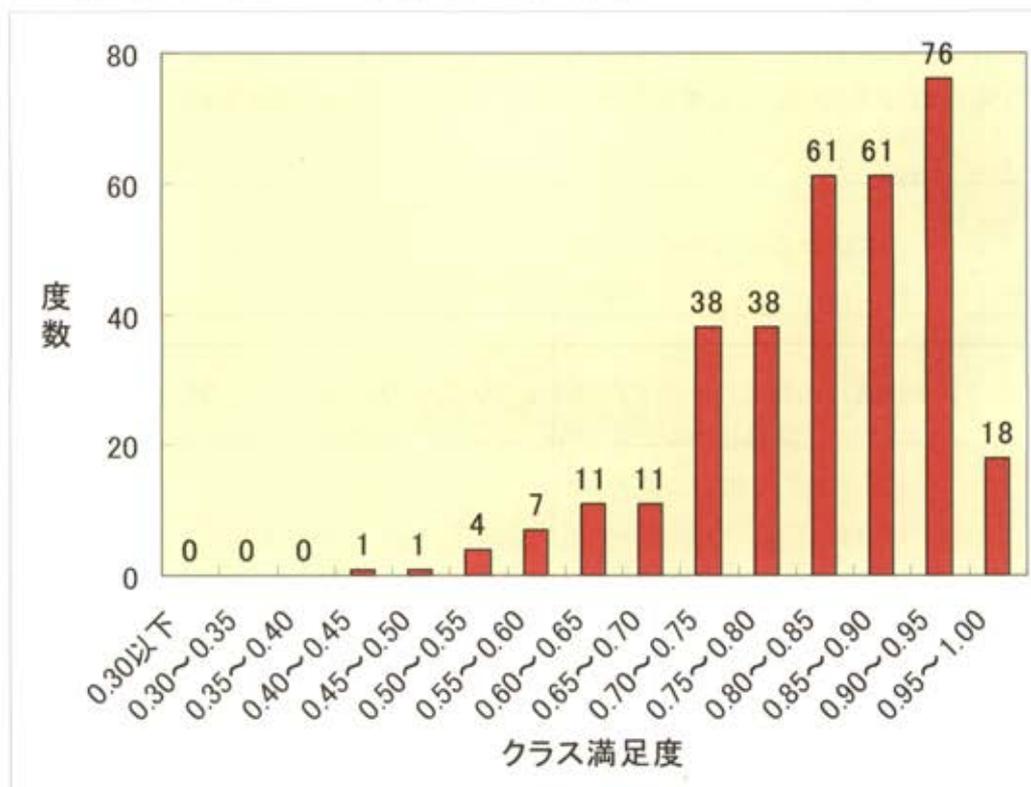


図1-1 クラス満足度の度数分布

また、各科目のクラス満足度を分野区分ごとに平均した結果を図1-2に示す。



図1-2 分野区分ごとのクラス満足度の平均

(5) 質問項目ごとの統計

教養科目に共通の質問9項目に対して、項目別得点をアンケートが実施された科目全てにわたって平均した値を図1-3に示す。略記された質問の全文については(2)節を参照されたい。

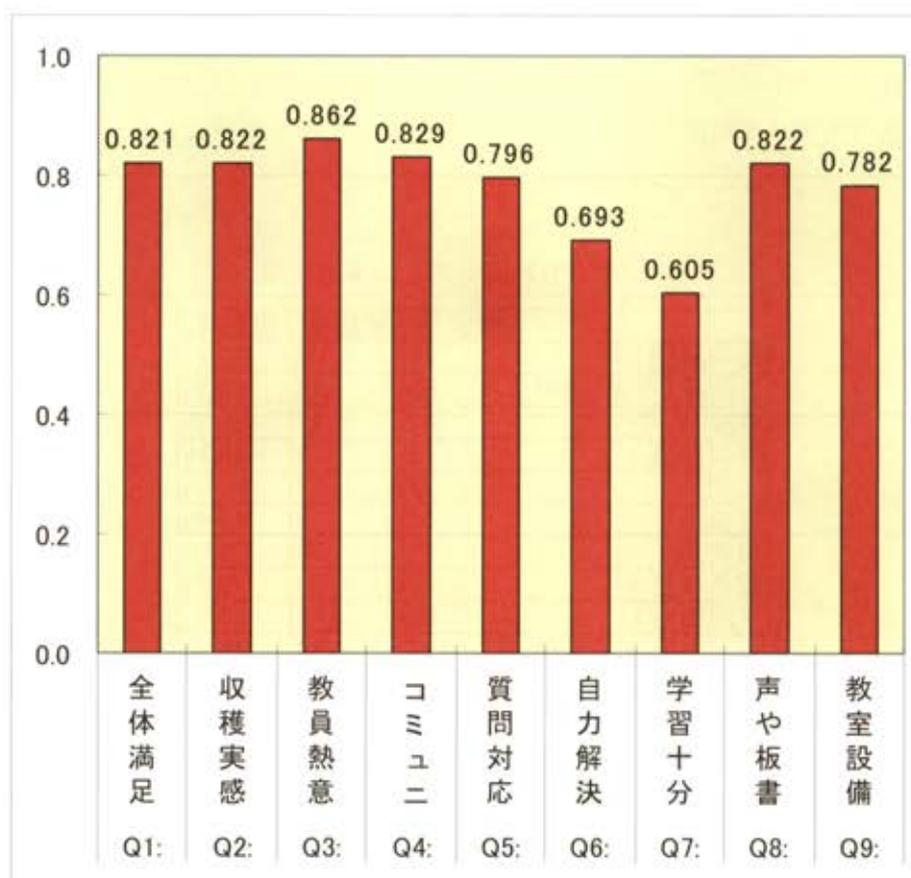


図1-3 質問項目ごとの項目別得点の平均

[参考資料1] 各質問の区分内平均得点を、分野区分別に算定した結果を表1-2に記す。ここでは、授業の基本に係る質問(基本①～基本③)についても同じ算出法で導かれる値を掲載している。

表1-2 分野区分ごとの各質問の平均値(学生アンケート)

	基本①	基本②	基本③	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
総合英語	0.950	0.918	0.981	0.838	0.784	0.883	0.907	0.850	0.749	0.672	0.876	0.796
外国語(英語以外)	0.904	0.861	0.956	0.806	0.824	0.870	0.860	0.830	0.741	0.651	0.814	0.765
健康・スポーツ	0.897	0.882	0.986	0.896	0.834	0.913	0.912	0.813	0.689	0.490	0.852	0.755
情報関連	0.909	0.922	0.976	0.814	0.847	0.812	0.743	0.786	0.754	0.554	0.744	0.763
人文系	0.911	0.898	0.883	0.790	0.807	0.834	0.716	0.735	0.594	0.476	0.758	0.724
社会系	0.911	0.877	0.763	0.723	0.751	0.780	0.637	0.695	0.564	0.454	0.706	0.709
自然系	0.864	0.857	0.970	0.670	0.680	0.737	0.599	0.697	0.645	0.528	0.653	0.694
総合科目	0.908	0.893	0.905	0.839	0.847	0.863	0.774	0.761	0.622	0.477	0.790	0.752
主題別ゼミ	0.880	0.857	0.920	0.806	0.837	0.827	0.858	0.798	0.766	0.678	0.808	0.805

第Ⅱ部 教員自己点検結果の概要

(1) 実施状況

平成22年度後学期開講の教養科目360科目のうち、教員自己点検の対象科目は327科目である(学生アンケートを実施しなかった科目は対象外とする)。このうち239科目で実際に教員自己点検が実施された。全体の実施率は73.1%である(この学期の教員自己点検の実施期間中、東日本震災(東北地方太平洋沖地震)の影響により実施が困難となった科目もあったため、実施率は低くなっている)。各分野区分における実施率は次の表の通りである。

表2-1 分野区分ごとの実施状況

	対象数	実施数	実施率
総合英語	65	45	69.2%
外国語(英語以外)	63	43	68.3%
健康・スポーツ	41	37	90.2%
情報関連	7	6	85.7%
人文系	33	27	81.8%
社会系	19	13	68.4%
自然系	33	26	78.8%
総合科目	37	27	73.0%
主題別ゼミ	29	15	51.7%
合計	327	239	73.1%

(2) 実施方法および点検内容

教員自己点検は、学生アンケート結果公開後に、授業担当教員への質問(点検項目)計14項目への回答ならびに自由記述を求める形で行われた。14項目の質問事項は科目区分あるいは分野区分に依らず共通のものである。質問内容を以下に記す。

<授業の基本に係る項目>

- ①授業の初回にシラバスおよび評価方法について説明しましたか?
- ②概ねシラバスどおりに授業を展開しましたか?
- ③出欠調査は毎回行いましたか?

<主に“期待クラス満足度”に係る項目>

- q1 声の大きさ、話し方、板書に気を配り、学生が受講しやすい進行を心がけましたか?
- q2 受講生からの質問や相談に対して適切に対応しましたか?
- q3 受講生とのコミュニケーション必要かつ十分な程度とれたと思いますか?
- q4 この授業のための準備は不足無く行えましたか?
- q5 受講生の、この授業に対する興味・関心をいっそう駆り立てるための工夫に、努力しましたか?
- q6 受講生の平均的な習熟度から判断して、この授業における当初目的は達成されましたか?
- q7 この授業を受けることを、自信をもって学生に勧められますか?

<主に“教員満足度”に係る項目>

- Q1 円滑に授業を進める上で、設備面は満足のいくものでしたか?
- Q2 学期を通じて半数以上の学生が教員の熱意に見合う反応を示しましたか?
- Q3 担当クラスの期末試験の答案やレポートは概ね満足のゆく結果でしたか?

Q4 学生の授業アンケート結果は得心して受け入れられますか？

(注3) 上記全ての質問で、回答が「はい」の場合は1、「いいえ」の場合は5を選択。どちらか確定し難い場合は、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選択。

(3) 教員自己点検における分析指標

教員自己点検の分析においては、次の2種類の指標を定義した。

【期待クラス満足度】 質問 q1、q2、q3、q4、q6、q7 への各回答に、次の5段階の数値を対応させ、計6問にわたって平均した値である。

[回答1→1.00 回答2→0.75 回答3→0.50 回答4→0.25 回答5→0.00]

この6問はそれぞれ、学生アンケートにおける「受講者満足度」算定の際の質問6項目に対応している(表2-2参照)。すなわち期待クラス満足度は、教員による自己点検内容(=教員自らが感じた授業への手応え)と実際の学生の受け取り方(=クラス満足度)との比較に有用な指標と考えられる。期待クラス満足度の値が1に近いほど、当該授業に対する(ここで定義されるような)手応えや成果が、教員自身により大きく期待されているといえる。

【教員満足度】 質問 Q2、Q3、Q4 への各回答に対して、上と同じ要領で数値を対応させ、計3問にわたって平均した値である。当該授業完了後の、教員の総合的な充足感を計るひとつの指標と考えられる。

ここで、学生アンケートと教員自己点検の両者間に対応関係のある質問項目を示す。

表2-2 学生アンケートと教員自己点検とで対応する質問項目

「クラス満足度」算定に係る項目 (学生アンケート)	「期待クラス満足度」算定に係る項目 (教員自己点検)
Q1 この授業に、全体として満足しましたか？	q7 この授業を受けることを、自信をもって学生に勧められますか？
Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？	q6 受講生の平均的な習熟度から判断して、この授業における当初目的は達成されましたか？
Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？	q4 この授業のための準備は不足無く行えましたか？
Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？	q3 受講生とのコミュニケーション必要かつ十分な程度とれたと思いますか？
Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？	q2 受講生からの質問や相談に対して適切に対応しましたか？
Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？	q1 声の大きさ、話し方、板書に気を配り、学生が受講しやすい進行を心がけましたか？

(4) 期待クラス満足度に関する統計

教員自己点検が実施された全科目について算定した期待クラス満足度の度数分布を図2-1に示す。期待クラス満足度の平均値は0.918、最大値は1、最小値は0.25であった。

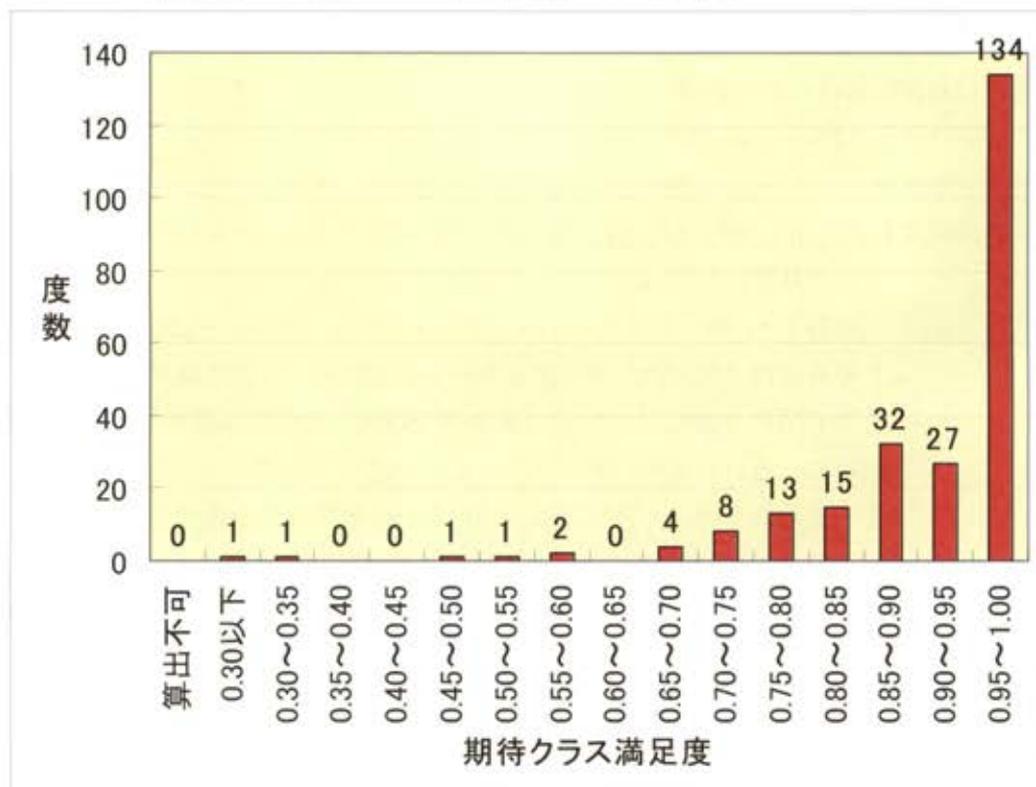


図2-1 期待クラス満足度の度数分布

また、各科目の期待クラス満足度を分野区分ごとに平均した結果を図2-2に示す。

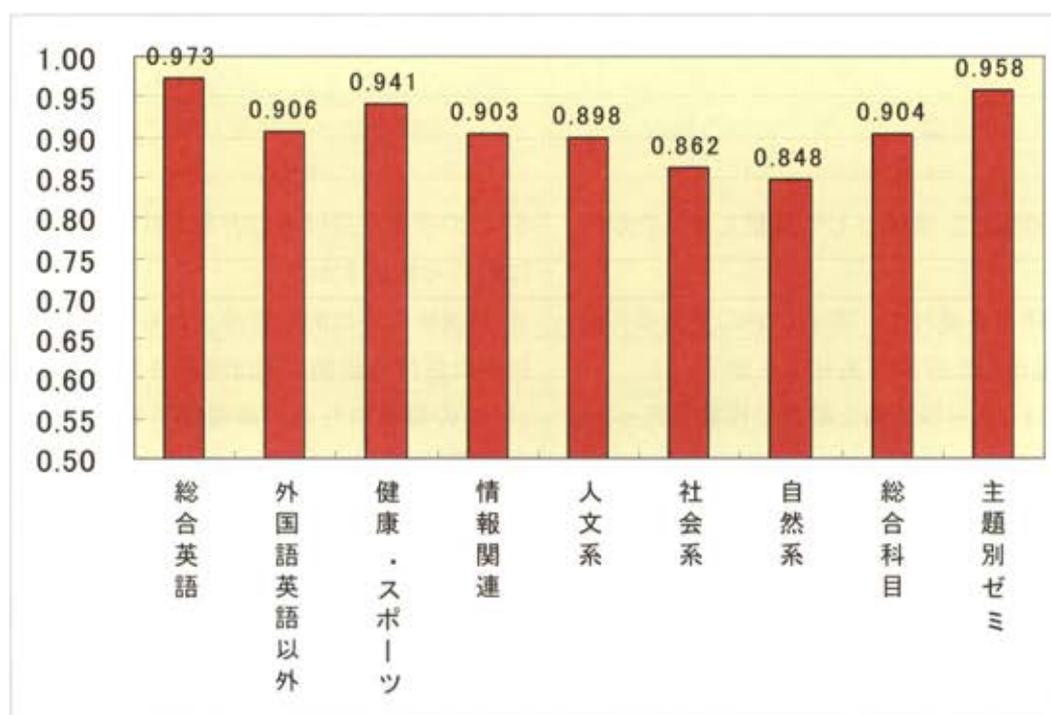


図2-2 分野区分ごとの期待クラス満足度の平均

(5) 教員満足度に関する統計

教員自己点検が実施された全科目について算定した教員満足度の度数分布を図2-3に示す。教員満足度の平均値は0.891、最大値は1、最小値は0.25であった。

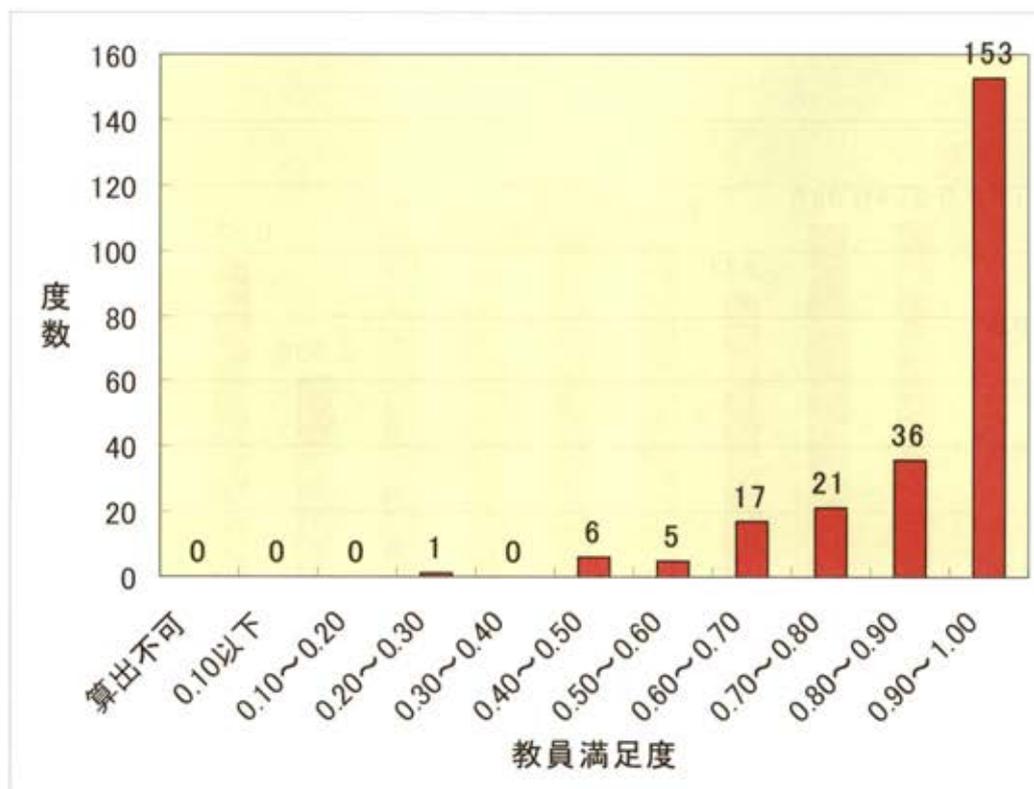


図2-3 教員満足度の度数分布

また、分野区分ごとに教員満足度を平均した結果を図2-4に示す。

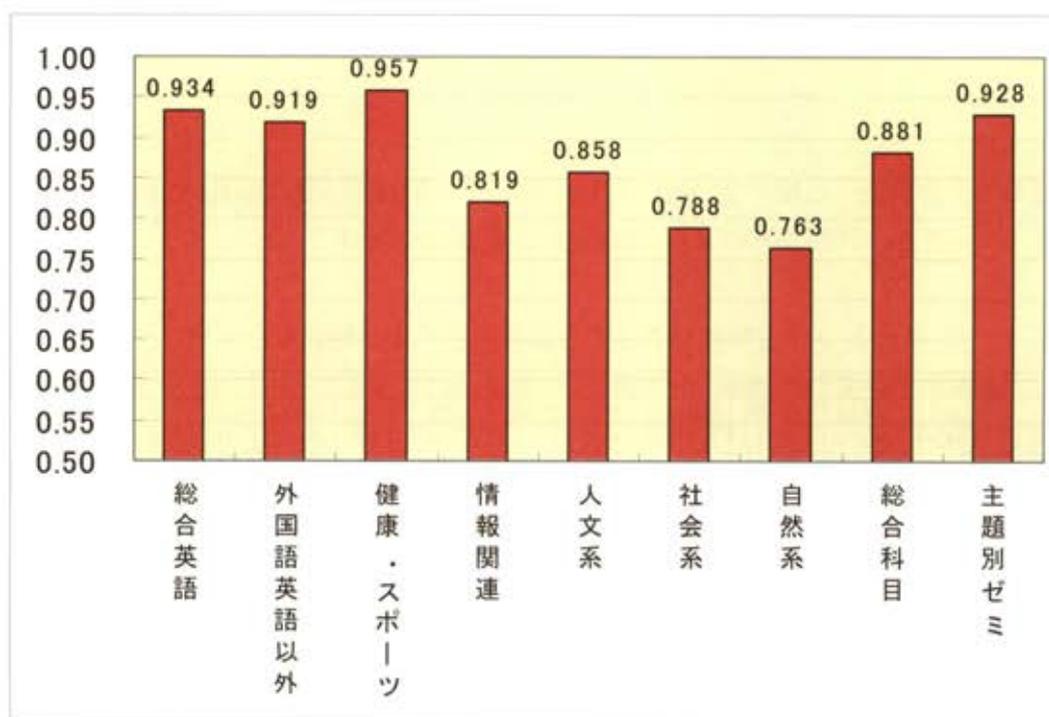


図2-4 分野区分ごとの教員満足度の平均

(6) 質問項目ごとの統計

教員自己点検の質問11項目 (q1~q7 と Q1~Q4) に対して、各回答に付された「数値 (0から1までの5段階)」を教員自己点検が実施された科目全てにわたって平均した値を図2-5に示す。略記された質問の全文については(2)節を参照されたい。

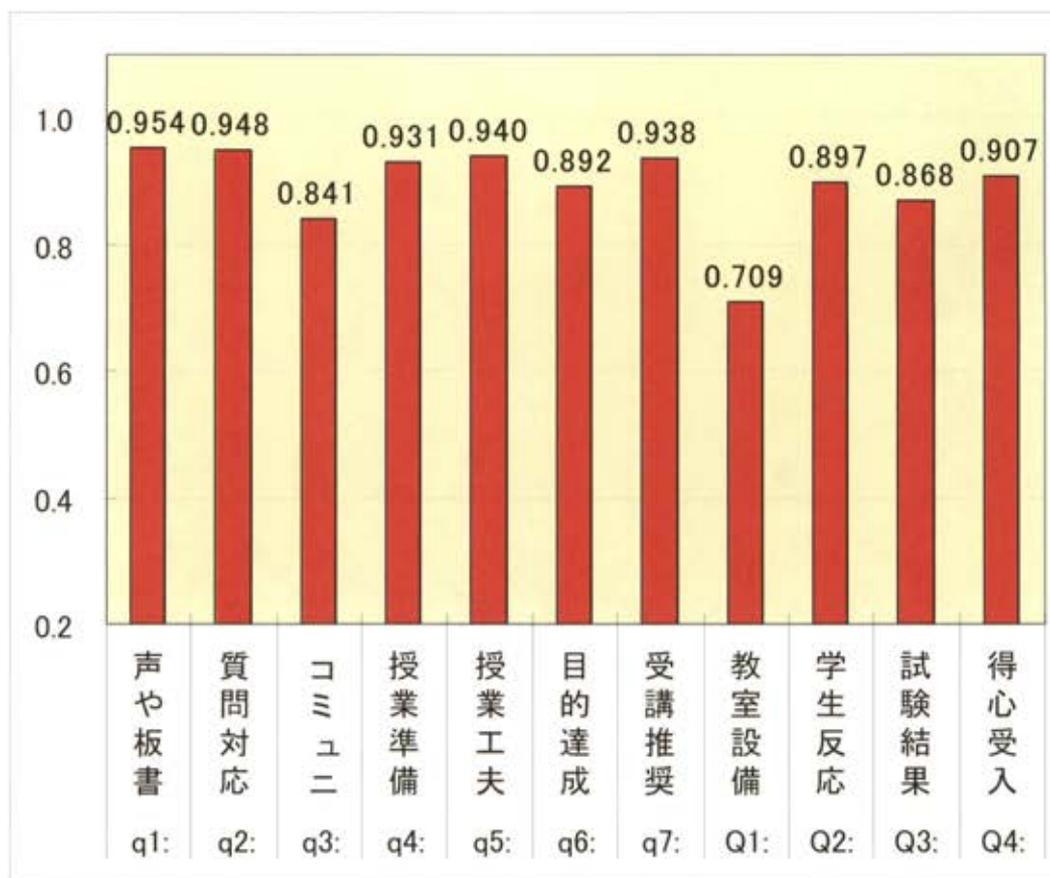


図2-5 質問項目ごとの平均値

[参考資料2] 教員自己点検の全回答に対し、表1-2と同様の方法で算出された結果(分野区分ごと、質問ごとの平均「数値」)を表2-3に記す。

表2-3 分野区分ごとの各質問の平均値(教員自己点検)

	基本①	基本②	基本③	q1	q2	q3	q4	q5	q6	q7	Q1	Q2	Q3	Q4
総合英語	1.000	0.978	0.956	0.994	1.000	0.950	0.989	0.994	0.932	0.972	0.778	0.932	0.928	0.949
外国語(英語以外)	0.948	0.884	0.913	0.919	0.930	0.919	0.866	0.942	0.878	0.924	0.866	0.930	0.901	0.924
健康・スポーツ	0.980	0.818	1.000	0.993	0.932	0.899	0.939	0.926	0.953	0.932	0.628	0.973	0.932	0.966
情報関連	1.000	1.000	0.958	0.917	0.917	0.625	0.958	0.750	1.000	1.000	0.417	0.708	0.875	0.875
人文系	1.000	0.972	0.935	0.926	0.935	0.731	0.954	0.944	0.907	0.926	0.583	0.880	0.833	0.861
社会系	0.962	0.981	0.712	0.962	0.904	0.654	0.981	0.942	0.769	0.904	0.519	0.846	0.788	0.731
自然系	0.981	0.952	0.962	0.923	0.933	0.702	0.856	0.865	0.779	0.894	0.788	0.760	0.712	0.810
総合科目	1.000	0.926	0.917	0.926	0.935	0.806	0.926	0.954	0.870	0.963	0.657	0.889	0.815	0.952
主題別ゼミ	1.000	0.929	0.929	1.000	1.000	0.893	0.964	0.982	0.929	0.946	0.714	0.911	0.929	0.929

第Ⅲ部 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係

学生アンケートと教員自己点検の両方ともが実施された科目は、対象 452 科目中 390 科目であった (86.3%)。1 科目を 1 サンプルとしたときの、教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係散布図を図 3-1 に示す。また、分野区分ごとの散布図を図 3-2 以降に示す。なお、作図にあたっては相異なる複数のサンプルが同一の点を共有することに起因する重複を避け、点の密度をより視覚的に表現するため、適度に小さな乱数による揺らぎを与えた。

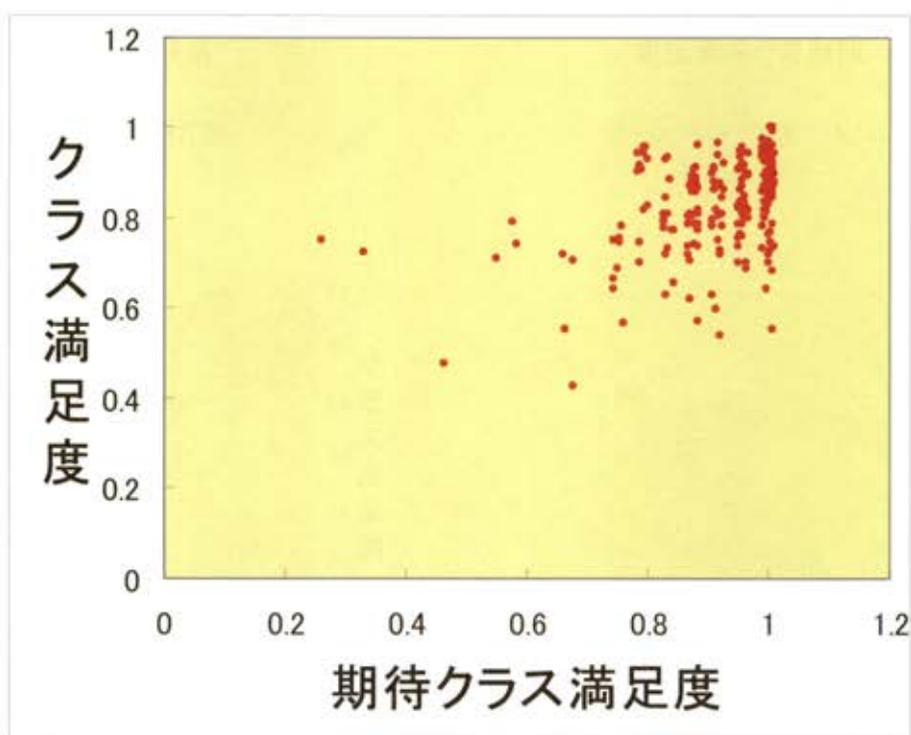


図 3-1 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との相関 (全科目)

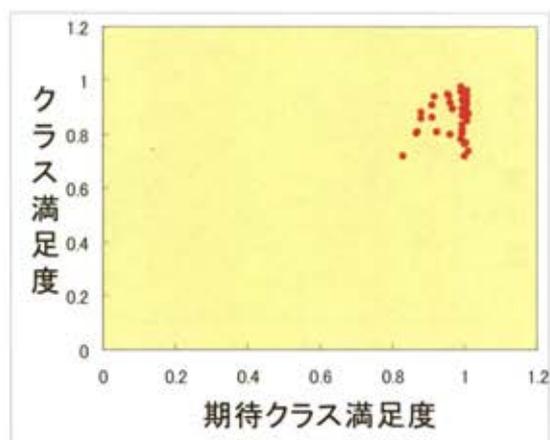


図 3-2 総合英語

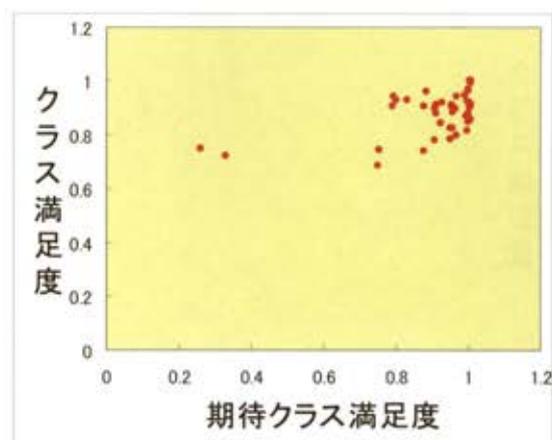


図 3-3 外国語 (英語以外)

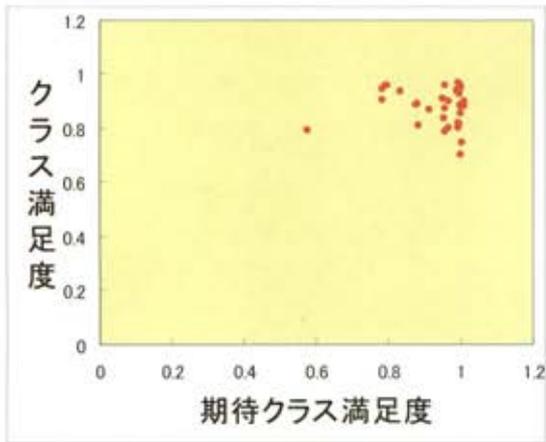


図3-4 健康・スポーツ

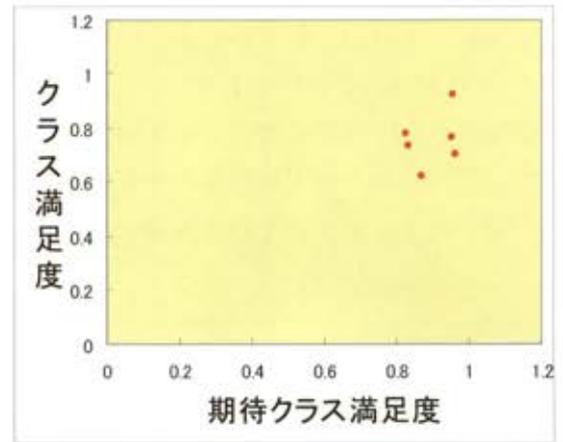


図3-5 情報関連

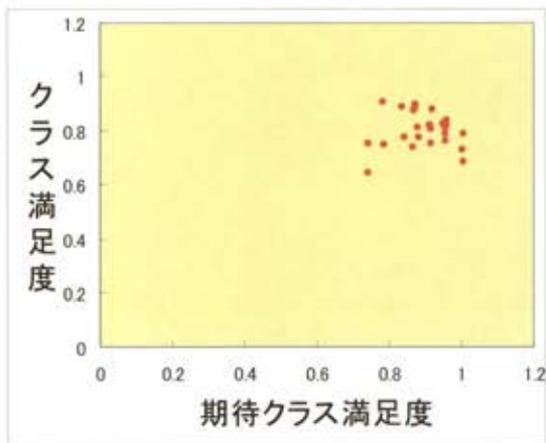


図3-6 人文系

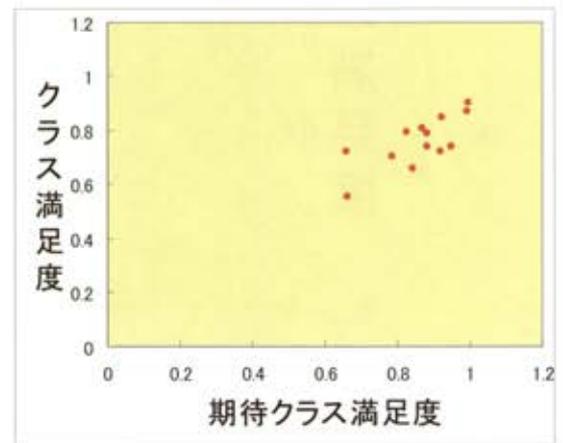


図3-7 社会系

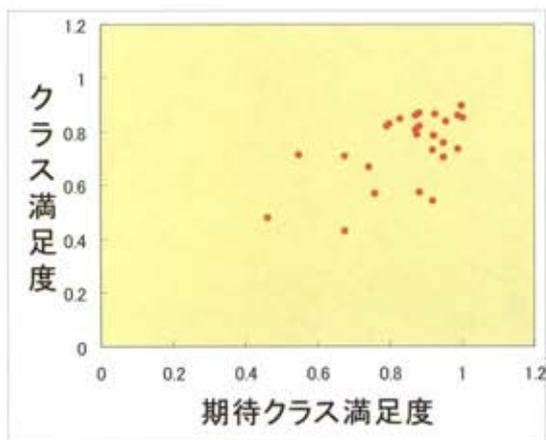


図3-8 自然系

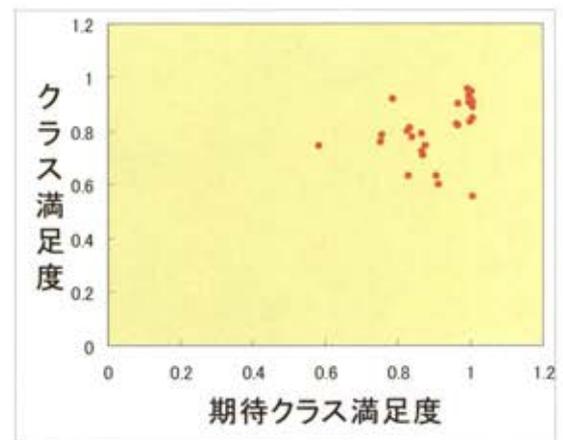


図3-9 総合科目

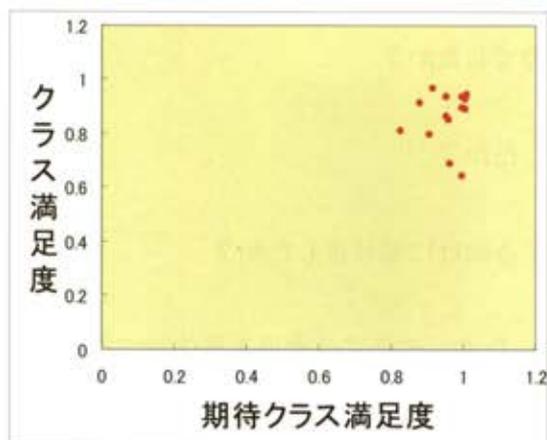


図3-10 主題別ゼミ

[参考資料3] 学生アンケートにおける固有質問を以下に示す。分野区分ごとに異なる質問項目が定められている(第I部参照のこと)。

1) 総合英語

Q10 この授業の難易度は自分にあっていましたか?

(1:大変難しかった 2:少し難しかった 3:適切であった 4:少し易しかった 5:大変易しかった)

Q11 この授業の受講者数は自分にとって適切でしたか?

(1:多すぎた 2:少し多かった 3:適切であった 4:少し少なかった 5:少なすぎた)

Q12 この授業を後輩に薦めますか?

(1:はい 2:いいえ 3:どちらともいえない)

Q13 左の質問項目について、補足があれば具体的に記述してください。(自由記述)

2) 外国語(英語以外)

Q10 この授業で読む・聞く・書く・話すのバランスは、あなたにとって適切でしたか?

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q11 この授業の受講者の数は、あなたにとって適切だと思えましたか?

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q12 この授業の教科書は、あなたにとって使いやすかったですか?

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q13 この授業で、配布資料、板書など、よかった点、悪かった点について、自由に記述してください。(自由記述)

3) 健康・スポーツ

Q10 この授業で使用した施設や用具は満足のゆくものでしたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q11 この授業で指定された教科書は十分役に立ちましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q12 この授業で課されたレポートは授業内容を習得する助けになりましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q13 今後のより良い授業のために、この授業のよかった点、改善すべき点を具体的に書いてください。(自由記述)

4) 情報関連

Q10 Q1～Q9 及び教室や設備を含め、本授業の良かった点や、悪かった点はなんですか。(自由記述)

5) 自然系

Q10 授業のやり方や内容について、どのような点で問題がありましたか？

(1:話し方や声の大きさ 2:板書の仕方 3:特にない) (※複数選択可能)

Q11 授業の難しさはどの程度でしたか？

(1:難しかった 2:普通 3:やさしかった)

Q12 この授業について何かあれば書いてください。(自由記述)

6) 人文系・社会系・主題別ゼミ

Q10 この授業に関する要望や感想などを自由に記述してください。(自由記述)

以上

このアンケートは、教養科目の授業改善に役立てるためのものです。皆さんがいろいろな授業を受けてどのように感じたかを、大学が把握することを目的としています。できるだけ正確な情報が得られるよう、協力をお願いします。集計結果は、関連する教員アンケート結果とともに、大学教育センターの学内専用ウェブサイトに掲載されます。

大学教育センター

回答方法

- 回答票に科目名とシラバスコードおよび教員名を記入してください。シラバスコードについては、マーク欄にもマークしてください。
- 質問は3つのグループから構成されています。グループ毎に答え方が異なるので、それぞれの指定にしたがって、マークまたは記述をおこなってください。
- 質問は3つのグループから構成されています。グループ毎に答え方が異なるので、それぞれの指定にしたがって、マークまたは記述をおこなってください。

シラバスコード

K			
---	--	--	--

授業名

担当者名

授業の基本に係る質問
 回答は、1: はい 2: いいえ 3: わからぬ 4: どちらから選んでもマークしてください。

- ① この授業の初回に、授業計画（シラバス）や評価方法の説明がありましたか？
- ② 授業展開は、おおむね授業計画（シラバス）に沿ったものでしたか？
- ③ この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか？

はい	いいえ	わからない
①	②	③
①	②	③
①	②	③

教養科目に共通の質問
 回答が「はい」の人は1、「いいえ」の人は5を選んでください。どちらか決められないときは、どちらかに近い方を選んで、中間の2、3、4から適当な番号を選んでください。

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか？
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行っていましたか？
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？
- Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法（教員に質問する、自分で調べるなど）で解決するように決めましたか？
- Q7 この授業のための学習（予習・復習など）に十分な時間をかけましたか？
- Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？
- Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか？

はい	いいえ	いいえ
①	②	③
①	②	③
①	②	③
①	②	③
①	②	③
①	②	③
①	②	③
①	②	③
①	②	③

シラバスコード

K			
---	--	--	--

①	①	①
②	②	②
③	③	③
④	④	④
⑤	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥
⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨
⑩	⑩	⑩

科目区分ごとの固有質問

- Q10 この授業の難易度は自分にあっていましたか？
 (1:大変難しかった 2:少し難しかった 3:適切であった 4:少し易かった 5:大変易しかった)
- Q11 この授業の受講者数は自分にとって適切でしたか？
 (1:多すぎた 2:少し多かった 3:適切であった 4:少し少なかった 5:少なすぎた)
- Q12 この授業を後輩に薦めますか？ (1:はい 2:いいえ 3:どちらともいいえ)

①	②	③	④	⑤
①	②	③	④	⑤
①	②	③	④	⑤

Q13 左の質問項目について、補足があれば具体的に記述してください。

このアンケートは、教養科目の授業改善に役立てるためのものです。皆さんがいろいろな授業を受けてどのような感じか、大学が把握することを目的としています。できるだけ正確な情報が得られるよう、協力をお願いします。集計結果は、関連する教員アンケート結果とともに、大学教育センターの学内専用ウェブサイトに掲載されます。

大学教育センター

回答方法

□ 回答票に科目名とシラバスコードおよび教員名を記入してください。シラバスコードについては、マーク欄にもマークしてください。
 質問は3つのグループから構成されています。グループ毎に答え方が異なるので、それぞれの指定にしたがって、マークまたは記述をおこなってください。
 提出方法 授業担当教員の指示(教員間で統一されています)に従ってください。

シラバスコード

K			
---	--	--	--

授業名

授業担当者名

授業の基本に係る質問
 回答は、「1 はい、2 いいえ、3 わからないから選んでマークしてください。」

- ① この授業の初めに、授業計画(シラバス)や評価方法の説明がありましたか? はい 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
- ② 授業展開は、おおむね授業計画(シラバス)に沿ったものでしたか? はい 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
- ③ この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか? はい 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

教養科目に共通の質問
 回答が「はい」の入は1、「いいえ」の入は5を選んでください。どちらか決められないときは、どちらに近いかに応じて、中間の2, 3, 4から適当な番号を選んでください。

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行っていましたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法(教員に質問する、自分で調べるなど)で解決するようにつとめましたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q7 この授業のための学習(予習・復習など)に十分な時間をかけましたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ

科目区分ごとの固有質問

- Q10 この授業で、読む・聞く・書く・話すのバランスは、あなたにとって適切でしたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q11 この授業の受講者の数は、あなたにとって適切だと思えましたか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ
- Q12 この授業の教科書は、あなたにとって使いやすかったですか? はい ← 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 → いいえ

シラバスコード

K			
---	--	--	--

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

Q13 この授業で、配付資料、板書など、よかった点、悪かった点について、自由に記述して下さい。

このアンケートは、教養科目の授業改善に役立てるためのものです。皆さんがいろいろな授業を受けてどのよう感じたかを、大学が把握することを目的としています。できるだけ正確な情報が得られるよう、協力をお願いします。集計結果は、関連する教員アンケート結果とともに、大学教育センターの学内専用ウェブサイトに掲載されます。

大学教育センター

回答方法

- 回答票に科目名とシラバスコードおよび教員名を記入してください。シラバスコードについては、マーク欄にもマークしてください。
- 質問は3つのグループから構成されています。グループ毎に答え方が異なるので、それぞれの指定にしたがって、マークまたは記述をおこなってください。
- 提出方法 授業担当教員の指示(教員間で統一されています)に従ってください。

シラバスコード

K			
---	--	--	--

授業名
担当者名

授業の基本に係る質問

回答は、「1.はい、2.いいえ、3.わからない」から選んでマークしてください。

- ① この授業の初回に、授業計画(シラバス)や評価方法の説明がありましたか？
- ② 授業展開は、おおむね授業計画(シラバス)に沿ったものでしたか？
- ③ この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか？

はい ①
いいえ ②
わからない ③

教養科目に共通の質問

回答が「はい」の人は1、「いいえ」の人は5を選んでください。どちらか決められないときは、どちらかに近い方に応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選んでください。

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか？
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？
- Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法(教員に質問する、自分で調べるなど)で解決するように決めましたか？
- Q7 この授業のための学習(予習・復習など)に十分な時間をかけましたか？
- Q8 教員の声の大きさや発声、話し方は適切でしたか？
- Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか？

はい ①
いいえ ②
③
④
⑤

科目区分ごとの固有質問

- Q10 この授業で使用した施設や用具は満足のものでしたか？
- Q11 この授業で指定された教科書は十分役に立ちましたか？
- Q12 この授業で課されたレポートは授業内容を習得する助けになりましたか？

はい ①
いいえ ②
③
④
⑤

シラバスコード

K			
---	--	--	--

- ① ① ① ①
- ② ② ② ②
- ③ ③ ③ ③
- ④ ④ ④ ④
- ⑤ ⑤ ⑤ ⑤
- ⑥ ⑥ ⑥ ⑥
- ⑦ ⑦ ⑦ ⑦
- ⑧ ⑧ ⑧ ⑧
- ⑨ ⑨ ⑨ ⑨
- ⑩ ⑩ ⑩ ⑩

Q13 今後のより良い授業のために、この授業のよかった点、改善すべき点を具体的に書いて下さい。

このアンケートは、教養科目の授業改善に役立てるためのものです。皆さんがいろいろな授業を受けてどのように感じたかを、大学が把握することを目的としています。できるだけ正確な情報が得られるよう、協力をお願いします。集計結果は、関連する教員アンケート結果とともに、大学教育センターの学内専用ウェブサイトに掲載されます。

大学教育センター

回答方法

- 回答票に科目名とシラバスコードおよび教員名を記入してください。シラバスコードについては、マーク欄にもマークしてください。
- 質問は3つのグループから構成されています。グループ毎に答え方が異なるので、それぞれの指定にしたがって、マークまたは記述をおこなってください。
- 提出方法 授業担当教員の指示(教員間で統一されています)に従ってください。

--	--	--	--

シラバス
コード

K

授業名

授業
担当者名

授業の基本に係る質問

回答は、「1:はい、2:いいえ、3:わからない」から選んでマークしてください。

- ① この授業の初回に、授業計画(シラバス)や評価方法の説明がありましたか?
- ② 授業展開は、おおむね授業計画(シラバス)に沿ったものでしたか?
- ③ この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか?

はい ①
いいえ ②
わからない ③

教養科目に共通の質問

回答が「はい」の人は1、「いいえ」の人は5を選んでください。どちらか決められないときは、どちらかに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選んでください。

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか?
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか?
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行っていましたか?
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか?
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか?
- Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法(教員に質問する・自分で調べるなど)で解決するようにつとめましたか?
- Q7 この授業のための学習(予習・復習など)に十分な時間をかけましたか?
- Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか?
- Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか?

はい ← ① ② ③ ④ ⑤
いいえ → ① ② ③ ④ ⑤

科目区分ごとの固有質問

この授業に関する要望や感想などを右側の自由記述欄に記入してください。

シラバスコード			

Q10 Q1~Q9 及び教室や設備を含め、本授業の良かった点や、悪かった点を教えてください。

回答方法

- 回答票に科目名とシラバスコードおよび教員名を記入してください。シラバスコードについては、マーク欄にもマークしてください。
- 質問は3つのグループから構成されています。グループ毎に答え方が異なるので、それぞれの指定にしたがって、マークまたは記述をおこなってください。
- 提出方法 授業担当教員の指示(教員間で統一されています)に従ってください。

シラバスコード

K			
---	--	--	--

自由記述欄

授業名

担当者名

授業の基本に係る質問
 回答は、「1:はい」,「2:いいえ」,「3:わからない」から選んでマークしてください。

- ① この授業の初回に、授業計画(シラバス)や評価方法の説明がありましたか?
- ② 授業展開は、おおむね授業計画(シラバス)に沿ったものでしたか?
- ③ この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか?

はい	いいえ	わからない
①	②	③

教養科目に共通の質問
 回答が「はい」の人は1、「いいえ」の人は5を選んでください。どちらか決められないときは、どちらに近いかに応じて、中間の2,3,4から適当な番号を選んでください。

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか?
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか?
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行っていましたか?
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか?
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか?
- Q6 あなたは、わからない部分や何らかの方法(教員に質問する・自分で調べするなど)で解決するようにつとめましたか?
- Q7 この授業のための学習(予習・復習など)に十分な時間をかけましたか?
- Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか?
- Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか?

はい	↔			いいえ
①	②	③	④	⑤

シラバスコード

--	--	--	--

科目区分ごとの固有質問

この授業に関する要望や感想などを右側の自由記述欄に記入してください。

Q10 この授業に関する要望や感想などを自由に記述してください。

このアンケートは、教養科目の授業改善に役立てるためのものです。皆さんがいろいろな授業を受けてどのように感じたかを、大学が把握することを目的としています。できるだけ正確な情報が得られるよう、協力をお願いします。集計結果は、関連する教員アンケート結果とともに、大学教育センターの学内専用ウェブサイトに掲載されます。

大学教育センター

回答方法

- 回答票に科目名とシラバスコードおよび教員名を記入してください。シラバスコードについては、マーク欄にもマークしてください。
- 質問は3つのグループから構成されています。グループ毎に答え方が異なるので、それぞれの指定にしたがって、マークまたは記述をおこなってください。
- 提出方法 授業担当教員の指示(教員間で統一されています)に従ってください。

シラバスコード			
K	K	K	K

授業の基本に係る質問
 回答は、「1. はい、2. いいえ、3. わからない」から選んでマークしてください。

- ① この授業の初回に、授業計画(シラバス)や評価方法の説明がありましたか？
- ② 授業展開は、おおむね授業計画(シラバス)に沿ったものでしたか？
- ③ この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか？

教養科目に共通の質問
 回答が「はい」の人は1、「いいえ」の人は5を選んでください。どちらか決められないときは、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選んでください。

- | | | | | | | |
|----|---------------------|------|---|-------|---|---|
| Q1 | この授業に、全体として満足しましたか？ | はい ← | | → いいえ | | |
| ① | ① | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| ② | ② | ② | ③ | ④ | ⑤ | |
| ③ | ③ | ③ | ④ | ⑤ | | |
| ④ | ④ | ④ | ⑤ | | | |
| ⑤ | ⑤ | ⑤ | | | | |
| ⑥ | ⑥ | ⑥ | | | | |
| ⑦ | ⑦ | ⑦ | | | | |
| ⑧ | ⑧ | ⑧ | | | | |
| ⑨ | ⑨ | ⑨ | | | | |
| ⑩ | ⑩ | ⑩ | | | | |
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？
 - Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？
 - Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？
 - Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？
 - Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法(教員に質問する・自分で調べるなど)で解決するようにつとめましたか？
 - Q7 この授業のための学習(予習・復習など)に十分な時間をかけましたか？
 - Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？
 - Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか？

科目区分ごとの固有質問

- Q10 授業のやり方や内容について、どのような点で問題がありましたか？
 回答選択肢(複数選択可): ①話し方や声の大きさ ②板書の仕方 ③特になし ④その他(具体的に自由記述欄に書いてください)
- Q11 授業の難しさはどの程度でしたか？
 回答選択肢: ①難しかった ②普通 ③やさしかった

自由記述欄

シラバス コード			
K	K	K	K
授業名			
担当者名			

Q12 この授業について何かあれば書いてください。

このアンケートは、教養科目の授業改善に役立てるためのものです。皆さんがいろいろな授業を受けてどのような感想を受けたかを、大学が把握することを目指しています。できるだけ正確な情報が得られるよう、協力をお願いします。集計結果は、関連する教員アンケート結果とともに、大学教育センターの学内専用ウェブサイトに掲載されます。

大学教育センター

回答方法

□ 回答票に科目名とシラバスコードおよび教員名を記入してください。シラバスコードについては、マーク欄にもマークしてください。
 ○ 質問は3つのグループから構成されています。グループ毎に答え方が異なるので、それぞれの指定にしたがって、マークまたは記述をおこなってください。
 提出方法 授業担当教員の指示(教員間で統一されています)に従ってください。

シラバスコード

--	--	--	--	--	--	--	--

K

授業名

担当者名

授業の基本に係る質問
 回答は、1:はい 2:いいえ 3:わからないから選んでマークしてください。

- ① この授業の初回に、授業計画(シラバス)や評価方法の説明がありましたか?
- ② 授業展開は、おおむね授業計画(シラバス)に沿ったものでしたか?
- ③ この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか?

はい	いいえ	わからない
①	②	③

教養科目に共通の質問
 回答が「はい」の人は1、「いいえ」の人は5を選んでください。どちらか決められないときは、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選んでください。

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか?
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか?
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行なったと思いますか?
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか?
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか?
- Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法(教員に質問する・自分で調べるといった)で解決するようにつとめましたか?
- Q7 この授業のための学習(予習・復習など)に十分な時間をかけましたか?
- Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか?
- Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか?

はい	←	→	いいえ	
①	②	③	④	⑤

科目区分ごとの固有質問

- Q10 この授業は総合科目として相応しいものだと思いますか?

はい	いいえ	わからない
①	②	③

自由記述欄

Q11 この授業についての感想を、例をあげるなどとして具体的に書いてください。

教養科目推奨授業選定の経過及び結果

茨城大学教養科目の推奨授業表彰

茨城大学では、教育上の多大な努力や優秀な教育技術等が認められる教養科目を推奨授業として選考し、担当した教員を学長が表彰することとしている。平成 21 年度開講の全ての教養科目からの推薦を受けて、推薦書、受講者の成績、学生による授業評価、その他の根拠資料に基づいて審査した結果、2 科目が推奨授業として選考された。そして6月11日に学長表彰式が行われ、表彰を受けた教員には表彰状と特別教育研究費が配分された。

推奨授業科目は以下の通り。一つは「物理学実験基礎」で、担当は吉田宏二准教授(大学教育センター)、榊 守准教授(教育学部)、藤原高德教授(理学部)、栗原和美教授(工学部)、非常勤講師 2 名の7名。この科目は、高校時代に物理実験を十分に経験してこなかった学生向けの基礎実験科目である。実験項目を工夫して、受講生が物理学実験の新鮮さ、楽しさを感じられるよう、同時に説明講義が難しくなりすぎないように適切な配慮がされており、ほとんどの学生が初めての物理実験であるにも関わらず、学生アンケートでは高い満足度を獲得していた。

もう一人の表彰対象科目は「総合英語」で、担当教員はジョイス・カニンガム教授(人文学部)である。この科目は「総合英語」の中でレベル4にあたり、特に発表能力の育成を目指したレベルクラスであり、ジョイス教授は、豊富な経験をもとに学生に自信を持たせ、意欲を引き出す授業を展開し、学生の高い満足度を獲得した。

学長表彰式のあと、教育担当副学長や大学教育センター副センター長を交えて懇談し、大学の講義について意見の交換を行った。ジョイス教授からは、良い授業の構築には、学生を respect することや学生の誤りに過度に注意を与えず、自身で気づくようにし向けることなどが必要との示唆に富んだ発言があった。

これらの授業には参観日が設定され、以下の日程で実施された。

- (1) ジョイス・カニンガム(人文学部教授) 「総合英語」
平成 22 年 12 月 2 日(木) 1 講時 「レベル3」 教室 人文学部 C 棟 2 階 205 教室
- (2) 栗原和美(工学部教授) 「物理学」
平成 22 年 12 月 6 日(月) 5 講時 「物理学実験基礎」 教室 理学部 C 棟 1 階 140 教室



ニューズレター「ローザ・ブルムラ」の軌跡



出会いを力に

副学長(大学改革等) 小野 義 隆



茨城大学に入学した皆さんにとって、桜花爛漫のなかでの晴れ晴れとした気持ちは、きっと忘れられない思い出となるでしょう。皆さんは、新しい学びの場で、今まで以上にたくさんの人々と出会い、これまでに接することのなかった様々な学習の領域を知ることには大きな喜びと期待を抱いているのではないのでしょうか。今までとは異なる環境の中で出会う、自分とは違った考えや行動をする人たちに新鮮な共感をもつこともあるでしょう。いっぽうで、違いに戸惑い、避けてしまうこともあるでしょう。新しい学習の中で初めて出会う自然現象にも、文学作品にも、絵画や音楽にも、その素晴らしさに素直に感動できることもあるでしょうし、ただわけが分からずやり過ごしてしまうこともあるでしょう。

これまで知らなかった人々や自然の事物や芸術作品などに出会ったときの、私たち一人一人の反応はみな異なります。なぜかという、出会いは個人的なものなのです。一人一人のこれまでの生活や学習の中で身に付けてきた知識や感性によって、出合いが感動的なもので、自分自身の新たな力の創造につながることもありますし、そのようにならないこともあります。出合いは個人的なものですので、出合いを自分にとってどのように意味づけるかということについて、他の人と比較して良いとか悪いとかを言うことはできません。しかし、誰にも共通して言えるのは、自分の興味や関心にしたがって、ひたすら知識を蓄積し感性を磨くことによって、出合いを素晴らしいものとしてとらえ、自らの大きな力につなげることができるということではないでしょうか。

分野を問わず優れた研究者は出会いを力に成果を上げてきたと言ってよいでしょう。出合いは誰にも訪れるものですが、その出合いを重要なものと直感できる知識あるいは出合いに感動できる感性を十分に持ち合わせている人だけが、その出合いを力にすることができたのでしょう。多くの科学的発見をし、近代微生物学の礎を造り上げたパスツールは、1854年にリール大学での講演で「科学研究の領域では発見のチャンスは準備された者にだけ訪れる」との名言を残しています。パスツールは自然と人に誠実に臨み研究に没頭し、研ぎすまされた感性と体系だてた膨大な知識を持ち合わせていたから、偶然の出会いを偉大な発見にすることができたのでしょう。

パスツールのことばは自然科学にだけ適用できるというものではありません。どの分野の誰もが等しく出合い＝発見のチャンスを持っているはずで、それを力にすることができるか否かは、不断の学習を通じての知識の体系的な獲得と感性の磨きあげにかかっています。

ローザ・ブルムラ
第40号
(平成22年度4月発行)

目次

出会いを力に	1
大学教育センター教員あいさつ	2
水戸キャンパス便利帖	4
小特集・「総合科目へようこそ」	6
お知らせ・学生の声	8

大学教育センター教員あいさつ

単位とは何か

森野 浩 センター長

皆さん、ご入学おめでとうございます。最初の履修ガイダンスで聞くキープレズの一つは「卒業に必要な単位は124単位（教育学部では125単位）以上である」という履修基準でしょう。単位は、ある科目について一定時間学習し、そしてその科目について一定の成績を取めたときに認められます。国の法律で45時間の学習で1単位と決められています。これを基準に大学4年間で必要な学習時間を通常の講義で大ざっぱに計算してみましょう。124単位を4年間で均等に学習するとすれば、1年間に31単位、そのために必要な学習時間は1395時間、1年の学習期間を30週とすれば毎週46.5時間、一週を5日とすると毎日9.3時間、の学習が必要となります。さてこれはあくまで一つの思考実験です。実際には、単位制度の運用は弾力的になっています。1単位の学習は15時間の大学での講義と30時間の予習・復習時間（自習学習）となっていますので、大学の講義で拘束される実時間は上の計算の三分の一となります。また、90分の授業を2時間として計算します。これは、自主的な学習の推奨や、講義の教育効果を考慮した運用制度といえます。

もともと全ての科目が必修であれば単位制度の必要はありません。履修科目の選択を可能にした代わりに一定の基準を設ける必要がでてきて、単位制度が取り入れられたということです。このように大学の制度は自由な学習を保障するために設けられていることが多いのです。

大学へようこそ

佐藤和夫 副センター長（企画実施部長）

本意であったにせよ、不本意であったにせよ、入学したばかりの大学は勝手によくわからず、ときどき、冷や冷や、感心したり、あきれたり、しかし退屈はしない。あれこれ何とか乗り切っているうちにやがて黄金週間を迎える。ほっと一息。だがこれがくせ者だ。はじめの新鮮な気持ちは失せ、それは二度と戻ってこない。それまでの「あばたも笑顔」が「笑顔もあばた」になってくる。これからが本当の大学生活が始まる。単位の定義、準備に2時間、講義2時間（実際は90分を2時間にみなしている）、後片付けに2時間、これで2単位だ。でも好きな科目ならそんなものなどどうということはない。趣味や好きな運動ならなおさらだ。でも過剰なアルバイトや睡眠不足、暴飲暴食は大学生活の大敵。6月の高温多湿でへばってしまう。「授業数は前期と後期にバランスよく分けて受講しましょう」と言われたような気がする。だが先は長い。前期は8月の初めまでである（日立キャンパスは今年に限っ

て例外)。教室のエアコンのありがたさよ。期末試験、レポート作成。ここまで来れば、もう立派な大学生。後七つの学期をこなせば、卒業だ。

1年生の皆さん、入学おめでとうございます。茨城大学へようこそ。快眠快食で元気にキャンパスライフを楽しみ、充実した日々を送ってください。そして十分な成果を上げますように。

大学生生活にチャレンジ!

勝本 真 副センター長（教育点検支援部長）

入学おめでとうございます。

茨城大学は、皆さんの目にはどのように映りましたか？近年、施設改修が進められ、新しい茨城大学の姿が完成されつつあります。このような環境の中で、みなさんは今までとは違った学生生活をスタートさせることとなります。入学直後に、カリキュラムの中から自分に合った授業設計・履修申請など、責任を持って作業を進めなければいけません。特に1・2年生の間は、大学教育センターが中心として行っている「教養教育」を多く受講することとなります。

「教養教育」は、各学部の専門教育に入る前に、幅広い教養を身に付けるために設定された内容であり、様々な授業科目を開設しています。また年々改善を加えながら、日々の変化に対応できるようにしています。

さてこのような環境の中で、充実した楽しい大学生活を送るために必要なものは何でしょうか？知識、友人、健康、体力、思いやり、旅行、バイト…、挙げたらきりがありません。でも4年後には、社会人として第一歩を踏み出すことになるわけですが、その準備期間としては本当に短い時間です。最近の学生は、失敗を避ける意識が強く、難しいことにチャレンジすることが少ないような気がします。二度と戻ってこない時間ですから、悔いを残さないためにも思いっきりチャレンジしましょう！

それでも不安になることも多いと思いますが、その時には「保健管理センター」や「何でも相談室」を活用してください。？

茨城大学新入生の皆さんへ

岡山陽子（企画実施部（総合英語 Level 4））

茨城大学へのご入学おめでとうございます。

「さあ、これからのんびりしよう」と思っている人もいるかもしれませんが、実は、1年生の授業は4年間の基礎となるもので、とっても大切です。サークル活動やアルバイトを頑張ると、どうしても勉強のほうに二の次になってしまいがちですが、授業にはしっかりと出席し、遅刻・欠席のないよう頑張ってください。

ださい。1年生のうちに勉強することを習慣づけると、卒業まで比較的スムーズにいけるようです。

また、初めて一人暮らしを始める人もいますでしょう。食事は元気の素ですから、しっかり食べてくださいね。もし、困ったことがあったら身近な先生に尋ねたり、学生相談室などで相談してください！

英語ができる！第1歩のすすめ

西尾由里（企画実施部（総合英語 Level 3））

英語ができるようになりたい！と思っているみなさん！残念ながら思っているだけでは英語は出来るようになりません。英語ができる第1歩は、まずは、毎回の英語の授業を大切に、その授業での目標を立てて実行してみましょ。次には、1カ月後など短期の目標、最終的にはTOEIC 800点を指すなどの長期の目標設定をしてみましょ。レベル3の授業では、National Geographicの映像を使い、Authenticな英語をテキストやCD-Romを使って、300語のエッセイを書き、プレゼンテーションできる力を養成します。きっと皆さんの目標にかなった英語力が身に着くことでしょ。入試の英語から離れて、やっと自由に楽しみながら英語が学習できる環境を手に入れたのです。さらなる英語熟達者になろうではありませんか。

自分の将来を見つける場所、茨城大学へようこそ！

有田由紀子（企画実施部（総合英語 Level 2））

新入生の皆さん、茨城大学へようこそ！皆さんが受講する総合英語では、様々なアクティビティを通して英語の4技能を身につける授業を展開しています。英語が得意な学生さんも苦手だった学生さんも、英語での活動を楽しんでみましょ。茨城大学には他にも様々な興味深い教科や活動があります。興味のあること、面白そうなことをどんどん学び自分の糧にしていってください。茨城大学での学生生活が皆さんの将来に無限の可能性をもたらすことは間違いありません。様々なことにチャレンジして自分が将来やりたい事を見つけてください。Do your best and you can achieve everything！

英語多読のすすめ

上田敦子（企画実施部（総合英語 Level 1））

茨城大学にご入学おめでとうございます。茨城大学では、総合英語で入学者全員の英語力アップを目指していますが、それ以外にも英語に触れ続けることのできる環境があります。まずは、ぜひ図書館に足を運んでみてください。英語多読用図書のコナーに行き、その品揃えの多彩さを感じてください。1ページ1行程度の気楽に読める英語の絵本から、青少年向けのペーパーバック、ふ厚いHarry Potterのような本まで、「日常の楽しみとして英語と触れ合う」チャンスを作れる本が揃っています。CD

つきのものもたくさんあります。通学時やふと空いた時間に、洋書を開く・英語を聴く習慣を、自分のものにしませんか

学びの原点

吉田宏二（企画実施部（物理））

みなさん、ご入学おめでとうございます。「大切なことは、何も疑問を持たない状態に、陥らないようにすることである。私の成功の秘訣がひとつだけあるとすれば、ずっと子供の心のままでいたことです。」

これは、20世紀最大の物理学者アインシュタインの言葉です。大学では、自ら学ぶ姿勢が問われます。そしてその学びの原点は、疑問を持つことなのです。1つの疑問を解決した後には、新たな疑問が現れるはず。これが学びへの新たな活力になるのです。始まりは些細な疑問で結構です。もし解決できなければ、教員にぶつけて下さい。一緒に楽しく学びましょ！！

“強制的？”読書のススメ

梅原守道（教育点検支援部（数学））

ご入学おめでとうございます。さて、皆さんは今までどれくらい本を読んできましたか？かくいう自分は（恥ずかしながら）中高時代にはほとんど読まず、大学に入ってから「大学生たるもの本を読むものだ！」と希望（野望？）に燃え、たくさん本を手にとりました。でも、有名な文学作品など読んではみるものちっとも面白くなく、ただ「これは読んだ」という肩書き(?)が欲しくて辛くても読み続けていたのを憶えています。そんな読書は本来じゃない！と思われるかもしれませんが。でも今になって、書棚でほこりをかぶっている当時の本たちを見ると、なんだかとても懐かしく、もういどじっくり読んでみたい気持ちで楽しみになってきます。みなさんも、こんな読書はいかがですか？

新入生のみなさんへ

宇野美由紀（教育点検支援部（情報））

春になると学生さんの気分も新たになるのか、見ているこちらも若返る気がします。大学生活の四年間は長いようで短くもあり、また、短いようで長くもあります。学生時代というものは、概してお金はあまりないけれど時間がたくさんあります。やってみたいことや好きなことを適度に試してください。私自身についていえば、学生時代はあまり活動的ではなく、適当に読書をしたり、写真を撮ったり、勉強をしたりしていました。テレビなどでたまに見ますが、自転車で日本横断などということも学生時代なら夏休みに可能ですね。長期の旅行も社会人になると難しいので、学生時代にしておくといいい思い出となるでしょう。

水戸キャンパス便利帖

2010.4

3 IT基盤センター

理学部 S棟 の1~2Fにセンターの施設があります。
1Fにはマルチメディア第1教室, 2Fにはマルチメディア第2教室, 端末室, サイバーメディア演習室, 事務室などがあります。
平日 8:30~18:00

2 共通教育棟2号館

多くの教養科目の講義が行われます。

1F 共通10~15番教室 (14番はCALL教室)	授業時間 第1講時 8:50~10:20
2F 21~27番教室	第2講時 10:30~12:00
3F 30~37番教室	第3講時 13:00~14:30
4F 41~47番教室	第4講時 14:40~16:10
	第5講時 16:20~17:50

1 共通教育棟1号館(東棟)

大学教育センターや学生センター(学務部), 講義室(3F)などがあります。

⑦学生生活課

課外活動・奨学援助・学生寮・授業料免除等に関する窓口

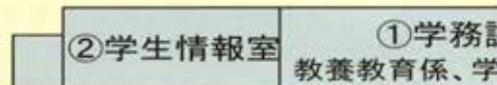
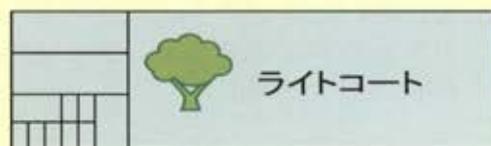
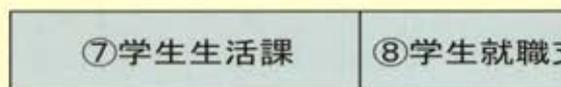
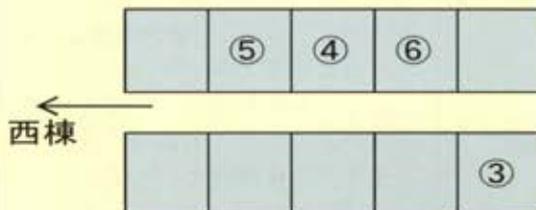
⑧学生就職支援

各種就職説明会
ます。また求人情報の検索がで

⑥履修相談室

履修に関する質問や相談を受けています。(利用の際は学務課まで)

工・農学部教員控室(西棟)
パスにいらしたとき使用します。



共通教育棟1号館(東棟)

⑤茨大なんでも相談室

いろいろな困りごとや悩みごとについて自主的な解決を援助するため、学生相談体制を設けています。
平日 9:30~17:00

④理系質問室(予定)

理系科目に関する質問を受けています。
平日 12:00~13:30
時間と場所が変更になるかもしれません。掲示を確認してください。

③非常勤講師

非常勤講師の非常勤講師義がたくさんあ





4 茨苑会館
1階に談話室及びレストラン&ベーカリーが設置されています。
レストラン&ベーカリー「SHIEN」
レストラン 平日 11:00～14:00 ベーカリー 平日 11:00～17:00

5 保健管理センター
定期健康診断や健康に関わる各種相談、
応急処置等の業務を行います。
平日 8:30～17:15

6 図書館
蔵書は10万冊、共同学習室を備え、夜遅くまで利用可能
休日でも開館しています！
平日8:30～21:45 土日11:00～19:00

7 福祉センター
福祉センター内では、茨城大学生生活協同組合が次の事業を行っています。

(1F)	(2F)
食堂	グリル・カフェ
平日10:00～19:20, 土曜11:00～13:30	平日10:00～16:20, 土曜閉店
コンビニ	書籍部
平日10:00～17:40, 土曜10:00～14:00	平日10:00～17:40, 土曜10:00～14:00
サービスショップ	理容室
平日10:00～17:00, 土曜10:00～14:00	営業時間 平日9:30～16:30, 土曜閉店

パソコン室利用案内

- 1** 総合科学棟S棟 1F
マルチメディア教室1 80台
月～金 08:30-18:00 授業のないとき
- 2** 総合科学棟S棟 2F
マルチメディア教室2 75台
月～金 08:30-18:00 授業のないとき
- 3** 総合科学棟S棟 2F
センター端末室 30台
月～金 08:30-18:00
- 4** 理学部B棟 1F
英語学習室 60台
月～金 08:30-18:00 授業のないとき
- 5** 総合研究棟K棟 1F
情報スペース 12台
月～金 08:50-18:00 授業のないとき
- 6** 理学部C棟 1F*
学生自習室 35台
月～金 08:30-17:30
- 7** 共通教育棟1号館 1F
CALL教室 62台
月～木 13:00-17:50 (ヘッドホン有)
- 8** 共通教育棟 1号館1F
学生情報室 32台
月～金 08:30-18:30
- 9** 図書館 2F*
図書館 48台
月～金 08:30-21:45 土日 11:00-19:00

*持込のノートパソコンによる無線LAN接続も可能
その他、各学部が開放しているパソコン室もあります。

たり、就職相談も行ってい
やインターネットによる求人
こなっています。

2F 留学交流課
留学支援・奨学金・留学情報・国際交流館に
関する窓口
英語多読室(西棟) 近日オープン予定

3F 第1～4講義室

◎自動証明書発行機
(即時交付)

①学務課

教養科目の履修に関する窓口
各種証明書・学割発行に関する窓口(1年次生)
平日 8:30～18:00

②学生情報室

インターネットに接続可能なコンピュータが設置さ
れています。他にも学内でコンピュータが設置さ
れている教室がたくさんあります。(右参照)
平日 8:30～18:30

ター

学外
る講

総合科目へようこそ

総合基礎教育専門部会

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

大学生活がそれまでの学校生活と大きく変わる点は、ひとつには自分の意思で自由に選んだり決めたりすることが圧倒的に多くなることです。授業についても然り、とくに教養教育の授業は、どれを履修するか、基本的には自分で選べます*。それは、自分で決めなければならないと言いかえることもできます。入学早々みなさんはまず、前期の授業に関して短期間でさっそくこの決断をしなければなりません。

総合科目とは

教養教育のなかでも、総合科目の授業はじつにバラエティに富んでいます。そこで、みなさんが授業を選ぶ際の手助けになるように、総合科目の授業について少し紹介しておきましょう。

総合科目は、複数の分野に関わる学際的テーマや特定地域の問題、時事的課題などを取りあげ、総合的にものごとをとらえ、主体的に判断する力を養うことを大きなねらいとしています。分野別教養科目や分野別基礎科目と違って、人文、社会、自然などの分野にはっきり分かれてはいません。約70ある授業は、取りあげるテーマに関わる分野に応じて、一応次の9つの系に分類されています。

物質・生命系科目	表現・言語系科目
認知・数理系科目	身体・行動系科目
環境・政策系科目	生活・福祉系科目
文明・技術系科目	社会・国際系科目
人間・文化系科目	

授業のかたち

同じ系に属する授業でも内容は多様であり、授業者も授業形態もさまざまです。

大部分の授業が行われる共通教育棟の教室の標準収容サイズは約90人です。150人、200人以上収容できる階段教室が使われる場合もあります。今年度は改築を記念して講堂でも1本開講されます。

授業を担当するのはおもに各学部の先生ですが、なかには社会人や専門家（例えば企業人、アーティスト、スポーツ選手）、いうなればその道のプロが講師として教壇にたつ授業もあります。卒業後を意識したキャリア教育や、大学の枠をこえて社会の諸組織や地域との連携のもとに組まれた授業も、総合科目ならではのものです。

ところで、先生の話聞いてノートをとるばかりが授業ではありません。発言を求められたり、学生どうしでディスカッションをしたりする授業もあります。学外の施設を見学したり、ものを製作したり、大学の内外で学生自ら体験的な活動を行う授業もなかにはあります。



推奨授業にも選ばれた「障害者と社会」

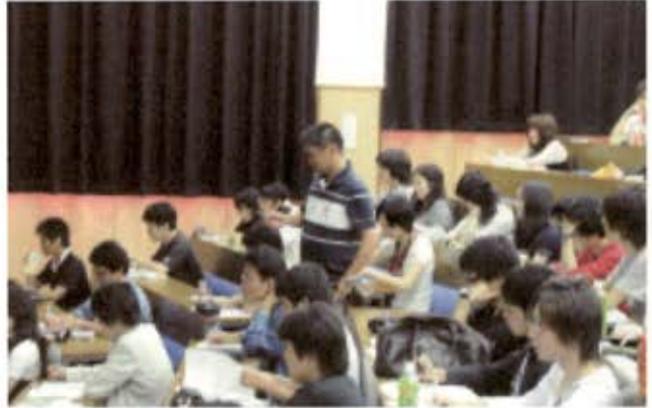


製作中？「ものづくりのすすめ」

*教室の収容人数を超えて履修希望者が集中した場合、抽選が行われます。



ときには先生たちとディスカッション 「サステナビリティ学入門」集中



特色ある集中講義

休業期間や土日などに開かれる集中講義では、通常の授業期間での週1回×15週という形では実施しにくい、集中だからこそできる特色ある授業が行われています。総合では複数の集中講義が開講されています。開講時期については事前に掲示が出ますので、見のがさないようにしましょう。

授業の選び方

総合科目の授業はそれぞれが個性的ですので、とる授業を実際に選ぶ場合、ここまでの話はじつはあまり役に立ちません。履修案内の授業科目一覧には、前述した9つの科目分類ごとに開講される授業題目が載っています。科目分類をひとつの目安として、気になった授業のシラバスを読んでみましょう。ただ、一見自分の専門や関心から遠そうな授業題目でも、シラバスを読んだら意外にも興味が湧いてくることがあります。できれば一つ一つのシラバスに目を通してみてください。数ある総合科目の授業のなかから、きっとあなたがとりたい授業が見つかるでしょう

シラバスは、いくなれば学問、科学の世界への招待状、それをよく読むことが、充実した大学生活を送るための第一歩です。



みんなでサッカースタジアムへ
「アスリートの世界」集中



学生も車いすを体験
「ハンディキャップをもつ人と共に生きる社会」集中

お知らせ

本年度前期には総合科目「**茨城大学の学問を楽しもう**」が、1年次生を主対象として開講されます。自然、科学、環境、文化、歴史、食生活等をテーマに学長や副学長、各学部長らがオムニバス方式で講義を担当します。今回が初めての試みです。今日何が問題か、地域貢献も含め本学がらいつながることが発信されているか等を習得し、学問への興味を高めると共に視野を広めることをめざします。

学生の声

総合科目を受講して

農学部生物生産学科 2年 佐藤 理子

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

さて、今回は総合科目に重点を置いて、大学の授業についてお話させていただきます。ご存知かと思いますが、大学の授業は全て自分で組みます。とは言っても学部ごとに決まっている基礎科目、水戸で開講されている教養科目を皆履修するため、自分だけずば抜けて他と違う時間割にはなりません。取らなければならない最低単位数や取れる最高数もあるので授業のコマは同じ学部の人と大体同じになります。自分で決められるのは、その決まったコマでどんな内容の授業を取るからです。総合科目は

物質・生命系、認知・数理系、環境・政策系、文明・技術系、人間・文化系、
表現・言語系、身体・行動系、生活・福祉系、社会・国際系

と9つもの分野があります。その上、普通の講義型だけでなく授業によっては学外から先生を呼んだり、自分達が学外へ出かけたり、教わるというよりはひたすら本を読んだり等、様々な形式の授業があります。

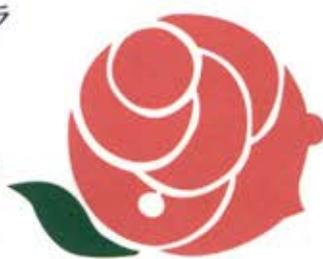
私は前期に身体・行動系の授業をとり、集中講義で環境・政策系の授業を取りました。授業を受け、他の教養科目と違うなと感じた点は、その先生の間接している学問がどのように社会と結び付いているのかを知れることです。決して深くはないけれど、広く、全体的な見方をするきっかけになると思います。私は広くいろいろな先生のお話を聞いてみたく、自分が全く知らない分野、自分の専攻していない学部の先生を選びました。私の取った授業が偶然そうだっただけかもしれませんが、より先生と学生がコミュニケーションをとりながら授業が進み、先生と仲良くなれて色々なお話を聞ける機会が持てました。皆さんも是非様々な分野が揃う総合科目を利用して自分の知らなかった世界を開拓して行ってみてください。

以上お話ししたことは数ある意見の中の一つに過ぎません。履修登録や授業で悩んだ時は、周りの先輩や授業を担当してくださる先生にどんどん相談してみてください。きっといいアドバイスやいろんな考え方に会えることでしょう。まだまだこれからの行動次第でなんとでもなる大学生活を存分に楽しんでください。

編集後記

- 大学では勉強（学問）が本分なのはもちろんですが、勉強以外のことに励むのもまた（勉強と同じくらい？）大事です。バイト、サークル、旅行、恋愛、お酒…（最後のひとつはほどほどに！）。みなさんが、自身の既成概念が壊れるような新しい経験にたくさん恵まれることを祈ります。（梅原）
- 入学シーズンには桜が似合います。その桜も、夏の暑さ・冬の寒さに耐えてこそその美しさです。みなさんも受験を終え、今美しく咲いています。4年後にまた美しく咲くために、これからも日々の努力を惜しまないでください。（吉田）

発行日 平成22年4月/発行者 茨城大学 大学教員センター 水戸市文京2-1-1 029(228)8416(学務課教養教育係)



学生諸君の見解は

学長特別補佐 横 沢 正 芳



私の研究室（宇宙物理）に来る学生に聞くと、テレビも新聞もあまり見ないと言います。それなら、ニュースはどこで知るのか尋ねると、インターネットで分かりますと応えていました。最近、新聞社がまとめた時事問題集が就職活動に向けた対策本として売られています。確かに、ニュースの知識は得られるであろうが、君たち学生の見解はと聞くと、ニュース等で流されている内容がそのまま返ってくる。

私は、テレビを結構よく観ます。その中で楽しみに観ているのがNHKの大河ドラマです。現在は、「龍馬伝」が放映されています。一昨年に「篤姫」が放映されたときには女子学生の間で話題になったと報道されていました。現在、放映されている「龍馬伝」は、主人公が格好良く面白いです。観ていると、土佐藩士の武市半平太のシーンが随分と長く引っ張られました。最近の場面で、龍馬が「気概だけではこの世の中は変わらないぜよ」とのことばになるほどその意味があったのかと分かりました。私たちの世代は、司馬遼太郎著の「竜馬がゆく」（1962年）を愛読しています。その中では、武市半平太との関わりはこれほど大きくはなかったとの印象があります。右上がり成長の時代とは異なり、現在の先行きが不透明な時代での「龍馬」を描くことを制作者は狙っているようです。司馬遼太郎の「竜馬」もヒーローなのですが、歴史的青春群像の中で描かれていると思います。現在制作中の「龍馬」（福田靖脚本）では「龍馬」個人に焦点を当てたドラマのように見えます。

このようなとりとめのない話を研究室に来る学生と交わりたいものと思っています。大学4年間は短いものですが、おそらく君たち人生の中で最も自由に使える時間が豊富にあるときです。この時間を有効に使って社会に飛び立つ準備を整えて欲しいものと思います。

ローザ・ブルムラ
第41号
(平成22年度10月発行)

目次

学生諸君の見解は	1
大学教育センターより	2
平成21年度推奨授業表彰	3
小特集①・「平成21年度推奨授業表彰インタビュー」	4
小特集②・「How to キャリアアップ」	6
学生の声	8

大学教育センターより

あなたの「テキスト(適スト)」はなんですか？

勝本 真 副センター長（教育点検支援部長）

みなさん、大学に入学してから半年が過ぎましたが、生活は落ち着きましたか？入学する前は、高校の授業、部活動、塾など決められた時間で毎日を過ごし、自由な時間は少なかったのではないのでしょうか。入学後は、ガイダンス、履修登録、多彩な講義、一人での生活など、自分で判断し行動することが多くなり、戸惑うことが多かったと思います。それでも半年が過ぎて、少しは落ち着いて来た頃でしょう。そこで、4年間の大学生活のシナリオを考えてみてはどうでしょう。

前期の授業は、自分の興味や友達・先輩の意見などを基準にして申請し、受講した人も多かったのではないのでしょうか。これからも同じように考えて過ごすこともできますが、新しい自分を発見するために、ちょっと違った基準で選ぶことにチャレンジしてみようはどうでしょう。新しい知識や物の見方など、新しい自分作りには欠かせない要素となるはずです。ぜひ後期は、チェンジするための一歩を踏み出してみましよう。

さて授業だけではなく、それ以外にもどんどん新しい世界に踏み出してみようはどうでしょう。大学時代は、それができる貴重な時期です。新しい事にチャレンジする時には、今までにない経験をするのですから、常に不安がつきものです。しかしこの経験が皆さんを大きく育てていきます。特に成功体験だけでなく、失敗体験の方が大きなものになると思います。最近では、失敗を恐れて無難に生活を送っている学生が多く、この時期にしか経験できない貴重な機会を見逃しているような気がします。

現在の社会は、「ストレス社会」だと言われるぐらい、ストレスが蔓延しています。しかし本当にストレスは、すべて悪者なのでしょうか。人間の身体は、過剰なストレスに対して、様々変調を起こしてしましますが、適度なストレスに対しては適応していきます。高校時代に、何時間も受験勉強をしていた頃、毎日長い道りを徒歩や自転車で通学していた時など、身体はしっかり適応してすごい身体になっていました。し

かしその環境が変わって楽な環境になると、逆に適応して身体はだんだん弱くなっていきます（受験勉強していた時間だけ、現在は集中して勉強できますか？）。つまり皆さんの身体は非常に賢く、毎日の生活に密接に関係してバランスを取っています。ですから、適度なストレス→適スト（テキスト）は、皆さんにとって必要な要素だと思います。

これからの大学生活では、新しい事にチャレンジして、どのような「適スト（テキスト）」を見つけるかがポイントになります。ボランティア活動、部活動、同好会活動など授業以外での様々な活動も積極的に参加してみてください。自分とは全く異なったタイプの人々との付き合いや、生活の時間が制限されるなど、様々なストレスが掛かってきますが、それを解決していく過程が貴重な体験になります。限られた時間の中でやりくりの仕方を覚えたり、相手の良い所に目を向けながらコミュニケーションを取り、みんなで仕事を解決していく過程で、素晴らしい能力を身につけることができます。最近の就活のキーワードは、「コミュニケーション能力」です。集団と積極的にかかわりながら、自分自身の特徴をしっかりと出して行くかが、特に問われています。

さあ、これからの4年間で自分のテキスト（適スト）とうまく付き合いながら、自分自身の「普通」をしっかりと見つけて、充実した大学生活を送ってください。



平成 21 年度推奨授業表彰

推奨授業表彰制度は、年度毎に教養科目の中から推奨授業を選定し、担当教員を表彰することによって、授業の改善及び教育力の向上を図ることを目的に、2001年度に制定されました。

推奨授業は、専任教員が担当するすべての正課授業を対象とし、「推奨授業表彰候補者推薦書」、「学生による授業評価」、「当該授業の成績評価」、「シラバス」、「表彰候補者の面接」などに基づいて教育上の多大な努力や優秀な教育技術等を総合的に評価し選定されます。

平成21年度推奨授業には、次の2つの授業が選定されました。

「物理学実験基礎」	吉田 宏二 先生	(大学教育センター)
	藤原 高德 先生	(理学部)
	榊 守 先生	(教育学部)
	栗原 和美 先生	(工学部)

授業概要：基礎的な実験と講義を通して、自然現象（特に物理現象）への理解を深め、現代科学や近代技術の基礎となる自然の仕組みを理解するとともに、物理実験の基本事項を知る。授業では、まず物理実験全般に関わる考え方や留意点について解説し、次にいくつかの物理現象（「力学」「振動・波動」「熱・仕事・エネルギー」「電気・磁気」「物質・原子」）を選び、それに関わる基礎的な実験を行うとともにその実験の意味を演習的にえる。

「総合英語 レベル4」 ジョイス イサベル カニングム 先生 (人文学部)

授業概要：The aim of this course is to give students an opportunity to learn and practice language by exploiting individual/group tasks and completing language learning projects. Students will develop advanced conversation skills and participate actively in problem solving tasks/projects with an emphasis on production skills.

*授業概要は平成21年度教養科目シラバスより抜粋



平成21年度推奨授業の表彰式 (H22. 6. 11 学長室において)
一番左から白石副学長、勝本副センター長、榊守先生、吉田宏二先生、池田学長、
ジョイスイサベル カニングム 先生、森野センター長、佐藤副センター長

平成21年度推奨授業表彰インタビュー

平成 21 年度推奨授業表彰を受けられた「総合英語 レベル4」のカニンガム先生（人文学部）、「物理学実験基礎」の吉田先生（大学教育センター）にお話をうかがいました。

JOYCE Isobel Cunnigham
先生（人文学部）
「総合英語レベル4」



受賞おめでとうございます。
先生が総合英語の授業で心掛
けていらっしゃるポイントを
教えてください。

Well, first of all, in my English language class, I feel it is important to emphasize a communicative atmosphere where students are comfortable practicing their English. 高校まで文法と語彙を教え込まれてきた人たちが多くので、英語って楽しい、と思ってもらえる目新しさを出したいんです。そのために授業では多少役者みたいな気持ちで臨んでいます。I need to be really 'up' and genki! でも、私だけが頑張るんじゃなくて、学生さんもそれにつられてノッてもらい、お互いがついコミュニケーションをとりたくなるような。そういう雰囲気を作ろうとしています。

総合英語は1講時にもありますから、そこでしょうばなからワクワクして授業に来てもらうのはある意味至難のわざです。I think I need to respect my students. 朝から出てきてもらうためには自分も早めに教室に顔を出して、機材をちゃんとセッティング始めるようにしています。

確かに、総合英語は1講時と2講時なので、朝から自分にネジをまくのは先生も学生も大変ですね。

それから、クラスではお互い知り合うチャンスを多く作るようにしています。小さなペアやグループ同士にし、お互い顔が見えるように座ってもらいます。それに、木曜の1講時は特に、水曜でクラブ活動をやった後の学生が多いので、頭をリフレッシュしてもらう意味もありますね。I get my students to change their pairs about every 10-15 minutes in order to get the oxygen flowing to their brains.

先生は、シンプルな英語で学生にわかりやすい指示を出していらっしゃるなあ、といつも思うのですが。

特に課題などに関する指示は、わかってもらえないと学生が損をしますからね。また、わからないことはちゃんと確認するなり、質問するなり、してもらいた

いと思っています。日本の学生はわからないことをあまり顔に出さないでしょう。それがいい学生像だと思ってますよね。A quiet student is a good student, they have learned in high school but if they don't ask questions, I can't know what they don't understand. 日本人の先生は学生の様子を見てわかるのかもしれませんが、私は、わからないことはわからないと表現する文化で育ってきたので、アピールしてもらわないとわからない。質問されないと、みんながわかっているだろうと思って進んでしまいがちです。ですから、なるべくわからないところはわからないと言ってもらいたいし、少なくともお互いに確認できる時間をとって、学生同士で不安を解消できるようにしてもらいます。

When focusing on speaking and listening, I want students to understand that it is NOT a grammar exercise and so they can make mistakes. 特に文法にフォーカスしている時でなければ、多少間違ってもいいから「何か話す」こともとても大切です。でないと、実際に英語を使う場にまごまごして、必要なコミュニケーションがとれなくなってしまう。文法的に正しいだけが重要なことではないのですが、間違ってもいいから考え込まずに話す、ということに慣れてもらうには時間がかかりますね。何か月も言い続けるようにしています。just 'do it' が必要な状況もありますからね。

それはとても大切なことですね。高校まで、英語はちょっとでも間違ったらいけない、と思っていた学生にとっては大きな意識改革です。

ですから、間違いを直すときにもかなり気を遣っています。I don't like saying "No, that is not right." ただ否定することが必要なことではなくて、学生が陥りそうな間違いに気づいて、その間違いをしなくなるようにすることが一番大事なことです。I praise them when they have done something well. 自信を持たせながら、うまくいったときには大いに褒めるようにしています。

では、学生にメッセージをお願いします。

Come to class and enjoy learning English. Try to use every chance you can to participate actively in groups or with a classmate. Use your English whether it is right or wrong so that your English will

get stronger. You can learn a lot from your classmates. Take risks. Be more spontaneous in expressing yourself. Keep a vocabulary log and review for 5-10 minutes every day or every other day.

Use the words actively in conversations in class. Meet new people in the class and make new friends. You are entering a new world. Come and be part of it!

吉田 宏二先生
(大学教育センター)
「物理学実験基礎」



4名を代表して吉田宏二先生
にお話を伺います。まずは受
賞に関するご感想を聞かせて
ください。

正直なところ、意外に思っ
ています。ラッキーと言える部分もあるのかなと
(笑)。授業アンケートの結果が良かったということ
ですが、教え方うぬぬが評価されたのではなくて、
単に学生が一生懸命実験をやって、その実験が面白
かったと。そういうことではないかと思えますよ。

それは少し謙虚過ぎませんか？(笑)

前年と比べてよりわかりやすいように内容を変えた
とか、やり方を工夫した、というのは確かにあります
が、一番は人数がちょうど良かったというのがありま
すね。今回は25名くらいでした。前年は40名を超える
くらいで、実験装置をあまりさわれない学生も増えて
きます。また人数が少ないと目が行き届きやすく、手
厚い指導ができる。そういうことが好評価につなが
たのでしょうかね。

授業の様子をきかせてください。

私は力学実験を担当していたのですが、担当者によ
ってやり方は違います。私の授業では2人1組にな
って、高校の教科書に載っているような基本的な実
験をします。他には、例えば、ひとり一人がモーター
工作し、その回転数を競う「コンテスト」もやってい
ます(栗原先生)。学生はそういったイベント的なこと
の方が面白いのかもしれませんが(笑)。

教養の実験科目ですが、どんな学生さんが多いで
すか？

やはり工学部と農学部の学生が多いですね。半々く
らいです。前は人文学部の学生もいたんですよ。物
理はやったことないけど興味があると。

それは少し驚きです！学部を問わず参加歓迎、とい
うことですか？

気持ちとしてはそうですね。ただ、シラバスでは
「一度何らかの形で物理をやったことがある人」と制限

を付けています。もちろんこれはやる気次第でどうに
でもなります。

前提として理論的な知識があった方がいいと？

もともと実験というのは、ある程度は座学とセット
でないと意味が薄いわけです。例えば、力学で言えば
重力加速度 $g=9.8\text{m/s}^2$ というのはよく知られているこ
とですが、それを実験で定量的に求めたかったとしま
す。授業では実験の手法がある程度指定されていて、
その通りにやればそこそこの値は実現できるかもしれ
ません。でも、値が実現できるだけでは意味がないと
思っています。本当はその裏にある理論というか理屈
を理解してもらって、それが目の前で実際に本当に起
こるんだ、ということを感じてもらいたいわけで
す。

それがないと、あまりにも出てきた数値に目を向け
すぎてしまう場合もあるんですよ。実験では、妙な数
値が出てきたらそれはそれで何がおかしかったのかを
考察するのが大切だと思います。極端な話、9.8と
びったり出たからといって、果たしてそれがいい実験
だったのか？と言えるわけです。どこかで計算間違い
したのかもしれないし、ミスが重なってそうなったの
かもしれない。

残念ながらすぐには喜べないわけですね。

実験ですから何かのエラーが起こるのは当然です。
大事なのは、そのエラーによってどれだけ定量的な意
味で結果が左右されたかを説明しようとすることで
す。例えば数値が予定より小さくなったと、だったら
あるエラーが数値を小さくするように働いたはずだ
と、それを調べるとそのエラーを定量的に意味づけで
きる。そういったところまで考えられるようになって
ほしいと思っています。

最後に、学生さんへのメッセージをお願いします。

高校でも「実際にやってみる」という機会があまり
なかった人は多いでしょう。習った結果と実際の現象
がこういう風に合致するんだ、と実感することで興味
が強くなったり、新しく何かに気付いたり、とにかく
学習のきっかけにしてほしいし、きっとそうなると思
います。実験と理論のいったりきたりが物理の歴史そ
のものでもありますからね。とにかくよく考えて、そ
の考え方を自分なりにものにしてほしいですね。もち
ろんこれは物理に限った話ではありません。

How to キャリアアップ

学生就職支援センター長 大西和榮

大学は学生さんが主役です。最近の新聞には、どこそこの大学のナンチャラ学生グループが、どういう活動をしたといったことが盛んに報道されています。茨城大学においても、社会と繋がる大学の行事に積極的に関わる学生さんの姿がみられます。図1は、本年7月24日に開かれた茨城大学オープンキャンパスでの一コマです。赤いシャツを着た在学学生が、キャンパスを訪れた高校生や保護者の相談に熱く答えています。図2は、就職ガイダンス教室の前に立ち、先輩内定者として3年生に就職体験を話す学生就職活動支援サークルBridge代表の長谷川貴広君（理学部4年）と二人の副代表です。図3は、水戸黄門祭り市民カーニバルに参画した茨城大学パレードに加わり、市民に華麗な踊りをアピールした学生さんの一団です。大学名の入った揃いの‘はっぴ’が映えています。



図1. キャンパス公開での支援学生



図2. キャリアガイダンスでの支援学生



図3. 水戸黄門祭り市民カーニバルで踊る学生

今や学生さんは、授業外の社会活動にも果敢に打って出ております。就職すると云うことは、社会人になることです。社会人になるためには、社会人基礎力を身に付ける必要があります。授業での学修と社会との関わりを通して社会人基礎力が生まれます。社会との関わりなく卒業した入社後に、いきなり社会人基礎力は生まれません。近年、就職活動（就活）は厳しいと云われます。就活が厳しいと云うことは、会社も厳しいと云うことです。かたや、大学はこの厳しさにどう対応しているのでしょうか。会社は新入社員に社会人基礎力を施す余裕はありません。入社試験・面接をとおして社会人基礎力を身に付けた学生さんを拾い上げるのです。

就活とは仕事を選ぶこと、会社を選ぶことです。江戸時代までと違って今は自由に選ぶことができます。自由に選べるといっても、実は皆さんは会社から選ばれる立場でもあることを頭に入れて置きましょう。これまで皆さんが過ごした学校時代は、成績が良ければ選ばれました。会社は、成績が良いだけでは皆さんを選びません。成績が良くても自社にマッチしなければダメです。

自由に会社を選べるといっても、自由に仕事を選べるといっても、会社や仕事を知らなければ選びようがないですよね。でも、会社や仕事を教えてくれる授業は、わずかな例外を除いて大学にはありません。どんな例外が

あるかシラバスで調べてご覧下さい。では、どうしたら選ぶことが学べるのでしょうか。答えは「自分で学ぶ」です。就活を通して学生さんは確かに成長します。もし、学び方がわからなかったら、自分の身近な就職担当の先生に相談して下さい。あるいは「学生就職支援センター」に来て下さい。「学生就職支援センター」が果たして使えるセンターか、使えないセンターかは、あなたの利用仕方次第です。

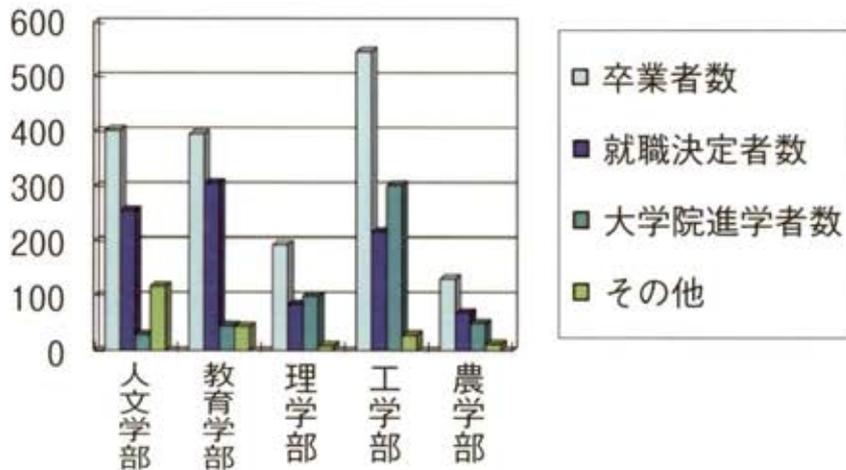


図4. 学生の進路状況 (平成21年度)

図4は、茨城大学の平成22年3月卒業生が選んだ進路です。この進路結果が生まれるまでには、大学1年生からの長期に亘る学生さん個人の努力と大学の準備がありました。大学1年生から準備することに驚くかも知れません。なぜ、就活はこんなに長いのでしょうか。それは、就活については、法整備が未だなされていないからです。

一方、日本での「キャリア教育」は小学校から大学まで最近ようやく法整備されました。□教育基本法第2条(教育の目的)第2号:個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自立の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと(下線部は筆者による。平成18年の改正で下線部が付け加わった。)□学校教育法第21条(義務教育の目標)抜粋:職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと(平成19年の改正)。□平成21年3月改定の新学習指導要領では、「(抜粋)【高等学校】生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること。」□平成22年2月の大学設置基準等の改正では、「(抜粋)大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」…以上はお役人言葉ですので、読みにくいかもしれませんが、若者の生涯に寄せ、国の将来を愁う気持ちが表れていますね。

終わりに、なぜ、就職するのかを考えてみましょう。答えは一つではありません。あなたには、あなたの答えがある筈です。次の言葉も一つの答えです。

『民の道たるや、恒産有る者は恒心有り、恒産無き者は恒心無し。』

(『孟子』藤文公・上)【大意】一般庶民に共通しているのは、安定した収入があれば心も落ち着き、安定した収入がなければ心も落ち着かないものだ。「恒産=生業」、「恒心=安定した正しい心」の意。

卒業は大学にとってのゴールでした。就職は卒業する学生一人一人の人生のスタートと云われてきました。ここに至って、就職は大学にとってのゴールと云われかねないムードになっています。好いスタートとゴールが切れるために、密度の濃い大学時代の一日一日を送りましょう。

学生の声

就職活動に関する先輩からのアドバイス 「1年生のこの時期の過ごし方」

人文学部人文コミュニケーション学科
4年 市田 尚子

理学部理学科生物科学コース
4年 竹谷 知幸

私は地元の銀行の一般職に内々定をいただきました。自分の就職活動を振り返ってみると、不景気の影響もあり予想していたよりも長期化し、また厳しかったです。1年生の皆さんに1つアドバイスをさせていただくとしたら、充実した大学生活を送ってほしい、という一言に尽きます。

将来就きたい職業が決まっている人は、時間のある今の中に資格試験を受けたり、また関係のある業種でアルバイトをしてみるのもいいでしょう。自分がどんな仕事にしたいのかわからない人は、学業はもちろん、アルバイト、サークル、部活、ボランティア、海外旅行…なんでもできることはあります。自分らしくないな、と思うようなことにチャレンジするのいいと思います。小さなことが意外自己アピールとなることがあるからです。

就職活動はまだまだ先のことだと感じるでしょうが、本当にあっという間なので、限られた時間を大切に、自分なりにとにかく一生懸命取り組みれば自信を持って就職活動ができると思います。

私が1年生の後期にやっておくべきだと思うことは、まずはしっかりと大学の単位を取っておくことです。3年生の後期から企業の合同説明会やエントリーなど、本格的に就職活動が始まりますが、その時までにはちゃんと単位を取っていると、志望する業界、企業についてじっくり考え、志望企業の選考にもある程度余裕をもって挑むことができます。

また、業界、職種、企業についてインターネット、書籍などを利用して調べることも大切です。私の経験では、この業界、企業研究に最も時間がかかりました。まだ1年生で就職活動に対して実感が湧かないとは思いますが、早目に調べておくと3年生後期に慌てることもないかもしれません。私は3年生後期になってから合同説明会に出たりして企業研究を始めましたが、遅かったなと思いました。他にも自己分析とかSPIなどの試験対策がありますが、1年生のうちではなくても早目にやっておくと良いと思います。就職活動では何でも早目に行動した方が楽になります。

編集後記

- 秋ですね！おいしいものがたくさん！この時期にたくさんおいしいものを食べて、栄養をとってくださいね。特に独り暮らしのみなさんは栄養が偏ったり不足しないように（すっかりおかんモードです）。（上田）
- 今夏は暑かったですね！あまりの暑さで精気がまだ回復していない、そんな人も多いのではないのでしょうか？そんなあなたに（わたしに）茨城のアンコウを！おいしい季節が来ました。まだの人はぜひご賞味を。（梅原）
- 地球温暖化のせいでしょうか？グリラ豪雨、記録的な猛暑の今夏、皆さんはどのように過ごしましたか？最近はずいぶん過ごしやすくなりましたが、まだその影響で疲れが…。これからはどんな異常気象が待っているのでしょうか？暖冬なら許せるかな。（^v^）（吉田）

発行日 平成 22 年 10 月 / 発行者 茨城大学 大学教育センター 水戸市文京 2-1-1 029(228)8416(学務課教員教育係)

理系質問室の活動報告

平成 22 年度大学教育センター学習支援活動報告 理系質問室

茨城大学 大学教育センター 理系基礎教育部

理系基礎教育に関する学生の学習支援の充実を目的に、大学教育センター理系基礎教育部が中心になって、「理系質問室」を平成 21 年度より開設している。「理系質問室」では、理系基礎科目に関する質問や学習相談の機会を学生に提供している。平成 22 年度の「理系質問室」での学習支援活動の概要について報告する。

2. 平成 22 年度「理系質問室」の概要

場所：共通教育棟 2 号館 14 教室

日時：(前期) 火・水 12:00～15:00

(後期) 月・火 12:00～13:00 木・金 15:30～17:00

担当者：大学教育センター理系基礎教育部 教員 2 名 (各回教員 1 名の分担担当体制)

対象：すべての理系の教養科目 すべての茨城大学生

3. 平成 21 年度との変更点

最も大きな変更点は、実施場所を共通教育棟 1 号館 130 室から、講義棟である共通教育棟 2 号館 14 教室に移したことである。これは学生の目に付きやすい場所で実施することによる利用促進を狙ったものである。同じような目的で、前学期には 1 開室あたりの時間を長くし、また後学期には夕方時間帯の開室を新設した。

4. 利用状況

平成 22 年度はのべ 171 名の利用があった。詳細を以下の表にまとめる。

前学期

	開室日数	対応人数	平均
4月	4	18	4.50
5月	6	18	3.00
6月	10	30	3.00
7月	9	20	2.22
8月	2	4	2.00
	31	90	2.90

後学期

	開室日数	対応人数	平均
10月	10	0	0.00
11月	16	31	1.94
12月	13	16	1.23
2011年1月	13	19	1.46
2月	6	15	2.50
	58	81	0.00

内訳

内訳	人数	質問科目	件数
工学部	74名	線形代数	17件
農学部	9名	微積	23件
理学部	7名	力学	28件
計	90名	物理化学	8件
		など	

内訳

内訳	人数	質問科目	件数
工学部	76名	ベクトル解析	27件
理学部	4名	線形代数	15件
農学部	1名	微積	8件
計	81名	電気回路	8件
		物理化学	4件
		など	

初年次学生の欠席者調査報告

初年次学生の欠席者調査報告

大学教育センター副センター長

勝本 真

今年度より、初年次学生の学習支援の取り組みの一つとして、前期の早い段階で大学生活や大学の勉学でつまずき、授業への参加が悪い学生の調査を行った。

前期、初年次学生全員が必修として受講する「総合英語」科目の教員に協力を得て、5月末までの間に5回以上の欠席があったものを教養教育係に報告する形で実施した。その結果は下記の表とおりである。

平成 22 年度各学部の欠席者数

人文学部	教育学部	理学部	工学部	農学部
1	3	3	15	4

調査結果をもとに、各学部の担任・教務担当と連携しながら対応した。今後このような学生が増えて行くことが十分考えられており、早期の対処が必要だと考えている。

初年次教育支援は、第 2 期中期計画で本学があげている重要な項目の一つであり、この調査は継続して行い、相談室をはじめ様々な組織と連携しながら、対応できる支援体制を構築していきたいと考えている。

多読室利用状況報告

多読室利用状況報告

報告者：岡山陽子（大学教育センター）

平成 22 年度後学期より、多読室（第 5 および第 6 講義室）が利用可能となった。この多読室では、教室の後方にロッカーが設置され、英語学習用多読用図書が収納されている。

月曜日および水曜日の午後 12 時から 5 時までは、学生が多読用図書を自由に読めるように多読室を解放した。今年度は、実験的な公開だったので、総合科目「簡単な絵本からペーパーバックへ」を取っている学生を中心に公開したが、利用者は、平均 1 日に 3～4 名だった。多読室に置いてある図書に関しては、原則として貸出を行っていないので、「シリーズものの図書が貸出でなくなっていることがなく続けて読める」、「落ち着いて読める」等の意見が学生から聞かれ、利用者には好評だった。

毎週火曜日第 5 講時では、総合科目「簡単な絵本からペーパーバックへー100 万語多読多聴講座」が開講（担当教員：上田敦子・有田由紀子・岡山陽子）され、その教室として第 5・6 講義室を使用し、英語図書および CD 付英語図書を使用した多読・多聴を中心とした授業を行った。この講座は、公開授業でもあり、社会人も参加した。

また、月曜日から木曜日の午前中（月・水曜は第 1・2 講時、火曜は第 2 講時、木曜は第 1 講時）には、総合英語の授業に第 5・6 講義室を教室として使用して、共通教育棟の教室不足解消に貢献した。

平成22年度

大学教育センター活動内容

三認証評価機関・日本学術会議共催シンポジウム:「これからの大学教育の質保証のあり方—大学と評価機関の役割— 第一回:論題「わが国の質保証システムの実質化に向けて」

日時: 平成22年4月24日

場所: 上智大学

上記シンポジウムが、(財)大学基準協会、(独)大学評価・学位授与機構、(財)日本高等教育評価機構、日本学術会議、共催で開催された。講演は4題で、最後にパネルディスカッションが用意された。各講演内容を簡潔に報告する。

1) 大学教育の質保証の在り方—大学と評価機関の役割—

鈴木典比古氏(国際基督教大学学長, 大学基準協会副会長, 大学評価委員会委員長)
教育の質保証は世界的潮流である。基本は公的資金投入と成果に対する説明責任で、世界的には1980年代のレーガノミクス、サッチャーリズムに始まる。OECDではAHELO計画が進んでいて日本も参加を表明。EUではエラスムス計画があり毎年20万人以上がEU域内で留学生が交流し、複数大学での履修に基づき学位を取得。相互に単位を互換できるシステムができています。エラスムス・ムンドゥス計画ではEU域外学生・研究者を対象とした奨学金を準備。日本の参加は少ない。

日本における質保証システムは、設置審査、認証評価、JABEEなど、各種の評価システムが乱立している。それらを連動・連携し、負担軽減を図る必要がある。

大学は公共性の高い、自主的・自立的機関であり、大学の質保証の第一義的責任は大学自体にある。自らの教育プログラムについて検証し、一定水準にあることを自ら証明しなければならない。機関別認証評価では大学の自主的質保証システムが有効に機能しているかを検証する。言い換えると、学内にPDCAサイクルが恒常的に機能しているか、である。また、第三者評価機関(JABEE等)により評価プロセスの客観性を高めることが重要。

評価(とくに定性的な側面)は評価者の主観・経験・見識に依存している。評価者訓練が必要である。その育成が追いついていない。評価者の努力と貢献が認められる制度の導入が必要。

評価の基本は、各大学の長所を客観的に評価して大学全体の質の向上を図ることにある。大学は長所を主張して評価してもらい、少しの成功体験と改善の継続が評価される。

2) 認証評価の位置づけ・あるべき方向

川口昭彦（大学評価・学位授与機構特任教授）

認証評価の検証結果をまとめると、改善に資するという目的はかなり成果があった。質保証では、質に関するコンセンサスに課題がある。社会的説明責任を果たすことではかなり課題がある。

大学での教育研究活動、課題の把握には有効であり、それに対する改善促進につながっているだろう。部局間・教員間の壁が低くなり、学内基本情報の共有化が進んだ。教職員の意識改革は十分ではない。

大学の自己評価書では、大学と評価担当者で認識に差がある。大学は資料の収集・選択に困難を感じ、評価担当者は資料の不備・不足、提示方法の改善を求めている。評価書の明解さ・根拠資料の適切さは大学間の差が開いている。

学位（職業資格）は、学習によって習得した知識・能力・技能の証明である。保証されるべき大学教育の質は、

○ 大学の設置認可の遵守事項、○ 大学が設定した使命・目的の達成、○ 社会・学会が期待している教育・研究の成果、○ 国際的通用性ある教育・研究、である。

評価には、結果（アウトプット）だけでなく成果（アウトカム）の評価が必要である。これは大学の諸活動の波及効果や影響を含む。社会から期待される成果は7項目にまとめられる（略）。

アウトカムの検証にもとづく内部質保証システム（報告者注：PDCAサイクル）の構築が重要である。認証評価の役割はそのシステムが機能しているかを検証することにある。

3) わが国の質保証システムの実質化に向けて（基調報告）

滝澤博三氏（日本高等教育評価機構 評価システム改善検討委員会委員長、日本私立大学協会附置私学高等教育研究所 主幹）

認証評価システムの問題点として、評価書のエビデンスが少なく、判別（評価）が困難との声が多い。これは自己点検・評価の未成熟さによる。その目的（教育研究の向上に資する、社会への説明責任を果たす）の認識が不十分で、自主性・自発性が希薄である。それには、認証評価の性格と目標の曖昧さや質保証システム（設置審査や設置基準など）との関係の不明確さがある。また、評価疲れも指摘され、評価対象を整理して効率的にする必要もあ

る。

改善の方向として、認証評価の狙いの明確化がある。それは、自己点検評価の適切性・誠実性・有効性を評価し、その質を高めることによって大学の社会に対する説明責任と自主的な改善努力を支援することを明確にすること。

○適切性: 自己点検評価項目の定め方, 自己点検評価の体制, 現状に関する十分な資料・データの収集・分析.

○誠実性: 証拠に基づいた透明性の高い自己評価, 評価結果の開示

○有効性: 評価結果を踏まえた有効な改善策の策定とその実現のための経営サイクルの確立.

同時に、自己点検評価を本来の形にする必要がある。それは大学が自主的に定める自己点検評価項目によること、大学自身が評価基準への適合・不適合の評価をおこなうこと、そして、説明よりエビデンスに基づくこと、である。

認証評価と自己点検・評価との関係では、評価機関の定める大学評価基準は、認証評価のための要求項目として、自己点検・評価項目に含ませる必要がある。従ってそれは、大学の個性・特色を生かすよう、基本的・共通的な最小限のものにする、認証評価としての適合・不適合の評価は、要求項目についてのみおこなう。

新しい大学評価基準のイメージを提案する。

基準1 使命・目的: 大学の将来像, 社会的使命, 教育目的

基準2 学習と教授: 教育内容・方法, 学習評価, 教員組織, 学生受け入れ, 学習支援,

基準3 経営・管理

基準4 財務

基準5 自己点検・評価 (適切性, 誠実性, 有効性)

質保証システムの実質化のためには、基本が自己点検・評価であることの認識、認証評価の狙いを明確にし、評価システムの合理化・効率化が必要。

4) 大学教育の分野別質保証について

広田照幸 日本大学文理学部教授(日本学術会議 大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会 質保証の枠組み検討分科会幹事)

平成 20 年 12 月の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて(「各分野の教育における

最低限の共通性があるべきではないかという課題は必ずしも重視されてこなかった))」を受けて、日本学術会議に大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議を依頼。枠組みについては「質保証枠組み検討分科会」で、教養教育については「教養教育・共通教育検討分科会」で、大学と就職との接続については「大学と職業との接続検討分科会」で検討。今回は「質保証枠組み検討分科会」の報告をおこなう。

大学教育と学生の進路は多様であり、学習者にとっての意義という観点からコアカリキュラムの設定は困難。社会的要請としてはジェネリックな能力を求められることが多い。学生に身をつけさせるものとして、生きていくうえで重要な意味を持つもので、学びをとおして身につけていくという観点から、職業人としての、公共的課題に関わる市民としての、本源的でないみでの、「人」、である。具体的には各大学の理念と現実で向き合うしかない。

分野別質保証の基本的考え方は、大学は各分野の教育課程について、具体的な学習目標を同定して実際のカリキュラムを編成する、学生の立場に立って学習目標を具体的に示す、教育の質保証のサイクルを構築する(大学の特性、理念、現実→学習目標の設定→学習内容などの明示→カリキュラムの策定→検証)、ということである。

日本学術会議は、各大学での教育過程編成の参考に供するため、分野別の参照基準を策定する。それは：①各分野の特性の明文化、②基本的な素養の同定(知識と理解、能力：各大学で柔軟に展開できるよう、普遍的概念として記述)、③学習内容・方法・評価方法の例示、からなる。当面30程度の分野を3年程度の期間をかけて手がける予定。参照基準は各分野の教育内容の改善努力の方向付けで、教育改善の支援ツールである。参照基準の例として、教育学では「人間の可変性」である。

教養教育・共通教育検討分科会については、配布資料を要約しておく。

教養教育は 専門教育のための予備教育ではない市民教育としての再確認とその現代的な再興の方向性を探る。専門教育・教養教育の趣旨の違いを認識したうえで、バランスと相補性に配慮したカリキュラムを編成する。

教養教育をとおして市民性を涵養するには、現代的な公共性、自律を支える批判力、連帯を支える知の共通基盤の形成とコミュニケーション教育、参加型学習、教員資質の向上など、が必要。

平成 22 年度(第 47 回)国立大学教養教育実施組織会議報告

日時: 平成 22 年 5 月 27 日—28 日

場所: 愛媛県松山市

当番大学: 愛媛大学

参加大学: 全国52国立大学

日程

5 月 27 日

第一分科会: 共通教育における自然科学基礎教育の充実方法について

第二分科会: 情報教育のあり方について

第三分科会: 高大連携への取り組み状況について

第四分科会: FD/SD

5 月 28 日

文部科学省挨拶

分科会報告

全体会議: 国立大学における初年次教育

第一分科会 共通教育における自然科学基礎教育の充実方法について(提案大学: 東京農工大学)

課題として、入学者の学力低下、日本の理工系学生の基礎学力の低さ、教養部改組以降の基礎教育担当者の不足、基礎教育と専門教育の一体化の結果としての専門教育の重視傾向、予算削減による開講科目数の制約からの共通開講、学生募集を一括化する傾向、などが出てきた。これらに対して、東京農工大学では、講義の内容を絞り、概念理解中心にして考えさせる方向を模索している。

愛媛大学: 共通教育科目の中の教養科目でコア科目を設定し、その一つとして「科学リテラシー」(選択必修)を立てている。この科目は「光合成」をテーマとして、複数学部の教員が担当し、文系・理系学生を対象としたもので、講義、演示実験、実験、発表会からなる。

千葉大学: 県下で理系学部を持つ唯一の大学であるため、理系教育に力をいれている。

ここでは、主として文系学部生むけの自然科学系科目(教養展開科目)として数学など 31 科目を開講。また全学向けには「共通専門基礎科目」を開講。分野によってはクラス指定をしている。開講クラス数は296。前者は文系・理系合同クラスもあり教員は内容に苦慮。また、クラスによる受講者のばらつきは非常に大(資料によるとゼロも 3 クラス)。文系向けの物理実験は大変好評である。後者の担当は全学の教員を授業分野ごとに教員組織をつくり、この中から担当教員を出している。主任と副主任を学部から任期つきで出している。主任の働きが運営には不可欠である。この組織をセンターが統括・運営している。なお、主任・副主任には手当がつく。

島根大学：科学リテラシー習得が目的の共通教養科目と専門教育の基盤としての専門基礎教育科目の二種類がある。前者では文系・理系を横断したプログラムを想定。教育開発センターがコーディネートを担当するが、問題も多く、改革を検討中である。後者では学部とセンターでの協同の元、様々な試行をおこないながら教育デザインを検討中。平成 21 年度以降、数学・物理に関して授業を担当する総合理工学部・センター・担当事務の協働で学習サポートをおこなった。

- 1) 履修・成績データの集積・分析
- 2) 正課外学習サポートプログラム：高校補完授業を入学前教育として実施、正課授業への補習授業を開講予定
- 3) メンター制度の実施：院生が新生生の学習サポートをおこなう制度。学科・分野の理想も出る学生像を示すとともに学修・大学生活全体をサポート。メンター研修・コーディネートはセンターが担当。なお、補習授業は単位化していない。

その他に自主ゼミ制度がある。

全体的議論では、教養教育に対する責任体制(権限と最終責任)を明確にする必要性が述べられた。

第二分科会：情報教育のあり方について

出席：武重(香川大学、座長)、齋藤(新潟大学)、濱田(秋田大学)、山本(名古屋大学)、北村(滋賀大学)、眞鍋(大阪大学)、荒木(徳島大学)、淵田(九州大学)、山中

(鹿児島大学)、平田(愛媛大学)、羽瀧(茨城大学)、庭崎(愛媛大学)、泉谷(愛媛大学)

内容:

自己紹介の後、新潟大学から議題の提案理由が説明された。『高校までに情報教育が行われている現状から、ワード・エクセルのような基本的なアプリケーションの操作を教授する情報機器操作入門の科目の必要性に疑問があがっている。そのため情報倫理やアカデミックリテラシーとの連携など新しい情報教育への変換が必要であるが、どのように計画・実施するのが難しい。』このことについて他大学での考えを伺いたいとことであった。

愛媛大学から基礎科目『情報科学』の取り組みについて説明された。『入学者全員の必須科目であり、全クラスが前期に開講する。教育内容は全学共通化を図り、期末試験はオンラインテストで行う。テストは受験時間により不公平がないようにランダム出題とし、模擬テストを事前公開している。さらに、e-learning 教材を導入している。教科書および e-learning のコンテンツについては、日経 BP 社と協力して作成している。』

2つの大学からの発表をもとに、出席大学から取り組み状況が披露された。茨城大学からは『情報倫理を全学共通事項として位置付けている。その他の事項については各学部・学科の要求から構成している。今後は、リベラルアーツ(情報倫理を考える力とコンピュータとネットワークがもたらす新しい概念や問題点を考える力)、アカデミックリテラシー(情報を収集・分析・活用する力とわかりやすい文書にする力)、狭義のコンピュータリテラシー(文書処理・表計算・プレゼンテーション・プログラミングに代表される操作力)をバランスよく学ぶ必要があると考え、現在検討中である。』と回答した。担当部局の構成について質問(香川大学)があり、『大学教育センターの情報基礎教育専門部会が担い、4名で構成されている』と回答した。シラバスについてはどのようにされているのかとの質問(滋賀大学)があり、『情報倫理、コンピュータの基本、ネットワークの基本、情報検索法、ワード・エクセル・パワーポイントなどの基本アプリケーションが基本的なものであり、基本アプリケーションの部分が各学部・学科の要求によって変わる部分である。』と回答した。

情報のあり方と e-learning について情報交換がなされた。また、コンテンツに関する著作

権処理の方法について情報交換がなされた。座長から、『メディアリテラシーとして、解釈する力、表現する力、操作する力が必要であり、その点から情報教育を考える必要がある。情報倫理やネチケットに関する事項は必要不可欠であろう。』とのまとめがなされた。

(羽淵裕真 報告)

第三分科会報告： 課題：高大連携教育への取り組み状況について

(佐藤和夫・白石昌武 報告)

出席者：分科会座長(松野尾裕愛媛大学教育・学生支援機構アドミッションセンター長)他
29名(本学からは白石副学長と佐藤)

1. 座長による問題提起

大方の大学で実施している高校への出前授業や高校生向け公開授業からもう一步先に進んだ、あるいは新規の連携についての意見交換を行いたい。

2. 話題提供

1) 愛媛大学(松本長彦共通教育センター長)

① 農学部附属農業高校を改組し、総合学科の附属高校を設置した。その特色の一つが愛媛大学との高大連携であり、1年次から3年次までカリキュラムに組み込んでいる。開講形態は大学教員によるオムニバス形式の授業、オープンキャンパスや大学の実際の授業への参加などさまざまである。実験・実習も組み込んでいる。最初の卒業生は来年3月に出る。第1期生126人中、110人程度が愛媛大学への進学を希望している。ただし連携科目の単位は大学では単位にならない。

② その他

SSHへの支援、SSPへの協力、「未来の科学者養成講座」に関わる活動などを行っている。

2) 岩手大学(江本理恵大学教育総合センター准教授)

① 県教委と連携した公開講座の開催(水資源について等)。課題は受講者の確保。

② 「いわて高等教育コンソーシアム」(県内5大学)の講義を高校にテレビ会議システムで

配信。

③ 推薦入学者、AO 入試合格者への入学前教育の実施などを行っている。

3) 秋田大学(銭谷秋生教育推進総合センター教授)

① 秋田市内4高校との協定による連携授業。

② 「大学コンソーシアムあきた」(県内すべての大学を網羅)によりそれぞれの大学の得意分野を継続的に提供。

③ 8大学の研究者が八つのテーマについて「秋田戦略学」として高校生に提供(通信システムの利用により、秋田大でも他大学でも受講可能)。取得した単位は入学後に認定を行っている。

4) お茶の水女子大学(耳塚寛明副学長・教育機構長)

① 附属高校との高大連携特別教育プログラム:「7年一貫教育による女性リーダーの育成を目指す」(前学長)

② 同校との高大連携特別入試:同上プログラムの効果を確認するため、10名程度を募集。

少人数の選抜にあまりにもコスト(多大なエネルギー)がかかるという問題点もある。

3. 意見交換とまとめ

「カリキュラムの接続」、「入試」、「広報」、「基礎学力の向上」、「高校での指導内容」などについて議論が交わされた。中心議題の一つとして附属高校との連携があったため、それを持たない大多数の大学とは若干意見のかみ合わないこともあったが、共通認識として以下のようなまとめがなされた。

① 高大連携のとらえ方や範囲については各大学それぞれ異なっているが、大学教育の内容を伝え、高大間の接続を円滑にする点に共通性がある。

② 高大連携と入試を直接結びつけることには慎重に対処すべきである。重要なのは高大連携で得た知識や技能を適切に評価することである。

③ 高校での未履修科目やリメディアル教育への対処は高大連携よりも初年次教育として扱うべきである。

高大連携は大学側がイニシアチブを執り、高校の教育内容を把握した上で、大学教育の質保証を十分に配慮して実施する、というのが今回の結論であるように思われた。

(佐藤和夫・白石昌武 報告)

第四分科会：FD(ファカルティ・デベロップメント)／SD(スタッフ・デベロップメント)

自己紹介の後、座長の提案で4大学(愛媛・岩手。大阪・島根)のFD・SDの取り組みの報告を行い、他に説明を希望する大学を募り、山形大学からの報告があった。以下に特徴的な部分をまとめた。

1. 愛媛大学

マイクロ(授業改善)、ミドル(カリキュラム改善)、マクロ(組織の整備・改革)の3つのレベルでFDを実施しており、全学で教育改革を推進するために教育企画室、教育学生支援会議を設置している。

2. 岩手大学

アイアシスタントシステムによって、シラバス→授業実施→授業記録→授業改善というPDCA サイクルを実現している。匠の技プロジェクトにおいて、優れた教授技術をコンテンツ化し共有している。

3. 大阪大学

学生が参加する相互コミュニケーション型FDを実施し、学生から共通教育改善の提案がなされるなどの成果が出ている。共通教育科目別FD、共通教育賞受賞者の講演・ノウハウ集の出版など、直接的教育改善型FDを実施している。

4. 島根大学

山陰地域で教職員ネットワーク作りを行っており、合宿形式により島根大学の取り組みを講師として伝えたり、シラバスの作成法などの助言を行っている。初年次教育での新たな制度(メンター制度など)を作成したり、このような先進的なFD活動に対して島根大学内GPにより援助を行っている。

5. 山形大学(追加報告)

FDネットワーク「つばさ」による効果的なFD・SDを展開している。合宿形式のセミナーによるスキルアップ、ワークショップにより学内での課題を取り上げ改善している。教員と職員を対象として、「あっとおどろく～」シリーズを作成し、改善策のための素材を提

供し成果の共有化を図っている。

質疑応答

- ・マイクロレベル FD の対象者はどこまでか。(FD に消極的な教員の参加を促すには) → FD と教員評価を分けるべきである。
- ・SD では職員の能力開発より大学の体制を変える方が先ではないか。 → 能力開発と体制づくりを同時に進めていく必要がある。
- ・著作権にからんで、コンテンツを公開する範囲をどうしたらいいか。 → 岩手大学では、登録制にして公開範囲を限定している。学生の肖像権については、収録の際に許諾をとるようにしている。
- ・FD と SD をどのように連携させていけばいいのか。 → 島根大学では、深刻な問題をかかえているところを突破口にして、部分的に試行し、徐々に広げていっている。

まとめ(座長からの提案)

FD・SD のトレンドとして以下の 4 項目がキーワードになるのではないか。

- | | |
|-------------------|-----------|
| ① 複層化 | ② 多様化 |
| ③ 教職学(教員・職員・学生)協働 | ④ ネットワーク化 |

(勝本 真 報告)

文部科学省挨拶

配布資料に基づいて最近の施策に関する下記の説明があった。

1. 大学設置基準の改定

以下の規定を新設する

「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」文科省からは、次のコメントが寄せられた。大学の自主性、特色を優先した大学全体の取り組みとして、地域社会・産業界との連携を見据えて、期待している。就業力とは、社会的に自立できる能力であり、学士力に近い定義である。小手先の問題ではないと認識している。

その他としては、共同実施制度の概要、教育関係共同利用拠点制度について、大学等の教育情報の公開の促進、の説明があった。

全体会議：テーマ「初年次教育」提案大学の愛媛大学より取組事例の紹介があり、その後意見交換があった。愛媛大学の事例を簡潔に紹介する。

共通教育カリキュラムを「学士基礎力」の育成目的とする。その理念と教育方針は 5 項目からなる(略)。共通教育科目として、初年次科目(7 単位)、基礎科目(英語, 情報科学, 理系基礎), 教養科目(16 単位:コア科目, 主題科目), 発展科目, からなる(合計で $31 + \alpha$)。初年次科目は新生セミナー(2 単位), コース初歩学習科目(2), こころと健康(2), スポーツ(1), からなる。大学への学びの導入とスタディースキル, ソーシャルスキル(キャリア系科目), ライフスキルの習得が目的。これらの企画は共通教育センターと教育企画室で検討。

新生セミナーは全学 1 年生必修, 少人数クラス編成, でスタディスキルの習得とグループ学習をおこなう。こころと健康はライフスキルの習得が目的, 青年期のこころ(心理学), 生活の医学(生活習慣病), スポーツ(スポーツ医学), 食と健康(県栄養士による講義)からなる大クラス講義(100 名)。

事務協議会承合事項では、下記の五項目について各大学から現状が紹介された。

- 1) キャリア教育の実施状況について
- 2) 初年次における修学支援体制について
- 3) 成績評価に係る筆記試験等での不正行為(カンニング)について
- 4) 授業に係る顕彰制度について
- 5) Webによる授業アンケートの回収率について

一橋大学 FD シンポジウム「GPA 制度本格導入後の成績評価を考える」報告

日時：平成 22 年 7 月 7 日(水) 14:00～16:45

場所：一橋大学国立・東キャンパス東 1 号館 2 階 1202 教室

1. 副学長挨拶

盛誠吾一橋大学副学長（教育・学生担当）より、法人化した平成 16 年以後 GPA を大学の目標の一つに据え、議論を重ねて本年度から本格実施（卒業要件）するに至った経緯を中心に挨拶があった。

2. 趣旨説明

筒井泉雄一橋大学大学教育研究開発センター長より、GPA の本格導入に伴って生じる諸問題（学生の履修行動、教員の成績評価など）について検討するとともに、卒業要件化した他大学の経験とも照らし合わせて、今後の GPA 制度の運営や成績評価のあり方を考えたい、との趣旨説明があった。

3. 第 1 講演 青木人志氏（一橋大学法学研究科）

「GPA 制度の本格導入と課題」

1)GPA 制度は「在学生の履修行動と学習態度を適正に保つ」ことと「卒業生の質を社会に対して保証する」ことを目的として導入された。きっかけは学生アンケートに見られた苦情「成績評価が甘い、手抜き、不透明」であった。

2)まとめるまでには教員側からの相当の抵抗（「成績評価は教員個々の領域」との主張、自己の経験の一般化、巧妙な反論の展開など）苦労があった。平成 16 年以降の専門委員会発足後数々の会議を重ねて平成 22 年度の本格実施に至った。

3)特色

①経過措置（卒業要件としては GPA 「2.0」だが、今年度入学生は「1.8」としたこと）

②上書き再履修制度（評価が「1」と「0」だった科目に再挑戦できる）

③履修撤回制度（途中で止めることができる）

④最上位グレードガイドライン（A 評価「4」は A+B 「3」+C 「2」の合計の三分の一以内とする）

4)今後の課題

①成績分布・履修行動・GPA 値の推移の分析

②学生の修学指導・メンタルケアの充実

③成績評価のあり方の検討

以上の課題に対しては今年度から二つの作業部会（「低 GPA 者支援学習指導」及び「GPA 実情調査・検討」）を設置し対応している。

4. 第2講演 松塚ゆかり氏（一橋大学大学教育研究開発センター）

「GPA 本格導入のインパクト」

数値とグラフを用いて平成18年以後の成績評価を中心とする分析結果について報告があった。

- 1)成績分布：B評価が多少増えた程度
- 2)GPAの推移：学年が上がるほど下がる
 - ①就職内定後の学習動機の低下
 - ②むやみな登録・取りやめ
- 3)成績評価の高い科目に履修登録が増える傾向がある
- 4)今後の検討事項：成績評価の「バラツキ」についての分析の深化
 - ①「バラツキ」の要因
 - ②評価方法（「インプットベース」か、「アウトカムベース」かの方法の明示）

5. 第3講演 上野山達哉氏（福島大学）

「GPAの卒業要件化と学生の変化」

- 1) 概要
 - ①福島大学では学生の質保証としてGPAを平成16年10月から全学で採用しているが、卒業要件としたのは2学部4学類のうち「経済経営」学類のみ（なお、卒業要件となるのは総GPAではなく、専門科目のうち指定された40単位が対象「要卒GPA対象領域」）
 - ②卒業要件としては当初からGPA「2.0」を採用（評価区分は一般的な5段階）
 - 成績不良科目には何回でも再挑戦できる（例外あり）
 - 「未完了手続き」（病気や事故などの理由がある場合GPA対象科目からはずす）
 - 不服申し立て制度がある
 - ③キャップ制の採用（1学期：最大24単位[他に+集中講義2単位]）
- 2)実施後の傾向
 - ①GPAの数値は年とともに向上
 - ②ただし、2.0未満も増加
 - ③難しい科目を避ける傾向（関心はあってもリスクを避ける。←学生同士の情報交換が大きな役割を果たしている模様）。→履修全体が平板化。単位をたくさん取る学生が減少。

6. ディスカッション

上記5人をパネラーとして会場との意見交換が行われた。一橋大学が主催者だったこともあり、質問の多くはゲスト講演者の上野山氏に向けられた。議論の中心はGPA制度のメリット・デメリットであった。

1)メリット

成績不振者（原因の主なものとして：夜間アルバイト、サークル活動への入れ込み、引きこもりなど）を早期に見つけ出しやすく、指導の効果が上がる。

2)デメリット

履修行動が平板化し、学生の関心や意欲に基づく「冒険的な」履修が減少している。

7. まとめ

- 1)一橋大学、福島大学（一部）とも GPA を卒業要件として正式に採用している。
- 2)いずれもアメリカ型の厳格な制度ではなく、質の保証を旨としながらも学生指導にメリットを見出している。
- 3)導入までには多くの議論が重ねられ、長い時間がかかった（一橋大学）。

（文責：佐藤和夫）

第1回教育 IT ソリューション EXPO 出張報告

日時：2010年7月9日

会場：東京ビッグサイト

報告者：宇野美由紀

用務：教育 IT ソリューション EXPO 会場でのセミナー出席・展示場での情報収集

- セミナー出席：北海道情報大学の e ラーニング活用事例（報告者：北海道情報大学副学長 富士隆）

北海道情報大学では、平成17年から主に情報処理教育科目で学習者適応型 e-learning システムとして POLITE を構築・使用している。システム構築の費用は現代 GP 「IT による IT 人材育成フレームの構築」から支出されている。この GP の目的は、学習者適応型 e-learning システムの開発、科目コンテンツの開発、システムによる正規授業の実施である。

当該システムのコンテンツは初級・中級・上級の三種類に分かれている。中級が教員が作成したコンテンツで、講義の動画が中心である。初級は、中級の動画すなわち教員の講義をもとに、成績が優秀な学生に作成させた教材である。上級は、その単元について、民間の IT 企業の講師が作成した教材である。初級のコンテンツは、学生の視点から分かりにくい点を詳しく解説しており、教材を作成した学生自身の理解力や企画力の向上にも役立っているそうである。当該科目はアプリケーションスペシャリスト（IT スキル標準）の育成を目標に掲げており、上級のコンテンツは IT 企業の視点からより深い内容を取り扱っている。受講者には科目中の単元を終えるごとにテストを受験させ、次の単元のレベルを決定する。テストの成績が基準に満たない受講者にはもう一度同じ単元を受けさせる。この方式を正規の授業の中に取りこむことで成績の押し上げができるそうである。

また、e-learning の効果を測定するため、学生を2分割して片方には対面授業を行い、もう一方には e-learning 授業を行って成績を比較している。講義形式授業ではプレテスト・ポストテストの結果において e-learning のほうが対面授業よりも点数の伸びが大きく、演習形式の授業ではポストテストの結果において e-learning と対面形式で平均点の差がないという結果が出たそうである。昨今の学生（特に情報科目受講生だからと考えられるが）は情報機器の操作に抵抗がなく、スムーズに e-learning システムの操作に順応するが、質問などを積極的に行う学生は少ない。授業動画やコンテンツに学生からの質問とそれに対する回答をひも付けすることで、学生が理解しにくいと感じる部分を効率的にフォローできるようである。

また、教員が作成したコンテンツをリポジトリに集め、受講者からの質問や意見を反映させて教材をブラッシュアップする作業により、教材作成それ自体が FD にもつながっているということであった。

- 展示会ブース訪問：講義動画の録画・編集システム、各種データ分析ソリューション、教育情報システム統合ソリューション、複数システム間の ID 管理統合ツール、端末 PC 運用管理ソフトウェア・システムを中心に情報収集した。

第1回教育ITソリューションEXPO 報告書

日時 平成22年7月10日（開催7/8~10）

場所 東京ビッグサイト

報告者 吉田宏二

報告

教育用ハードウェア、教材・教育コンテンツ、学校向けセキュリティ、eラーニング・授業配信、学校業務支援の5ゾーンに分かれ、総計310社にのぼる企業のブースが設けられていた。対象は、大学、高校、中学校、小学校、教育委員会であり、あらゆる教育現場で、講義や教務のあらゆる場面、様々な問題解決に活用できるITCソリューションが紹介された。私が興味を持ったブースをいくつか以下に紹介する。

eラーニング・授業配信ゾーンでは、授業を撮影（録画）して配信するシステム（遠隔授業にも利用可）や学習用教材配信システム（LMS）が数多く紹介されていた。ただし、そのほとんどは茨大で利用するには、レナンディとは相容れないものであるため、新しいシステムとして導入する必要があり、大きな投資を必要とする。一方、国立情報学研究所が次世代情報共有基盤システムとして開発しオープンソースとして提供され、eラーニングシステムとしても利用可能な「NetCommons」の紹介があった。レナンディの中でも利用可能で、ビジュアル的なeラーニングの演習問題を簡便に作成できるようなソフトについて個人的には興味をもっていたが、そのようなものは見当たらなかった。

教材・教育コンテンツゾーンでは、教育開発出版株式会社がインターネット型個別学習システム「eトレ」を紹介していた。これは豊富なデータベースから一人ひとりにあった学習プリント（解説、練習問題、確認テスト）が簡単に用意できる、自主学习サポートシステムである。科目と単元を選べば理解度に応じて自動的にプリントが選択され、小学校1年生から高校3年生までの主要科目がそろえられている。学習状況も教員が把握することも可能であり、リメディアル教育や入学前教育に役立つと考えられる。またシャープシステムプロダクトはニンテンドーDSを用いた学習ソフトを紹介した。

その他のゾーンでは、アイ・エー・シー社から発売されているマークシートソフト「正一郎」はマークシート用紙を専用エディタで作成編集し、普通紙（コピー用紙）にプリントアウトしマークシート用紙を作成し、回収後は、市販スキャナで読取、集計・採点までするという特徴をもったオールインワンソフトである。さらに記述式のアンケートにも対応しており本学で行っている授業アンケートの経費節減と省力化に利用できるのではと思われる。PLUSからは電子黒板「UPIC」が紹介された。マグネットシート式であるので簡単に黒板に装着することができ、授業でビジュアル的な資料を見せるときなどなどに活用でき、また専用ペンで書き込むこともできるので、教育効果を高めるには面白いアイテムであると感じた。

あわせて学校教育専門セミナーが開催されたが、プログラムの都合上参加できなかった。

平成 22 年度大学評価フォーラム「学習成果を軸とした質保証システムの確立—学習成果の効果的なアセスメント・可視化・発信とは—」報告

日時:平成 22 年 8 月 2 日

場所:一橋記念講堂(学術総合センター)

主催: 大学評価・学位授与機構

出席者: 佐藤和夫・森野 浩(報告者)

プログラム

1. 開会挨拶: 平野眞一(機構長)
2. 講演1: 「これからの質保証システム」川口昭彦(機構特任教授)
3. 講演2: 「学生のまなびを評価する:学習成果アセスメントへのCOMMON SENSEアプローチ」Linda Suskie (Vice President at the Middle Sates Commission on Higher Education)
4. パネルディスカッション: 「学習成果を軸とした質保証システムのありかた」 川口昭彦, Linda Suskie, 新井健一(株式会社 ベネッセコーポレーション), 有信睦弘(東京大学監事), 濱口哲(新潟大学副学長)
5. 閉会挨拶: 岡本和夫(機構理事)

報告

1. 挨拶: 認証評価文化の醸成と定着を目的に進めてきた。まだ発展途上の段階にある。今後も学習成果・質保証を社会にアピールしていく必要がある。
2. 講演1: これまでの認証評価の検証結果として, 1)「質の保証」の「質」に関するコンセンサスに課題がある, 2)社会的説明責任(情報公開)の達成状況が不十分である, 3)教育研究上の目的・目標が抽象的である, 4)組織としてのPDCAサイクルの一貫性が不足している, 5)評価疲れは外部・内部環境の分析不足による, ことが指摘できる。

大学を取りまく環境として, 国際的・大学間競争, 進学率の高さへの対応, 安定社会構築のための人材養成ニーズ, 教育の質に対する信頼の確立, などがある。学位の質(職業資格の質)を保証し, 学習成果を社会に提示する必要がある。

保証すべき質は, 授与される学位(職業資格)と学生が習得した知識・能力・技能の証明である。各大学は自ら保証することができる内部質保証システムを構築することが不可欠。

認証評価はそのシステムの機能を検証する。システムの十分な機能が自立的組織体の証明。成果(アウトカムズ)とは投入・活動の結果(アウトプット)の効果や影響までを含んだもの。学習成果とは、ある学習過程を終了したときに、どのような知識・技能・能力の獲得が期待できるかに関する表明である。学士課程教育をとおして「何ができるようになるか」、「学習成果があがっているか」、「学習成果をいかに測定するか」が求められる。

3. 講演2: 大学教育問題では、米国も日本と同じ課題を抱えている。学生の学習アセスメントの前提は、学生に何を学んでほしいかを決め、それを必ず学ぶようにすること。明確且つ重要な目標の設定が必要: 最も学んでほしいものは何か、そのことで何をすることができなのか、なぜそれなのか、そのためにどのように支援するのか、学びをどのように把握するのか、などである。

良いアセスは、それが差異をもたらし、教育の改善につながる。アセスの結果を公表・宣伝に活用すること、重要な決定のための情報として活用することが必要。アセスの生み出す価値は時間・金額に見合ったか、そうでなければ別の方法を検討する。

コスト削減の原則として: 1) 目標を 6 個以下に設定, 2) 既存のものから始める, 3) 迅速・容易なツールを準備, 4) 現実的で柔軟な予想(アセスは学術的課題ではない), 5) 簡素で効果的な報告要件, 6) 建設的フィードバックシステム, がある。

良いアセスは高い評価をもたらし、合理性を持った精確で真実性のある結果を生む。大学のリーダーはアセス推進の環境づくりが必要。

4. パネルディスカッション

発表1 新井健一

高校生/保護者にとっての大学選択の基準は、専攻したい分野で、経済的負担が少なく、就職力を身につけられる大学である。保護者は大学の役割として職業人の育成をのぞき、卒業後の就職を心配する。保護者(つまり高校進路指導者)は大学には教育内容情報よりも学費・入試情報、卒業後の就職進学情報を期待。これらの情報は発信不足と考えている。

企業が学生に求めるスキルと大学教育でのそれとはギャップがある。前者としては、チームワーク力、自己管理能力、問題解決力、リーダーシップ力、継続的学習力があるが、大学でそれを教育目標にしている大学は少数。就業力の高い学生は「汎用的能力」に優れる(自

分の考えをまとめる力など)。一方、いわゆるまじめ学生はかならずしも就業力が高くない。企業は学生が大学で何を身につけたかを見たいのである。

発表2 濱口 哲

新潟大学の学士課程教育の新システムの紹介と問題点の指摘がなされた。新方式では多様な就学目的を持つ学生を想定しての、多様な人材育成目的を持つプログラムが共存する総合大学をめざして、授業科目の全学共通化をおこない、教養科目と専門科目区分を撤廃し分野・水準表示にした。主・副プログラム体制を導入した。

学士力アセスシステムでは、学生の諸活動情報の蓄積としてカルテフェース、学習活動の主体的蓄積としてポートフォリオフェーズ、学習成果の可視化としてスケールフェーズ、から構成される。これらを踏まえてセメスターアセス(リフレクションと学習デザイン)を行なう。副プログラムは教養教育の機能の代替と考えたが主プログラムとの関連が明確でなく、履修学生がまだ多くないことが課題ということであった。

平成 22 年度全国大学教育研究センター等協議会 報告

日時：平成 22 年 8 月 25 日

場所：東北大学百周年記念会館

内容：協議会総会に先立ってシンポジウム「大学教育のネットワークと連携・協力の今後」が開催された。

1. 「大学教育のネットワークと連携・協力の今後」

平成22年度より「教育関係共同利用拠点」制度(趣旨:各大学の有する人的・物的資源の共同利用等を推進することで大学教育全体として多様かつ高度な教育を展開していく大学の取組を支援するもの)が始まり、東北大学、名古屋大学、京都大学、愛媛大学の教育センターが認定された。そこで、各センターの活動を紹介し、今後の連携をさぐった。

1) 名古屋大学高等教育研究センター「FD・SD教育改善支援拠点と大学教育開発の今後」：2008年にFD・SDコンソーシアム名古屋(名古屋市山手地区の国私立4大学のネットワーク)を設立。FD・SD教材の開発、集合研修の実施(シラバスの書き方、多人数授業法、TA研修、新任教員研修など)、分野別研究会の支援(名古屋経済学教育研究会、等を対象)、教員に対する支援(授業の悩み相談、学生学習支援、をおこなっている。特徴は、自発的な授業改善を図る、自己研修を組織的に支援する、教育改善のための研究を行う、など。

参考ウェブサイト:

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>; <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/consort/>

2) 京都大学高等教育研究開発推進センター「相互研修型FD共同利用拠点」について：相互研修型FDという理念にもと付いて活動してきた。学内、地域、全国、国際各レベルにおいて連携・協働をはかる。業務としては、FD研修・研究会の企画・実施、FD相談窓口、FDネットワーク視線、FDオンライン環境提供(MOST)、FD広報と研究(授業評価研究など)。大学院生のための教育実践講座、文学研究科プレFD研修会の実施、関西地区FD連絡協議会の下支え、全国各大学のFD活動の交流と連携(FDネットワーク代表者会議の開催など)、海外のFD関連組織との交流・共同研究など。今後は財政基盤の安定化と業務の合理化が必要。

3) 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室「教職員能力開発拠点」一取組実績と今後の活動：研修プログラム「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)」を提供、開催。FD, SD研修、新人からリーダーまで、講義形式からワークショップ形

式まで多様な内容。マイクロレベル(新人研修)からミドルレベル(カリキュラムデザイン)、マクロレベル(FDer 研修)まで。ミドルレベルFDでは教育コーディネータ制度(学部・学科レベルの教育改革の担い手)が重要な役割を果たす:カリキュラムのPDCAサイクルを回すこと(カリキュラムプランニングからカリキュラムアセスメントまで)。

拠点事業としては、研修講師派遣、訪問対応、研修プログラムの提供、教材等提供、FD/SD指導者の支援、その他。

3) 東北大学高等教育開発推進センター「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」: 拠点の概要は以下の二つ。

1) 新任教員・中堅教員・中核教員ステージに対応した能力開発プログラムの開発・提供、職員の専門性を高めるプログラムの開発・提供、履修証明プログラムによる専門性開発(Professional Development)を進める高度な専門人材の育成。

2) 国際連携を活用した世界水準の大学教員養成プログラム(PFFP: Preparing Future Faculty Program)開発: 博士課程学生・修了者・教員をPFFP(現在はスタンフォード大・メルボルン大でのインターンシップ)に派遣し、最先端実践能力を育成、同プログラムを踏まえ、日本の大学教育にふさわしいプログラムの開発。背景として、国際的に大学院で教育力の養成が重点化されてきていることがある。大学教員の専門性の定義として、専門分野の研究能力、専門教育及び教授能力(専門分野の知識構造を次世代に伝達する能力)、学生指導力(学生を指導して教養ある市民・専門人を育成する能力)として捉える。PFFPの必要性の認識、政府などによる長期的な取組、個人から専門学会までの連携によるコンテンツ開発、が求められる。

総合討論では、教育業績評価の在り方と人事制度への組み込み、教育センターへの期待業務の把握、FDの成果指標の在り方、等について意見の交換があった。業績評価ではFD研修会の修了証制度、成果指標では学生アンケート結果などが示唆された。

2. 協議会総会

新加盟機関として富山大学大学教育支援センター(平成22年4月設立、専任1名、兼任1名)と北陸先端科学技術大学院大学(JAIST) 大学院教育イニシアティブセンターが承認された。協議会会則の変更が承認された。次年度開催校は一橋大学。

(文責: 森野 浩)

大学eラーニング協議会第5部会ミーティング報告

日時 平成22年8月29日13:00~16:00

場所 千歳科学技術大学

参加大学 千歳科学大学、金沢大学、熊本大学、信州大学、帝塚山大学、電気通信大学、長岡技術科学大学、法政大学、九州工業大学、北海道薬科大学、北星学園大学、札幌医科大学、茨城大学（、金沢電子出版株式会社）

報告者 吉田宏二

報告

第5部会が扱う主題は、緩やかな大学連携におけるeラーニング教材共有・システム連携である。教材共有に関しては、それぞれの大学が保有するeラーニング教材を共有する仕組みやあるいは共同開発する仕組みを検討する。またシステム連携については、各大学が保有するLMS同士で履修状況の共有化を図れる仕組みを検討する。

今回のミーティングの主な議題は大学間の教材共有に関してであった。そこでは2つの仕組みが議長である千歳科学技術大学より提案され、検討された。第1案は、eラーニング教材の中でも、それだけで15回の授業で利用可能なほどの完成度の高い教材についてである。そのような教材については、各大学が教材開発に大きな投資をしていると考えられるので、著作権自体は作成した各大学が保有しつづける。そして提供を受けた大学は使い勝手などの利用情報を教材提供大学に返し、教材をよりよいものへと改編していく。第2案は完成度の低いもので、例えば一部の単元のコンテンツや素材といったものに対してである。この場合は協議会に著作権を移譲して、参加大学が利用改編しながらコンテンツを増やしていくというものである。

第1案に関しては、協議会の関与の仕方として、提供する大学と利用したい大学のマッチングに行く程度ではいいのではないかという意見が大勢を占めた。そして当事者間で具体的なルールを作ればいいのではないかということである。さらに実際に共有するときには、提供する大学が利用する側にアクセス権を与えるというような方法がいいのではないかということになった。また第2案に関しては著作権の移譲についての問題点が挙げられた。

今後共有に向けた取り組みを進めるために、各大学が具体的にどのような教材を保有しているのか、またどのような教材の提供を受けたいかについて調査することになった。さらに最近大学は、単位の実質化に伴い15回の授業の完全実施が求められている。そこで増えた授業時間をeラーニングを使った授業で代替するという流れができつつあるようである。そこで具体的に各大学の状況についてもあわせて調査することとした。

また部会の再編により今後はこの部会を第3部会と称することとした。

平成 22 年度教育著作権セミナー出張報告書

大学教育センター・西尾由里

日時：平成 22 年 9 月 6 日（月） 13：00～17：00

場所：東京農工大学 府中キャンパス

講師：放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター 尾崎史郎氏

著作権のセミナーにおいて、特に教育に関係する事項を報告する。

1. 著作権とは何か

著作物とは「思想または感情を創作物に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するもの」であり、創った人の考えやその人なりの表現があればよい。単なるデータやアイデアは著作物ではない。

著作者とは「著作物を創作する者」である。

著作者の権利は著作者人格権と著作権がある。

著作者人格権：譲渡・相続不可

著作権（財産権）：譲渡・相続可

○複製権：ディスクやサーバーへの蓄積も複製

○公衆送信権：自動公衆送信、受信者がアクセスした著作物だけが自動的に送信される（ホームページ等）。

*著作物を著作者の許可なく e-ラーニングなどサーバーに入れておいて学生が何度でもアクセスできる場合は公衆送信権を侵害することになる。

2. 権利制限とは何か

(1) 授業の教材として使用するために複製することを認める規定

条件①小中高大学高専などの営利を目的としない教育機関であること

②授業担当教員又はその授業を受けるものが複製すること

③本人の授業で使用する

④授業で必要とする限度内であること

⑤既に公表された著作物であること

⑥著作権者の利益を不当に害さないこと

⑦慣行があるときは「出所の明示」をすること

(2) 教育機関における公衆送信、対面授業で用いている教材を別の授業を受けているものに同時中継することを認める

*主会場の同時中継するための規定であり e-ラーニングに適用することは困難

(3) 試験問題としての複製・送信、著作物を使って試験問題を作成・配布したり、インターネット試験などで試験問題の送信（必要な限度内）は認められる。*入試修了後、

過去問題として入試問題をホームページに載せたり、印刷したりする場合は著作者に許可が必要。

(6) 引用、著作物を引用して利用することを認めるもの

- ①既に公表されたもの
- ②「公正な慣行」に合致、引用部分が明確に区別でき、必然性があること
- ③正当な範囲内、自らの著作物が「主」で著作物が「従」
- ④「出所の明示」をすること

(7) 情報解析のための複製 (平成 21 年制定)

画像解析・音声解析・言語解析・ウェブ情報解析などコンピュータによる情報解析を行うために、著作物を記録媒体へ記録・翻訳することを認める規定

3. その他

・法人著作 (職務著作)

著作者は自然人が原則だが、以下の要件をすべて満たせば、法人が著作者となる。

- ① 法人の発意に基づく
- ② 法人の業務に従事する者が作成する
- ③ 職務上作成する
- ④ 公表するときは法人名義で公表される
- ⑤ 契約や就業規則に従業員を著作者とするという定めがない

例えば、入試問題や教務の人が教務用プログラムなどを作る場合は大学が法人になる。

*法人著作となる場合、創作に携わった従業員は著作権法上の権利を有さない。

職務発明の場合は発明者は個人で、法人がその特許権の継承した場合、従業員に相当の対価を払う必要がある。

・教育用電子著作物の再利用可能にするシステムの開発

インターネット上で供用される教育用電子著作物の利用を促進するために、現著作者と改変著作者、利用者との著作権合意を支援するシステムが開発されつつある。

清水康敬・尾崎史朗. (2010). 『日本教育工学論文誌』 34, (1), 77-86.

大学教育・学生支援GP「学習サポーター制度による教育力の進化」に係る『基礎学力向上に関する研究会』報告

日時 平成22年11月5日10:20~17:30

場所 長岡技術科学大学 マルチメディアセンター

報告者 吉田宏二

報告

平成21年度文部科学省大学教育・学生支援GP「学習サポーター制度による教育力の進化」の一環として、基礎学力向上に関する研究会が長岡技術科学大学で開催された。本研究会のテーマは、「上級生が下級生を教える」であり、年々多様化する入学生の学習支援の在り方が議論された。

この研究会は4つの事例報告、特別講演、パネルディスカッションで構成された。それぞれの概要を以下に報告する。

1. 中川健治(長岡技術科学大学准教授・共通教育センター)

「学習サポーター制度の現状と今後の課題」

長岡技術科学大学では共通教育センターを中心に基礎学力不足者に対する学力向上策の一環として平成18年度から「学習サポーター制度」を開始している。これは基礎学力に不安を感じる1~3年生の対象に、学力支援に関する希望をとり、希望者3名に対しサポーターと呼ばれる大学院生1名が配置され、毎週1回90分の学習支援を行うという制度である。平成21年度には支援を受ける学生が200名を越え、活発に活動が行われている。また指導内容の報告がシステム化され、FDにも有効に利用されている。さらに、一定の場所に一定時間、サポーターが待機して学生の学習相談を受けるサポートスペースも今年度より開始した。ただし、こちらの方は利用率が低く、場所や時間を変えるなど利用率アップへの試行錯誤を繰り返しているところである。またこれらのサポートは学生の自主性に任しているため、本来サポートを受けてほしい学生が受けに来ていないという問題点を抱えている。

2. 林 光緒(広島大学教授・学習支援室室長)

「広島大学での学習支援室の取り組みについて」

広島大学では総合科学部を中心に学習支援室を平成13年より設置している。授業がある期間の夕方の時間帯に英語、数学、物理・化学について図書館の個室で毎日相談を受けている。指導員は大学院生であり、支援の内容によっては教員が受け継ぐという形式で実施している。年間の利用者はすべての教科合わせて130名程度となっており、稼働率としてはそれほど高くないものの、有効性が認められ、大学の学習支援の中心と位置付けられ、予算等も優先して配分されている。利用の拡大と指導員の確保が大きな問題となっている。

3. 森 朋子(島根大学准教授・教育開発センター企画部門部門長)

「先輩が後輩を効果的にサポートするその背景にある学習理論」

島根大学では教育開発センターが主導し総合理工学部物質科学科の物理分野を中心にメンター制度を実施し、成果を上げている。ここでのメンターとは、通常のTAよりもより大きな教育権限(自主性も含めた)を与えたTAを指し、人間性も含めて優秀な大学院生が任命されその職に当たる。メンターの仕事は、通常授業の演習の時間に担当教員とともに学生の指導に当たるとともに、授業外では学習室の相談員を務める。さらに学生の立場から特に躓きそうな点に関する課題の作成なども行う。授業で教えてもらった先輩が学習質の相談員となっていることから、相談件数も多く、学習室の稼働率も高い。特に物理分野では著しい学力の向上がみられた。

4. 箕田 充志(松江工業高等専門学校准教授・LT推進室副室長)

「ラーニング/ティーチングによる基礎学力の向上」

独自調査の結果から得られた高専学生の低いコミュニケーション能力を改善させる一環として、ラーニング・ティーチング演習という授業科目を立ち上げた。この科目を履修する4,5年生は、1~3年生の基礎学力の低い学生の指導員となり下級生を教えることをとおしてコミュニケーション能力の向上を目指す。学生による学習指導を指導する学生の視点からとらえた取り組みといえる。

5. 特別講演:長谷川雅一(新潟県立教育センター指導主事・教育支援課)

「上級生が下級生を教えること」

「学習指導要領をめぐる動き」、「異学年間の学び合いの例」、「教える時に気をつけていること」3つの話題が取り上げられた。「学習指導要領をめぐる動き」では、まず国際的な動向としてキー・コンピテンシーズがとりあげられた。これは3つの要素、「知識・技能の活用」、「人間関係の形成能力」、「自律的に行動する能力」からなっている。またPISAによると日本の若者の科学的に考える能力が年々低下している。そして、この動向を受けた学習指導要領の変遷が紹介された。2011年から始まる新学習指導要領では知識、道徳、体力のバランスのとれた力である生きる力の育成を目指し、授業時間も増加に転じることが紹介された。「異学年間の学び合いの例」、「教える時に気をつけていること」では物理教員として高校で教鞭をとっていたときの取り組みが紹介された。高校生と中学生との交流学习を例に挙げ異学年間の学び合いの有用性や長期記憶と短期記憶の観点から授業での復習や実験・演示の重要性を紹介した。

パネルディスカッション

学習支援の在り方や共通する問題点などが議論された。またこの中で茨城大学の取り組みを紹介した。

平成22年度大学教育センター活動内容

大学教育センター活動の経過

年 月 日 事 項

平成22年

4月27日(火) 大学教育センター会議(第1回)

- ・学生自習室の活用について
- ・平成22年度茨城大学オープンキャンパスの参加計画について
- ・e-ラーニングの取り決めについて
- ・「理系質問室」について
- ・三の丸庁舎サテライト教室について

5月20日(水) 大学教育センター専門部会長会議(第1回)

- ・平成21年度教養科目推奨授業の選定について
- ・平成22年度前学期授業アンケートについて

5月20日(水) 大学教育センター基礎教育運営委員会(第1回)

- ・平成21年度推奨授業の選定について
- ・茨苑祭準備に伴う休講措置について
- ・平成22年度非常勤講師雇用計画の変更について
- ・大学教育センター非常勤講師採用に関する申し合わせについて

5月25日(水) 大学教育センター会議(第2回)

- ・平成21年度推奨授業について
- ・茨城大学FDネットワーク(IFDN)構想について
- ・平成22年度大学教育センター運営費について

5月27日(木) 平成22年度国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会

～28日(金) (主催：富山大学)

- ・キャリア教育の実施状況について
- ・初年次における修学支援体制について
- ・成績評価に係る筆記試験等での不正行為(カンニング)について
- ・授業に係る顕彰制度について
- ・Webによる授業アンケートの回収率について

- 6月 3日 (木) 大学教育センター専門部会長会議 (第2回)
 ・平成22年度教養科目の授業アンケートについて
- 6月24日 (木) 大学教育センター基礎教育運営委員会 (第2回)
 ・分野別基礎科目の授業公開について
 ・平成23年度教養バンドについて
 ・平成23年度教養科目ガイドラインについて
 ・平成22年度後学期教養科目「事前申告」の実施について
 ・平成22年度総合科目の追加開講について
 ・平成22年度非常勤講師雇用計画の変更について
- 6月29日 (火) 大学教育センター会議 (第3回)
 ・その他
- 7月27日 (火) 大学教育センター専門部会長会議 (第3回)
 ・平成23年度教養教育基本計画について
- 8月 3日 (火) 大学教育センター会議 (第4回)
 ・平成22年度教育改善経費について
 ・「大学キャンパス内交通整理体制について」の意見について
 ・技術者ALCについて
- 8月 5日 (木) 大学教育センター基礎教育運営委員会 (第3回)
 ・平成23年度教養教育の基本計画 (案) について
 ・平成23年度茨城大学 学年暦 (案) について
 ・平成23年度新入生オリエンテーション日程表 (案) について
 ・平成23年度教養バンドについて
 ・平成23年度教養科目ガイドラインについて
 ・平成23年度分野別基礎及び主題別ゼミナールの開講バンドについて
 ・平成22年度非常勤講師雇用計画の変更について
- 9月28日 (火) 大学教育センター会議 (第5回)
 ・平成22年度教育シンポジウムと大教センターFD計画について
- 9月30日 (木) 大学教育センター専門部会長会議 (第4回)
 ・平成23年度教養教育実施計画 (1次案) について
 ・教養教育の精選に関する検討状況について

- 9月30日(木) 大学教育センター基礎教育運営委員会(第4回)
- ・平成23年度茨城大学学年暦(案)について
 - ・平成23年度新入生オリエンテーション日程表(案)について
 - ・平成22年度大学教育センターシンポジウム及びセンターFDについて
 - ・平成22年度非常勤講師雇用計画の変更について
 - ・平成22年度非常勤講師時間センター保留分の使用計画について
- 9月30日(木) 第46回12大学教養教育実施組織代表者会議・事務協議会
 ～10月1日(金) (主催:富山大学)
- ・学位授与方針、教育課程編成方針と教養教育について
 - ・厳格な成績評価への取組について
 - ・定期試験期間を含む授業時間について
 - ・教養教育の授業担当者に対する教養教育の実施体制及びカリキュラムなどの説明について
 - ・修学支援の取り組みについて
 - ・教養科目における大人数クラスの教育方法について
 - ・台風など非常時における授業・学期末試験等の取扱いについて
- 10月26日(日) 大学教育センター会議(第6回)
- ・大学生の就業力育成支援事業採択について
 - ・大学の財政と非常勤講師時間問題について
- 10月28日(木) 大学教育センター基礎教育運営委員会(第5回)
- ・平成23年度教養教育実施計画(2次案)について
 - ・大学教育センター規則等の一部改正について
 - ・平成22年度非常勤講師時間センター保留分の使用計画について
- 11月25日(火) 大学教育センター基礎教育運営委員会(第6回)
- ・平成22年度非常勤講師雇用計画の変更について
- 11月30日(火) 大学教育センター会議(第7回)
- ・各部からの報告
 - ・大学教育センターウェブサイトリニューアルについて
- 12月21日(火) 大学教育センター会議(第8回)
- ・共通教育棟再整備ワーキング報告について
- 12月22日(水) 茨城大学全学教育シンポジウム

「茨城大学のGPA制度導入にむけて」
講師 米山高生（一橋大学大学院商学研究科教授）

- 1月25日（火） 大学教育センター会議（第9回）
・ローザプルムラ次号(第42号)の内容について
・アルク、レナンディマニュアルの作成・配布について
- 1月27日（火） 大学教育センター基礎教育運営委員会（第7回）
・平成23年度教養教育実施計画の変更について
・茨城大学における教養科目に係る履修規則の一部改正について
・平成22年度非常勤講師雇用計画の変更について
・平成23年度非常勤講師任用計画について
・平成23年度非常勤講師時間センター長保留分の使用について
・就業力育成GPインターンシップコーディネータ採用について
- 1月31日（月） 茨城大学全学FD
「大学教育の分野別質保証の在り方と21世紀の教養教育について」
講師 北原 和夫 氏（オスマー記念科学教授〔国際基督教大学教養学部〕）
- 2月18日（金） 茨城大学大学教育センターFD
「大人数講義法の基本スキル～よい講義をするために～」
講師 小林 直人 氏（愛媛大学教育・学生支援機構副機構長／教育企画室長／医学系研究科教授）
- 2月22日（火） 大学教育センター会議（第10回）
・その他
- 2月23日（水） 大学教育センター基礎教育運営委員会（第8回）
・平成22年度非常勤講師雇用計画の変更について
・平成23年度非常勤講師任用計画について
・大学教育センター規則等の一部改正について
- 3月29日（火） 大学教育センター会議（第11回）
・個別空調の中央制御化について
・ローザ・プルムラ第42号について

平成22年度大学教育センター関係委員名簿

【基礎教育運営委員会委員】

センター長 森野 浩 (理学部)
副センター長 佐藤 和夫 (人文学部)
副センター長 勝本 真 (教育学部)
専任教員 (教育点検支援部) 梅原 守道 (大学教育センター)
専任教員 (教育点検支援部) 宇野 美由紀 (大学教育センター)
教務委員長 鈴木 栄幸 (人文学部) 木村 勝彦 (教育学部) 藤縄 明彦 (理学部)
黒澤 馨 (工学部) 久留主 泰朗 (農学部)
留学生センター専任教員 池田 庸子
学務部長 山崎 時男

【企画実施部基礎教育専門部会委員】

企画実施部長 佐藤 和夫
人文系基礎教育専門部会
部会長 深澤 安博 (人文学部)
兼務教員 加藤 篤志 (人文学部) 有富 美代子 (人文学部) 金本 節子 (人文学部)
酒井 紀美 (教育学部)
社会系基礎教育専門部会
部会長 中田 潤 (人文学部)
兼務教員 金光 男 (人文学部) 原口 弥生 (人文学部) 石井 智弥 (人文学部)
小野寺 淳 (教育学部)
自然系基礎教育専門部会
部会長 野口 高明 (理学部)
兼務教員 吉田 龍生 (理学部) 卜部 東介 (理学部) 石見 幸男 (理学部)
川田 勇三 (理学部) 伊藤 孝 (教育学部) 堀辺 忠志 (工学部)
赤羽 秀郎 (工学部) 坪井 一洋 (工学部) 井上 栄一 (農学部)
伊丹 一浩 (農学部) 吉田 宏二 (理系基礎)
総合基礎教育専門部会
部会長 安田 健一 (教育学部)
兼務教員 青山 和夫 (人文学部) 村山 朝子 (教育学部) 関 友作 (教育学部)
郡司 晴元 (教育学部)

外国語基礎教育専門部会

部会長 神田大吾 (人文学部)

兼務教員 真柳 誠 (人文学部) 鄭基成 (人文学部) 糟谷政和 (人文学部)

池田庸子 (留学生センター)

総合英語教育専門部会

部会長 斉田智里 (人文学部)

兼務教員 福田浩子 (人文学部) 高橋智之 (人文学部) 東佳史 (人文学部)

小林邦彦 (人文学部) 竝木崇康 (教育学部) 北和之 (理学部)

篠嶋 妥 (工学部) 小島俊雄 (農学部)

情報基礎教育専門部会

部会長 羽瀧裕真 (工学部)

専任教員 梅原守道 (大学教育センター) 宇野美由紀 (大学教育センター)

兼務教員 野口 宏 (IT基盤センター)

健康・スポーツ基礎教育専門部会

部会長 日下裕弘 (教育学部)

兼務教員 上地 勝 (教育学部) 寺本輝正 (教育学部) 渡邊將司 (教育学部)

理系基礎教育部 小口祐一 (教育学部) 梅原守道 (大学教育センター)

吉田宏二 (大学教育センター) 渡邊辰矢 (理学部)

金幸夫 (理学部) 湊 淳 (理工学研究科) 青野友佑 (工学部)

総合英語教育部 斉田智里 (人文学部) 福田浩子 (人文学部) 小林邦彦 (人文学部)

岡山陽子 (大学教育センター) 上田敦子 (大学教育センター)

西尾由里 (大学教育センター) 有田由紀子 (大学教育センター)

【教育点検支援部】

教育点検支援部長 勝本 真

梅原守道 (大学教育センター) 宇野美由紀 (大学教育センター)

専門部会長 深澤安博 (人文学部) 中田 潤 (人文学部)

野口高明 (理学部) 安田健一 (教育学部)

神田大吾 (人文学部) 斉田智里 (人文学部)

羽瀧裕真 (工学部) 日下裕弘 (教育学部)

理系基礎教育部教科書編集委員会報告

理系基礎教育部が主導して実施している以下の科目

「微分積分Ⅰ」, 「微分積分Ⅱ」, 「力と運動」

は, シラバス・教科書を統一し, 実施されている. その教科書は, 科目ごとに編集委員会を置き, 年度ごとにその委員を定め, 作成されている.

平成 22 年度の編集委員会では, 平成 23 年度に授業で用いる教科書を作成した. 概要は以下のとおりである.

「微分積分Ⅰ教科書編集委員会」

編集委員 *梅原守道(大学教育センター), 岡裕和(工学部), 小口祐一(教育学部), 曾我日出夫(教育学部), 渡邊辰矢(理学部)

書名 「微分積分Ⅰ」 学術図書出版社 (平成 23 年 4 月第 2 版発行)

「微分積分Ⅱ教科書編集委員会」

編集委員 *岡裕和(工学部), 植木誠一郎(工学部), 梅原守道(大学教育センター), 平澤剛(工学部), 細川卓也(工学部),

書名 「微分積分Ⅱ」 学術図書出版社 (平成 23 年 9 月発行予定)

「力学教科書編集委員会」

編集委員 *吉田宏二(大学教育センター), 青野友祐(工学部), 湊淳(工学部)

書名 「大学生のための 力と運動の基礎」 JB 企画 (培風館) (平成 23 年 4 月発行)

(*は各編集委員会の代表者)

平成22年度大学教育センター
専任教員研究活動

活動内容 岡山 陽子 OKAYAMA, Yoko

(大学教育センター総合英語教育部)

1. 本年度の活動概要

担当授業は、総合英語レベル4を8コマ、レベル3を4コマ担当した。および、教養総合科目表現・言語系科目「【簡単な絵本からペーパーバックまで-100万語多読多聴講座】(後学期2単位)(共同担当者：上田敦子・有田由紀子)を担当した。また、この講座は、社会人への公開授業とした。

総合英語レベル4のコーディネータを担当し、カリキュラム・教育法構築作成と教材選定、レベル4の担当教員への日常的FD等を行った。総合英語FD担当者として総合英語第2回FD(平成23年1月19日、参加者20名)の企画実施を行った。このFDでは、総合英語の授業の質向上のために、大学教育センター推奨授業表彰者3名に総合英語の授業内容の工夫についての講演を行ってもらい、意見交換を実施した。

「大学教育センターTAガイダンス」を平成22年4月14日に実施し、TA希望の約60名の大学院生に対して、「茨城大学ティーチング・アシスタント用説明資料」を使用してTAの仕事内容を中心に説明した。

平成21～23年度の科研費補助金【基盤研究(C)課題番号：21520631-0004】「英語習得用多読的シャドーイングと多読的音読の効果的併用方法の研究と普及」を研究代表者(他研究分担者3名)として、また、平成21～23年度科学研究費補助金【基盤研究(C)課題番号：21520564-0003】「高等教育における効果的な多読授業の研究-具体的な指導法の提案と普及-」(研究代表者：上田敦子)に、研究分担者として参加し、研究・視察を行った。

2. 本年度の出張

- ①国際基督教大学におけるGPA制度についての訪問調査(平成22年8月30日)
- ②上智大学におけるGPA制度についての訪問調査(平成22年12月16日)
- ③電気通信大学酒井邦秀准教授の授業見学・意見交換(平成23年1月28日)

3. 本年度の報告・出版物

- ①学内報告：「国際基督教大学におけるGPA制度」

平成22年度茨城大学全学教育シンポジウム(平成22年12月22日)

- ②出版物：教科書：*A Clever Way to Read Economic News*. (共著者：常行敏夫他)、東京、三恵社刊、平成22年3月発行。

活動内容 西尾 由里 NISHIO, Yuri

(大学教育センター総合英語教育部)

教育内容

授業は年間 15 コマ、7 科目担当した。7 科目とも総合英語科目のレベル 3 の授業であり、前期 6 コマ、後期 6 コマ、春季集中 1 コマである。各クラスの履修者は前期・後期とも 25 名から 38 名（主に 1・2 年生）である。春季集中は 1 年生から 4 年生までの 45 名である。

総合英語レベル 3 のコーディネータを担当し、シラバス作成、教育指導法の研究、教材の検討、および非常勤教員との交渉連絡を行った。定期的に専任・非常勤の教員とのミーティングや FD を行った。本年度は教科書を変更したことに伴い、英語力にどのような変化が見られたかを検証した。学生への広報誌『ローズプリムラ』の編集委員として、平成 23 年度 4 月号掲載の総合英語関連記事を作成した。

著書

西尾由里. (2011). 『児童の英語音声知覚メカニズム—L2 学習過程において—』 ひつじ書房.

論文

Y. Nishio, & S. Miyamoto. (2010). An Exploration of the Process of Recasts between a Native English Teacher and a Japanese Student Using Multiple Perspectives, 第 49 回 JACET 全国大会要綱, 103-104.

西尾由里・宮本節子. (2010). ヒューマンなマルチメディア型文法注釈の有効性：学習過程からのアプローチ, 全国英語教育学会大阪研究大会発表予稿集, 568-569.

Y. Nishio, & K. Kobayashi. (2010). Factors of Proficiency Test to Evaluate the Integrated English Program in Ibaraki University, 茨城大学大学教育センター年報 第 14 号 (2009), 115-130.

Y. Nishio, & S. Miyamoto. (2010). Age of Onset of Reading English from the Perspectives of Affecting Roman Alphabet for Japanese Children with Acoustic Analysis and an Eye Camera, 外国語教育メディア学会 (LET) 50 周年記念全国研究大会, 発表要項, 184-185.

Y. Nishio, & M. Tsuzuki. (2010). Effectiveness of Segmental and Supra-segmental Trainings of English Pronunciation for Japanese L1 Speakers in Improvement of Intelligibility, The 16th Conference of the International Association for World Englishes, (IAWE), 94-95.

学会発表

Y. Nishio, & M. Tsuzuki. (2010). Effectiveness of Segmental and Supra-segmental Trainings of English Pronunciation for Japanese L1 Speakers in Improvement of

Intelligibility, The 16th Conference of the International Association for World Englishes, (IAWE), Vancouver.

Y. Nishio, & S. Miyamoto. (2010). Age of Onset of Reading English from the Perspectives of Affecting Roman Alphabet for Japanese Children with Acoustic Analysis and an Eye Camera, 外国語教育メディア学会 (LET) 50 周年記念全国研究大会.

西尾由里・宮本節子. (2010). ヒューマンなマルチメディア型文法注釈の有効性：学習過程からのアプローチ, 全国英語教育学会大阪研究大会.

Y. Nishio, & S. Miyamoto. (2010). An Exploration of the Process of Recasts between a Native English Teacher and a Japanese Student Using Multiple Perspectives, 第 49 回 JACET 全国大会.

研究助成

H22 年度 文部科学省研究費補助金 (基盤 C) (20520447) 研究分担者『コミュニケーションの阻害要因となる日本語母語話者の英語音特性の考察』

H22 年度 文部科学省研究費補助金 (萌芽) (20650145) 研究協力者『協同学習過程における視線と脳活動の解明：バイオフィードバックへの試案』

出張

2010 年 7 月 Simon Fraser University, Vancouver, Canada, World Englishes (IAWE) 国際学会 研究発表

2010 年 8 月 横浜市立サイエンスフロンティア高校, 外国語教育メディア学会 (LET) 50 周年記念全国研究大会 研究発表

2010 年 8 月 関西大学, 全国英語教育学会大阪研究大会 研究発表

2010 年 9 月 東京農工大学, 著作権セミナー参加

2010 年 9 月 宮城大学, 第 49 回大学英語教育学会 (JACET) 全国大会 研究発表

社会的貢献

独立行政法人 日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員

(H21 年 12 月 1 日～H22 年 11 月 30 日任期)

平成 21 年度科学研究費 萌芽 1 段 書類審査を行う。

活動内容 有田 由紀子 ARITA, Yukiko

(大学教育センター総合英語教育部)

1. 本年度の活動概要

授業は 6 コマ、3 科目を担当した。すべて教養科目総合英語であった。履修学生数は 1 クラス 20 名から 28 名で計 74 名だった。

総合英語レベル 2 のコーディネータを担当し、カリキュラム・シラバス作成と教材選定・作成、試験作成を行った。レベル 2 の担当教員は非常勤講師も含めて 8 名であったが、教員への F D 及び諸連絡等も行った。

総合英語担当教員への F D としては、前学期開始前にレベル 2 担当教員に授業等に関するメールでの F D を行った。そして前期最後にレベル 2 に関する事後アンケート調査を行った。後期授業に関しては、担当教員との個別面談、メールでの連絡を適宜行った。前後期を通して、担当教員と頻繁に連絡を取るよう心がけ、総合英語授業、特にレベル 2 授業の円滑な進行及び発展に努めた。

また、総合英語の会計係として、消耗品および備品の管理、注文を行った。また、CALL に関しては、ALC NetAcademy や RENANDI の使用に関するマニュアル作成に携わり、CALL 及び、RENANDI 等を使用した授業の普及に努めた。

茨城大学総合英語に関する他の研究活動としては、昨年度 JALT (全国語学教育学会) 国際大会で発表した「プレゼンテーションスキルの効果的な教授法」に関して論文を執筆し、茨城大学大学教育センター年報第 14 号に投稿した。

2. 本年度の論文

論文: "How to Teach Presentation Skills Effectively" 茨城大学大学教育センター年報第 14 号.

活動内容 吉田 宏二

(大学教育センター企画実施部, 理系基礎教育部委員)

教育内容

授業については, 前期「力学初歩」, 「力学基礎」, 後期「物理学実験基礎」, 「自然科学の発展と利用」を担当した。「物理学実験基礎」については, 分担担当で, 担当者代表を務めた。「自然科学の発展と利用」では, 「公開授業」として社会人を4名受け入れた。どの授業においてもレナンディの利用を積極的に進め, 教材や復習テストを実施するとともに, サイトを利用した質問等のコミュニケーションにも力を入れた。

工学部の統一授業である「力と運動」について, 授業担当こそはなかったが, 小テスト問題作成やテキスト作成という側面からの支援を行った。特に2011年用に教科書の改訂を行った。

研究報告

1. 吉田宏二 “入学生の力学の基礎学力について—ブレースメントテストの分析から—”, 茨城大学大学教育センター年報第14号 (2011) 111-114.
2. Koji Yoshida, Shinya Ikeuchi, Hajime Shimizu, Satoru Okayasu, and Takashi Suzuki, “Strong Correlation among Structural, Electronic and Magnetic Properties of $\text{Sr}_2\text{Fe}_{1-x}\text{Mo}_{1-x}\text{O}_6$ ($0 \leq x \leq 1$)”, accepted in Journal of the Physical Society of Japan.

出張

1. 第1回教育ITソリューションEXPO, (2010年7月10日, 東京ビッグサイト) 参加
2. 大学eラーニング協議会第5部会ミーティング (2010年8月29日, 千歳科学技術大学) 出席
3. 大学教育・学生支援GP「学習サポーター制度による教育力の進化」に係る『基礎学力向上に関する研究会』(2010年11月5日, 長岡技術科学大学) 参加

その他の活動

- * 理系基礎教育部代表として, 理系基礎教育の企画と運営を行った。特に工学部の「力学」や物理学実験基礎などの物理部門を担当した。また理系教養教育における学習支援の一環として, 理系質問室を開室し, 前学期は週1回 (1回当たり3時間), 工学期は週2回 (1回当たり75分) を担当し, 学生からの質問・相談を受けた。
- * 力学教科書編集委員会のまとめ役として, 「大学生の力と運動の基礎」を改訂した。この本は培風館より出版され, H23年度前期授業「力と運動」のテキストとして使用される。
- * オープンキャンパスでは, 公開授業「力学のなりたち (ガリレオとニュートン)」を開講した。
- * 茨城大学入試説明会において「茨城大学の初年次理系基礎教育」と題し, 講演を行った。
- * 「物理学実験基礎」が平成21年度推奨授業として表彰された。
- * ローザ・プルムラ編集委員会委員長として, 第41号 (平成22年度10月発行) に携わった。
- * その他, 自然系基礎教育専門部会委員

活動内容

梅原 守道 (UMEHARA, Morimichi)

大学教育センター 教育点検支援部 専任教員 (職位: 講師)

(理系基礎教育部委員・情報基礎教育専門部会委員 兼務)

研究論文

- [1] M. Umehara, Temporally global behaviour of the spherically symmetric flow of a viscous and self-gravitating gas, In: *International conference on numerical analysis and applied mathematics 2010*, edited by T. E. Simos, G. Psihoyios and Ch. Tsitouras, 924-927, AIP Conf. Proc., 1281, Amer. Inst. Phys., 2010. (国際会議プロシーディングス; 査読付き)
- [2] M. Umehara and A. Tani, Free-boundary problem of the one-dimensional equations for a viscous and heat-conductive gaseous flow under the self-gravitation, submitted. (査読付き学術雑誌に投稿中)

口頭発表 (研究発表)

1. M. Umehara, Temporally global behaviour of the spherically symmetric flow of a viscous and self-gravitating gas, *International conference on numerical analysis and applied mathematics 2010*, HOTEL RODOS PALACE, Rhodes, Greece, September 19-25, 2010.
2. 梅原守道, Global behaviour of the spherically symmetric flow of a self-gravitating viscous gas over the rigid core, 日本数学会年会 (函数方程式論分科会), 早稲田大学, March 20-23, 2011 (震災により会合中止, 発表は成立).

研究助成

1. 科学研究費補助金 (日本学術振興会), 種目: 研究活動スタート支援, 研究課題名: 天体の連続体モデルの数学解析 (課題番号: 21840014), 研究代表者.

授業担当

- 微積分入門 (茨城大学前学期, 教養科目 (分野別基礎科目【自然系】), 2 単位)
- 微積分基礎 (茨城大学前学期, 教養科目 (分野別基礎科目【自然系】), 2 単位)
- 微積分 I (茨城大学前学期集中, 教養科目 (分野別基礎科目【自然系】), 2 単位)

出張 (教育やFD関連のもの)

1. 筑波大学教育 GP シンポジウム (主催: 筑波大学教養教育機構), 2011 年 3 月 4 日, 秋葉原 UDX シアター, 聴講参加.
2. 2010 年度第 16 回 FD フォーラム (主催: 大学コンソーシアム京都), 2011 年 3 月 5 日~6 日, 京都外国語大学, 聴講参加.

その他

1. 茨城大学大学教育センター 理系基礎教育部 微積分 I 教科書編集委員会, 平成 22 年度委員 (代表委員)
2. 茨城大学大学教育センター 理系基礎教育部 微積分 II 教科書編集委員会, 平成 22 年度委員
3. 大学教育センター発行ニュースレター「ローザ・ブルムラ」編集委員 (2010 年 10 月より, 委員長)
4. 出前授業 (水戸第二高校, 授業題目「現象の分析と数学」, 2010 年 10 月 18 日)

以上

活動内容 宇野 美由紀

大学教育センター教育点検支援部 (情報基礎教育専門部会, IT 基盤センター教育 IT 化推進部門兼任)

授業

- ◆ 前期：情報処理概論×2
- ◆ 夏季集中：情報処理概論×1

出張

- ◆ 教育 IT ソリューション EXPO (2010 年 7 月 9 日, 東京ビッグサイト)
- ◆ e-Learning WORLD2.0 & 大学 e ラーニング協議会第 2 回フォーラム (2010 年 7 月 29 日, 東京ビッグサイト)

出版物

論文

- ◆ Balanced subdivisions with boundary condition of two sets of points in the plane, Mikio KANO and Miyuki UNO, International Journal of Computational Geometry & Applications, vol.20, 527--541 (2010).

研究報告

- ◆ Visual Card Games for Boys and Girls, Miyuki Uno and Mikio Kano, IT2010-103 ISEC2010-107 WBS2010-82, 227--234.

学会発表

- ◆ 2つのグループのための視覚型カードゲーム, 情報セキュリティ研究会 (ISEC) (2011 年 3 月 3 日 ~2011 年 3 月 4 日, 大阪大学)
- ◆ Visual Card Games Played on Graphs, The China-Japan Joint Conference on Computational Geometry, Graphs and Applications (CGGA 2010, Dalian), November 3-6.

その他の活動

- ◆ RENANDI・ALC などの e-learning システムの管理・運営、利用者へのサポート
- ◆ RENANDI 講習会@水戸・日立・阿見キャンパス の講師
- ◆ 平成 22 年度教育改善経費での『よりよい授業実践のための「レナンディ統合 e-ラーニングシステム」活用の手引き』の執筆一部担当
- ◆ 大学教育センターウェブページリニューアル
- ◆ 大学教育センター教員として、ローザ・プルムラ編集委員会委員

平成22年度

大学教育センター一年度計画実施報告対処資料

平成22年度大学教育センター一年度計画実施報告対処表

1.教養教育の成果と改善	
習熟度別授業の充実GPA(R111a01-1)、GPAを活用した学生指導(R111a02-2)	
「一橋大学におけるGPA制度への取組」の講演	(p5)
「他大学におけるGPA制度への取組」の報告	(p10)
2.大学教育センターの改革	
全学の教育に関する点検評価および教育改革の支援(R112010-1)、教育系センターとの組織的連携(R112010-2)	
「質保証に関するシンポジウム」の報告	(p29)
3.教育の点検評価	
教育改善評価の実施(R112z18-0)	
「大人数講義法の基本スキル ～よい講義をするために～」の講演	(p41)
各基礎教育専門部会からのFD報告	(p55)
授業アンケートの結果報告	(p73)
教養科目推奨授業選定の経過及び結果	(p109)
4.学習・生活・経済支援の改革	
学習進捗管理システムの構築と運営(R113019-2)、初年次学生の学習支援(R113019-3)	
理系質問室の活動報告	(p127)
初年次学生の欠席者調査報告	(p129)
多読室利用状況報告	(p131)

大学教育センター年報編集委員会

平成22年度

委員長	勝本	真	(副センター長 教育点検支援部長)
委員	梅原	守道	(専任教員 教育点検支援部)
委員	宇野	美由紀	(専任教員 教育点検支援部)
委員	深澤	安博	(人文系基礎教育専門部会長)
委員	中田	潤	(社会系基礎教育専門部会長)
委員	野口	高明	(自然系基礎教育専門部会長)
委員	安田	健一	(総合基礎教育専門部会長)
委員	神田	大吾	(外国語基礎教育専門部会長)
委員	斉田	智里	(総合英語教育専門部会長)
委員	羽瀨	裕真	(情報基礎教育専門部会長)
委員	日下	裕弘	(健康・スポーツ基礎教育専門部会長)

この年報は、茨城大学大学教育センターの発行する年報としては第5号にあたるものであるが、同センターの前身にあたる大学教育研究開発センターの年報との連続性を考慮して通し番号を採用し、第15号とした。

発刊年月	平成23年3月
発刊	茨城大学大学教育センター
住所	〒310-8512 水戸市文京2-1-1
電話	029-228-8414
F A X	029-228-8498
印刷所	コトブキ印刷株式会社

Annual Review of
University Education Center

No.15

2011 • March

IBARAKI UNIVERSITY
University Education Center